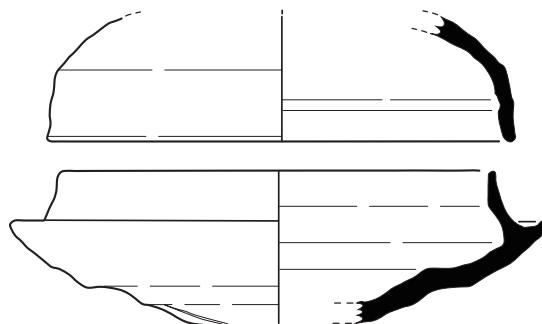


吉丸前遺跡

—一般国道208号改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—



熊本県教育委員会

2012.3

吉丸前遺跡

吉丸前遺跡は、玉名市教育委員会の調査で中世後期の溝を検出し、南北 220m 以上、東西 170m 以上の連郭式城館と推定される。東側の隣接地には吉丸の地名が残り、近世には東側に集落が広がっている。中世の段階にも東側に広がっていた可能性があり、南側に隣接地として大堂の地名が残り、主要道としての地名と寺等が立地していたとする想定もある。

この地は津に隣接した台地上にあり、重要な交通の地点として重要な位置を占めていたと考えられる。北東には菊池川の「津留」の地名も残る。

また、中世の高瀬川の津として機能した丹倍津「伊倉」や菊池川・繁根木川・浦川に囲まれた津である「高瀬」も控える。

今回は玉名市教育委員会の調査の中世後期の溝の続きを検出した。また、東側に溝が伸び、南北の別の区画溝を検出した。時期は多少ずれる可能性があるが、中世後期にさかのぼると考えられる。

また、飛鳥時代にさかのぼる竪穴建物を検出した。古代の古い段階から交通の要衝であり、集落として立地した可能性がある。また、奈良時代と推定できる掘立柱建物も検出した。竪穴建物が主要な時期であるのに掘立柱建物が採用されていることから、倉庫等の用途が考えられる。

また、掘立柱建物の時期は推定が困難であったが、中世に下るような建物も一部検出した。中世の区画溝の性格を意義づけるには十分な資料ではないが、今後の周辺の調査も併せて意義づけられればと考える。

また、遺物はあまり出土していないが、縄文時代晚期に推定できる土坑を検出した。炉穴や貯蔵穴や墓として利用された可能性がある。



調査区全景航空写真（南から）

表・図面・写真図版 目次

表

- 表1 石器観察表1
表2 土器遺物観察表1

図 面

位置図

- P1.1 図1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)
P1.2 (図1付表1)
P1.3 (図1付表2)
P1.4 図2 吉丸前遺跡周辺古地図 (1/10,000)
引用文献『玉名市史 資料篇1 絵図・地図』玉名市史編集委員会 玉名市 95頁抜粋
P1.5 (図2解説)
P1.6 図3 調査区位置図と周辺遺跡位置図 (1/5,000)
P1.7 図4 調査位置図 (1/2,000)

遺構

- P1.8 図5 V区全体遺構配置図 (1/400) / 基本土層図 (1/40) / 北東壁面土層断面図 (1/80)・土層断面図 (1/80)
P1.9 図6 繩文時代遺構配置図 (1/400)
P1.10 図7 繩文土坑 (13-SK) 平面・断面図 1 (1/30)
P1.11 図8 繩文土坑 (83・84 (141)・82・76・339-2・71・14-SK) 平面・断面図 2 (1/40)
P1.12 図9 繩文土坑 (103・125・133・131・132・121・122・70-SK) 平面・断面図 3 (1/40)
P1.13 図10 古代遺構配置図 (1/400)・04-SF断面図 (1/40)
P1.14 図11 08a-SI (102-SI) 平面・断面図 (1/60)
P1.15 図12 08a-SI (102-SI) かまど平面・断面図 (1/40)
P1.16 図13 掘立柱建物 (107a・22・23・19-SB) 平面・断面図 (1/80)
P1.17 図14 掘立柱建物 (18・21・28・315-SB) 平面・断面図 (1/80)
P1.18 図15 古代土坑 (347・340・16・339-1・15・107b・72・124・26・123・17・24・25・85-SK) 平面・断面図 (1/40)
P1.19 図16 中世遺構配置図 (1/400)
P1.20 図17 掘立柱建物 (108・104・105-SB) 平面・断面図 1 (1/80)
PL.21 図18 掘立柱建物 (30・29-SB) 平面・断面図 2 (1/80)
PL.22 図19 中世溝平面図 1 (1/200)
PL.23 図20 中世溝 (06・08b(S021)・74(S028)・75(S026)・78(S023)-SD・S027 東側) 平面図 (1/100)
(玉名市教育委員会調査 吉丸前遺跡との接合部分)
PL.24 図21 中世遺構 (74・75・78・06・08b-SD) 断面図 (1/40) (1/60)
PL.25 図22 近世(I期)主要溝配置図 (1/400)
P1.26 図23 近世(I期)溝 (78・06・08b-SD) 断面図 (1/40) (1/60)
P1.27 図24 近世(II期)～近代溝配置図 (1/400)
PL.28 図25 近世(II期)～近代溝断面図 (1/40)

遺物

- PL.29 図26 石鏃・スクレイバー実測図 (1/1)
図27 使用痕剥片・石核実測図 (2/3)
図28 石斧実測図 (1/2)
P1.30 図29 08a-SI 339・347-SK出土遺物実測図 (1/2)
図30 06・111・74・75-SD出土遺物実測図 (1/2) (1/3)
P1.31 図31 07・08b-SD 09-SX出土遺物実測図 (2/3) (1/2) (3/4)
PL.32 図32 遺物包含層出土遺物実測図 (1/2) (1/3)



調査区遠景航空写真（南から）



調査区遠景航空写真（俯瞰）



調査区東半（06-SD 他）（北から）



掘立柱建物（18・19・21-SB）、土坑（15・16-SK）（北から）



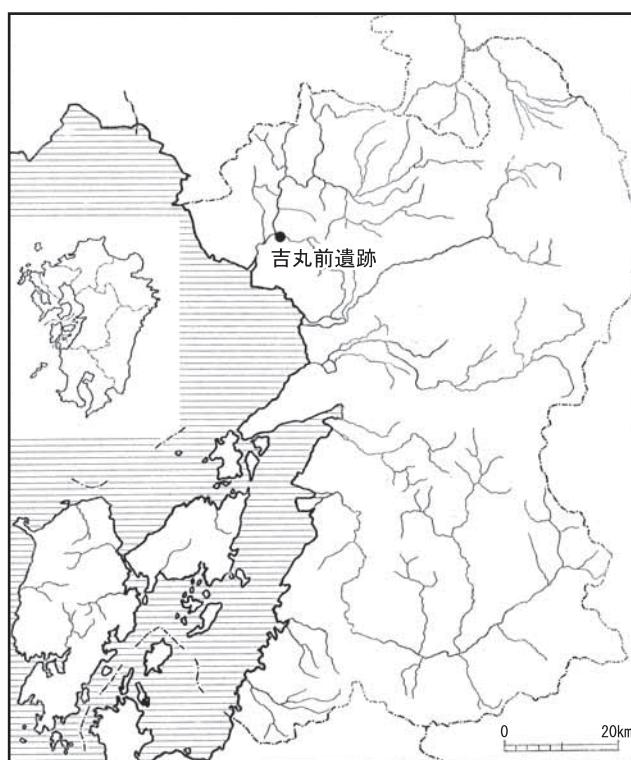
掘立柱建物（22・23-SB）ほか検出状況（南西から）



竪穴建物（08a(102)-SI）（北西から）

吉丸前遺跡

—一般国道208号 玉名バイパス改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告—



熊本県教育委員会

2012.3

序 文

熊本県教育委員会は、一般国道 208 号改築事業に伴い玉名市教育委員会とともに、埋蔵文化財の調査を実施してまいりました。今回報告する吉丸前遺跡の主要部分は玉名市教育委員会が調査を実施してまいりました。奈良時代の竪穴建物や溝等の集落のほか特筆すべきは想定で短辺（東西）170m（1町半）、南北 220m 以上にも及び方形に囲む空堀を見つけることです。連郭式の城館の区画と考えられ、遺物の時期から 14 世紀前半から 15 世紀にかけてのものと考えられています。今回はさらに南側に南北に伸びる溝等を検出しました。周辺にはまだ、城館の時代の溝の痕跡を畑の区画や里道に見いだす事ができる地域です。周辺の畑には建物が残されている可能性が大きいにあります。地域で大切にしていただきたいと思います。

また、今回検出された竪穴建物は、玉名市教育委員会が調査した奈良時代の集落よりもさらに古い 7 世紀代のものです。他に古代から中世の掘立柱建物も見つかりました。

さらに、玉名市教育委員会の調査でも検出された縄文時代の土坑も検出され、縄文時代の集落が周辺に広がっていたことが判明しました。細長い構造のその坑は、肉や魚を薰製にした坑かも知れず、昔の生活を想像させられるものです。

国道整備のバイパス工事に伴う埋蔵文化財調査を行うたびに新たな発見がえられ、熊本県における玉名の台地上の遺跡の重要性が明らかになってきました。

一方で現代の開発に伴い残されていた貴重な遺構群が姿を消しました。記録保存という形ではありますが、本報告が地域の発展とともに、未来に地域の貴重な歴史の情報として引き継がれ、活かされていくことを望んでおります。

なお、本調査を実施するにあたり、御理解とご協力をいただいた地元の皆様並びに国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所・玉名市教育委員会・地元自治会をはじめ関係機関に深く感謝申し上げたいと思います。

平成 24 年 3 月 31 日

熊本県教育長 山本 隆生

例 言

- 1 本書は、熊本県玉名市寺田に所在する吉丸前遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所の依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。調査費及び整理報告費については国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所が負担した。
- 3 遺物の整理は、熊本県教育庁文化課文化財資料室で実施した。
- 4 遺跡の発掘調査は平成15年度に実施し、整理報告作業を平成21年度から23年度まで実施した。
- 5 本書で用いる地形図は、玉名市都市計画課から提供された図幅、並びに国土地理院発行の2万5千分の1地形図、玉名市教育委員会「吉丸前遺跡」掲載図面等をもとに作成した。

また今回、地元地権者の方々に御協力を頂き、遺跡の測量の基準点測量及び水準測量は有明測量開発社に委託して実施した。

- 6 現地での写真撮影は米村 大、洲崎（水上）明子、亀田 学が行った。遺構実測は前記3人の他、原田 英佳、田畠良勝、飯塚千恵美、西嶋ヨシエ、福田ツヨ子、高津千尋、吉田ムツ子、吉川ゆかり、道口真由美、

堀田祐子、田上俊子、尾浦公治、梅林将旨が実施した。現地での掘削作業は、先程挙げた方々の他、多数の作業員の協力を得た。遺物の実測は、土器・石器を坂井（西野）由葉、渕上久史、川井田久子、平川恵里子、亀田、製図は、主に川井田久子、坂井（西野）由葉、赤星和美が実施した。遺物洗浄・接合・復元・注記等は、瀬口絹代、松本直枝、上野栄子、三井佳子、松原泰子、水牧藤美、高松孝子、富田知子、吉見さつき、吉武知佐子等が行った。

砲弾の実測及び所見は、岡本真也に協力を得た。

その他、宮崎敬士、山口節子、末武希代子、渡邊いわ子、田中知恵美、木村奈美、中島美絵に協力を得た。

遺物の写真撮影は、坂井（西野）、亀田が行い、これを渕上、上田佳奈子が補助した。

- 7 自然科学分析（花粉分析及び炭素年代測定）は株式会社古環境研究所に委託した。
- 8 本書の執筆は、亀田が執筆した。
- 9 整理後の保管は熊本県文化財資料室で保管されている。
- 10 本書の編集は、熊本県教育庁文化課が行い、川井田の援助を得て、坂井（西野）・亀田が担当した。

凡 例

- 1 方位／座標 國土座標第II系（日本測地系）を基準とし、方位もそれに準じた。
- 2 遺跡地区名 遺跡全体の地区名は図4の通りである。X:-8870m、Y:-38760mを原点としN○E○等と地区名を設定した。
- 3 遺構名略号 遺構名は通し番号として次の通り略号を使用した。SB：掘立柱建物、SD：溝、SF：道路、SK：土坑、SX：その他
- 4 遺構図版 標高は東京湾平均海面（Tokyo Peil [T.P.]）
- 6 遺構図版 縮尺 遺構図版は、ブロックごとに掲載し、縮尺はキャプション及びスケールで図示した。
- 7 遺構図版 線種 遺構平面図は原則として確定ラインは実線で掲載し、遺構上・下端の推定線は破線で示した。また搅乱および調査区範囲については一点破線で示した。
- 8 遺構図版 断面ポイント 各遺構の平面及び断面図では一ラインの外側をポイントとしている。
- 9 遺物図版 縮尺 遺物実測は原則として土器1/2、

石器の鏃とスクレイパーについては1/1、剥片・石核は3/4、石斧は1/2で掲載した。またこれに該当しないものは、その縮尺を図中に示した。

- 10 遺物図版 線種 外形線、中心線及び区画線は実線、稜線は一点破線または二点破線、推定線は破線で示した。また、須恵器については、断面を塗りつぶし、回転ヘラ削りを実線で示したのち、以下底部まで砂粒の動きを示している。
- 11 遺物図版 土器の小破片については、断面図の左を内面、右を外面の立面図にしている。拓本の貼付もこれに準ずる。須恵器は断面を黒塗りしている。
- 12 接合痕跡 断面の内側に破線を入れている。
- 13 遺物観察表 すべての実測個体について、遺物観察表を掲載した。その凡例は、各観察の下に別項にて注記している。

本文目次

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の組織	1

第Ⅱ章 遺跡の環境

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査区の位置	2
第2節 調査概要	2
第3節 基本土層	2
第4節 縄文時代晚期の遺構と遺物	3
1 土坑	3
2 遺物包含層の遺物	5
第5節 古代の遺構	5
1 竪穴建物	5
2 掘立柱建物	6
3 土坑	8
4 道路状遺構	9
5 遺物包含層出土土器	10
第6節 中世後期の遺構	10
1 掘立柱建物	10
2 土坑	11
3 溝	11
4 遺物包含層出土土器	13
第7節 近世後期から近代の遺構	13
1 溝	13
2 近代以降	16

第Ⅳ章 まとめ

第1節 中世後期の区画について	16
第2節 古代の遺構について	16
第3節 縄文時代晚期について	17
第4節 近世以降の遺構について	17

第Ⅴ章 自然科学的分析

	18
--	----

表・図面・写真図版 目次

表

- 表1 石器観察表1
表2 土器遺物観察表1

図 面

位置図

- P1.1 図1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)
P1.2 (図1付表1)
P1.3 (図1付表2)
P1.4 図2 吉丸前遺跡周辺古地図 (1/10,000)
引用文献『玉名市史 資料篇1 絵図・地図』玉名市史編集委員会 玉名市 95頁抜粋
P1.5 (図2解説)
P1.6 図3 調査区位置図と周辺遺跡位置図 (1/5,000)
P1.7 図4 調査位置図 (1/2,000)

遺構

- P1.8 図5 V区全体遺構配置図 (1/400) / 基本土層図 (1/40) / 北東壁面土層断面図 (1/80)・土層断面図 (1/80)
P1.9 図6 繩文時代遺構配置図 (1/400)
P1.10 図7 繩文土坑 (13-SK) 平面・断面図 1 (1/30)
P1.11 図8 繩文土坑 (83・84 (141)・82・76・339-2・71・14-SK) 平面・断面図 2 (1/40)
P1.12 図9 繩文土坑 (103・125・133・131・132・121・122・70-SK) 平面・断面図 3 (1/40)
P1.13 図10 古代遺構配置図 (1/400)・04-SF断面図 (1/40)
P1.14 図11 08a-SI (102-SI) 平面・断面図 (1/60)
P1.15 図12 08a-SI (102-SI) かまど平面・断面図 (1/40)
P1.16 図13 掘立柱建物 (107a・22・23・19-SB) 平面・断面図 (1/80)
P1.17 図14 掘立柱建物 (18・21・28・315-SB) 平面・断面図 (1/80)
P1.18 図15 古代土坑 (347・340・16・339-1・15・107b・72・124・26・123・17・24・25・85-SK) 平面・断面図 (1/40)
P1.19 図16 中世遺構配置図 (1/400)
P1.20 図17 掘立柱建物 (108・104・105-SB) 平面・断面図 1 (1/80)
PL.21 図18 掘立柱建物 (30・29-SB) 平面・断面図 2 (1/80)
PL.22 図19 中世溝平面図 1 (1/200)
PL.23 図20 中世溝 (06・08b(S021)・74(S028)・75(S026)・78(S023)-SD・S027 東側) 平面図 (1/100)
(玉名市教育委員会調査 吉丸前遺跡との接合部分)
PL.24 図21 中世遺構 (74・75・78・06・08b-SD) 断面図 (1/40) (1/60)
PL.25 図22 近世(I期)主要溝配置図 (1/400)
P1.26 図23 近世(I期)溝 (78・06・08b-SD) 断面図 (1/40) (1/60)
P1.27 図24 近世(II期)～近代溝配置図 (1/400)
PL.28 図25 近世(II期)～近代溝断面図 (1/40)

遺物

- PL.29 図26 石鏃・スクレイバー実測図 (1/1)
図27 使用痕剥片・石核実測図 (2/3)
図28 石斧実測図 (1/2)
P1.30 図29 08a-SI 339・347-SK出土遺物実測図 (1/2)
図30 06・111・74・75-SD出土遺物実測図 (1/2) (1/3)
P1.31 図31 07・08b-SD 09-SX出土遺物実測図 (2/3) (1/2) (3/4)
PL.32 図32 遺物包含層出土遺物実測図 (1/2) (1/3)

写真図版

口絵カラー

- 1 調査区全景航空写真（南から）
- 2 調査区遠景航空写真（南から）
- 3 調査区遠景俯瞰航空写真
- 3 他調査区東半（06-SD）（北から）
掘立柱建物（18・19・21-SB）、土坑（15・16-SK）
(北から)
- 4 堀立柱建物（22・23-SB）（南西から）
竪穴建物（08a(102)-SI）（北西から）

写真図版

写真扉 調査区遠景航空写真（俯瞰）

遺構

Ph. 1 全景・堀立柱建物・土坑

- 1 調査区全景（南から）
- 2 調査区全景（北から）
- 3 調査区南（北東から）
- 4 調査区北（08b-SD・29-SB ほか）
23・107-SB 04-SF 検出状況
- 5 18・19-SB 土坑（13・15・16-SK ほか） 検出状況

Ph. 2 調査区全景・土坑（縄文晩期）検出状況 1

- 1 調査区全景（北東から）
- 2 18・19-SB 完掘状況（北から）
- 3 完掘状況（南西から）
- 4 S20_E30 V層 検出状況
- 5 08a-SI（102-SI）調査区南側断面（北から）
- 6 08a-SI（102-SI）調査区南側断面（北から）
- 7 13-SK 2次焼成面（西から）
- 8 14-SK 完掘状況（西から）

Ph. 3 土坑（縄文晩期）検出状況 2

- 1 82-SK 検出状況（北東から）
- 2 72-SK 検出状況（南東から）
- 3 71-SK 検出状況（南から）
- 4 76-SK 検出状況（北西から）
- 5 70-SK 検出状況（西から）
- 6 103-SK 検出状況（南から）
- 7 77-SK・04-SF 検出状況（南から）
- 8 14-SK 検出状況（北西から）

Ph. 4 土坑（縄文晩期）検出状況 3

- 1 121・122-SK 検出状況（東から）
- 2 121・122-SK 検出状況（南西から）
- 3 121・122-SK 検出状況（西から）
- 4 121・122-SK 検出状況（北から）
- 5 83・84（141）-SK ほか検出状況（西から）
- 6 83・84（141）-SK 検出状況（西から）
- 7 133-SK 検出状況（西から）
- 8 132・133-SK 検出状況（南東から）

Ph. 5 土坑（縄文晩期）（古代）検出状況

- 1 14-SK 検出状況（北西から）
- 2 339-2-SK（北東から）
- 3 107b-SK 検出状況（南から）
- 4 17-SK 検出状況（東から）
- 5 24-SK 検出状況（北西から）
- 6 25-SK 検出状況（北から）
- 7 26-SK 検出状況（北から）
- 8 72-SK 検出状況（南東から）

Ph. 6 V区 08a-SI（102-SI）検出状況

- 1 08a-SI（102-SI）遺物出土状況（北西から）
- 2 08a-SI（102-SI）遺物出土状況（北西から）
- 3 08a-SI（102-SI）遺物出土状況（南から）
- 4 08a-SI（102-SI）遺物出土状況（北から）
- 5 08a-SI（102-SI）かまど1廃棄状況（東から）
- 6 08a-SI（102-SI）かまど1（西から）
- 7 08a-SI（102-SI）かまど1 廃棄状況（西から）
- 8 08a-SI（102-SI）かまど2 使用状況（南から）

Ph. 7 堀立柱建物（古代）検出状況

- 1 18・19-SB 完掘状況（北から）
- 2 22・23・107-SB 検出状況（西から）
- 3 18-SB 検出状況（南から）
- 4 18・19-SB 完掘状況（北から）
- 5 19-SB 検出状況（南から）
- 6 21-SB 検出状況（西から）
- 7 21-SB 検出状況（南から）
- 8 23-SB 検出状況（西から）

Ph. 8 堀立柱建物（古代・中世）溝（中世・近世） 検出状況

- 1 22-SB 完掘状況（北西から）
- 2 04-SF 検出状況（北西から）
- 3 30-SB 検出状況（西から）
- 4 28-SB 検出状況（南東から）
- 5 08b-SD 検出状況（東から）
- 6 06-SD 検出状況（北から）
- 7 06-SD 検出状況（南西から）
- 8 09-SX 完掘状況（北から）

遺物

Ph. 9 出土石器

Ph. 10 08a-SI、339-SK ほか出土土師器・須恵器

Ph. 11 08a-SI、06-SD、09-SD 出土遺物

Ph. 12 06・07・08b・09-SD ほか出土遺物

Ph. 13 09-SD ほか出土遺物

Ph. 14 遺物包含層出土須恵器ほか

Ph. 15 遺物包含層出土遺物

Ph. 16 09-SX 出土陶磁器

Ph. 17 07・111・05-SD 出土遺物

Ph. 18 01・75・101-SD、04-SF 出土遺物

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯と経過

今回報告する吉丸前遺跡の調査地は、一般国道 208 号の改築事業の路線上にあたり、平成 7 年度に試掘確認調査が実施され、調査区域が設定され（平成 8 年 2 月 7 日付け教文第 1520 号で報告）平成 13 年度になり、玉名市教育委員会により調査が実施された。その過程で、遺構が南側まで伸びている事が判明し、調査範囲を暫定的に里道まで拡大することになり、熊本県教育委員会が国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所の依頼を受けて、平成 15 年度に発掘調査を実施した。

その後、一般国道 208 号玉名バイパス改築事業の菊池川北の道路延長に伴い、発掘調査を主体に実施し、平成 21 年度から吉丸西遺跡の報告書等と併行に整理作業を実施した。

第2節 調査の組織

【平成 15 年度】現地調査

調査主体者 田中 力男（熊本県教育長）

調査責任者 成瀬 烈大（文化課長）

調査総括 島津 義昭（教育審議員）

高木 正文（主幹兼文化財調査第 1 係長）

調査事務 吉田 恵（課長補佐）

櫛杭正義（主幹兼総務係長）、

天野 寿久（主任主事）

調査担当者 亀田 学（主任学芸員）、

米村 大・洲崎（水上）明子（嘱託）

調査指導 坂田 和弘・坂口 圭太郎（参事）

【平成 21 年度】整理報告書

整理主体者 山本 隆生（熊本県教育長）

整理責任者 米岡 正治（熊本県文化課長）

整理総括 村崎 孝宏（文化財調査第 1 係長）

坂田 和弘（参事兼文化財資料室長）

整理事務 宗村 士郎（教育審議員）、山田 京子（参事）

整理担当者 亀田 学（主任学芸員）

【平成 22 年度】整理報告書

整理主体者 山本 隆生（熊本県教育長）

整理責任者 小田 信也（熊本県文化課長）

整理総括 木崎 康弘（課長補佐）、

村崎 孝宏（文化財調査第 1 係長）、

坂田 和弘（参事兼文化財資料室長）

整理事務 宗村 士郎（教育審議員）、

川上 勝美（主幹兼総務係長）、

山田 京子（高校教育課参事）

整理担当者 亀田 学（主任学芸員）、赤星 和美（嘱託）

【平成 23 年度】整理・報告書作成

整理主体者 山本 隆生（熊本県教育長）

整理責任者 小田 信也（熊本県文化課長）

整理総括 村崎 孝宏（文化財調査第 1 係長）

坂田 和弘（参事兼文化財資料室長）

整理事務 川上 勝美（課長補佐）

水元 敬浩（主幹兼総務係長）、

山田 京子（高校教育課参事）

整理担当者 亀田 学（主任学芸員）、

坂井（西野）由葉（嘱託）

第Ⅱ章 遺跡の環境

吉丸前遺跡は金峰山系の二ノ岳・三ノ岳等から伸びる丘陵の一部である八嘉台地上に位置する。金峰山の基盤層である安山岩層が基盤になっている。1 km 北には菊池川が流れている。

東側の隣接地には吉丸の地名が残り、近世には東側に集落が広がっている。掘り切りの地形が残存し、中世の段階にも東側に集落が広がっていた可能性が高い。南側には隣接地として大堂の地名が残り、主要道としての地名と寺等が立地していたとする想定もある。

この地は津に隣接した台地状にあり、重要な交通の地点として重要な位置を占めていたと考えられる。北東には菊池川の「津留」の地名も残る。

また、中世の高瀬川の津として機能した丹倍（にべ）津「伊倉」や菊池川・繁根木川・浦川に囲まれた津である「高瀬」も控える。

玉名市教育委員会の調査で短辺東西 170m（1 町半）、長辺南北 220m（2 町）以上にも及ぶ連郭式城館の可能性を指摘している。伊倉氏との関係を示唆しているが、

現在のところ不明である。

堀に囲まれた内部は当時の地表面が削平されてい部分が多く詳細は不明である。先ほど触れた港として栄えた伊倉は南西約2kmにある。

また、古代は玉名郡衙が8世紀初頭にはできていると見られ、肥後国府や大宰府とのつながりを担っていたと考えられる。この遺跡周辺には、玉名郡和水町江田に存在した古代の駅と鹿本郡玉東町稻佐に通じる道と国道208号に沿って東西に走る大道（大堂・大道端の字名が残る）の2本の道に近く、台地を北東に降りれば菊池川の水運に関わる「津留」にも近い。

また、古代にさかのぼる古墳時代の遺跡は、北側約1kmに前期から後期まで続く城ヶ辻古墳群や東約1kmには田崎横穴群等が存在する。

縄文時代は南側約2kmの地点片諏訪貝塚、金峰山の南裾の内湾に尾田貝塚、竹崎貝塚等が、小岱山から南に伸びる丘陵の裾の菊池川右岸には古閑原貝塚、庄司貝塚、尾崎貝塚等が分布する。また、吉丸前遺跡では玉名市教育委員会の調査で縄文時代晚期の土坑が出土している。集落の状況は必ずしもはっきりしていないが、南東側に隣接する吉丸西遺跡では、竪穴建物を検出しており、九州磨消縄文土器様式の後期後半から刻目突帶文土器様式にかけての時期まで集落が営まれていたことが判明している。

第III章 調査の成果

第1節 調査区の位置

一般国道208号が玉東町から玉名に入り八嘉台地を上ると浦島海苔の工場を左手に見ながら少し過ぎるとトップパンホームズの工場付近で高瀬の方に西に向かう道（一般国道208号本線）と右手に向かう道（玉名バイパス）が分岐する。その分岐点付近が吉丸西遺跡で、その約200m先が調査地である。金峰山から伸びる二ノ岳・三ノ岳が菊池川の方に伸びる丘陵のやせ尾根の基部にあたり、八嘉台地と呼ばれる。玉名市教育委員会が平成13年度より平成15年度まで調査を実施した箇所の南側隣接地で、その遺構の広がりを確認し、遺跡

の内容を確認すること目的で調査を実施した。

第2節 調査概要

今回は、玉名市教育委員会が平成13年度より平成15年度まで調査を実施して検出したS021とS030の続き及びS026・S027・S028の続きを検出した。また、それらの溝と直角方向にも溝を検出し、区画がさらに重層的になっている様子が伺えた。

また、遺物包含層も削平されており、中世の建物の認定は困難であるが、建物があった痕跡は伺えた。

また、縄文時代では縄文土器はほとんど出土していないが、鏃・剥片・磨製石斧等が出土している。また、土坑の検出面や構造から、縄文時代後期か晚期の土坑も見られると推定できる。玉名市教育委員会の調査で集石（S04）炉穴（S053・050・055）及び土坑等を検出しており、集落の存在が想定できる。

今回調査した土坑も関連するものと推定できる。

第3節 基本土層

I層は現代耕作土、II層は近代の耕作土で、IV層（2a・2b層）[黒色シルト（7.5YR2/1）しまり、粘性ともに弱い。粒子が細かい]古代（から中世の）遺物包含層と考えられる。IV層から主に8世紀中葉～後葉の遺物等を検出しており、その時期を中心とするものと考えられる。玉名市教育委員会の調査区ではIIIa層[極暗色シルト（7.5YR2/3）しまり、粘性ともに弱い、ローム粒、炭化物、小礫を含む]、IIIb層[黒褐色シルト（7.5YR2/2）しまり、粘性ともに弱い、IIIa層に比べてローム粒の混入が少ない]、IIIc層[黒褐色シルト（7.5YR2/1）しまり、粘性ともに弱い、IIIa層に比べてローム粒の混入が少なくIV層の色調に近い]が確認されているが、今回の調査区では明確には確認できない。

IV層には下位の層の粒子を含む部分がありそれより上位をIVa（2a）層、下位をIVb（2b）層とする。上位は古代の層、下位縄文時代後晩期にのぼると考えられる。

V（3）層[褐色シルト（7.5YR4/4）しまり、粘性ともやや強い。混入物は非常に少ない]縄文晚期の遺物包含層であり、遺物の他焼土・炭化物を含む部分もある。

VI層〔黒色シルト(7.5YR2/1)でしまりが強く、粘性がやや強い〕遺物は検出できていない。縄文時代早期の層の可能性がある。

VII層〔黄褐色から褐色(7.5YR4/6)ローム層〕遺物は確認できていない。調査区の北西側は2/3以上はこの層まで削平されている。包VII層出土遺物は、遺構出土遺物で、遺構検出時に取り上げたものである。

第4節 縄文時代晚期の遺構と遺物

概要 基本土層V層から出土する遺物は細片で、時期を細かく認定できるものはない。石器については、鏃、スクレイパー、石斧等が出土している。

1 土坑（図6・7・8・9）

13-SK（図6・7、Ph.1・2）

位置 調査区の南側のS40E35に位置する。検出面はVII層で上層が削平されている。

構造 不規則な楕円形を呈する。長辺は約1.7m、短辺は約1mを測る。検出面からの深さは約30cmである。上層は削平されているので50cm以上の深さはあったであろう。

埋土は、レンズ状の堆積で大きく分けて4層には分けられる。埋土には炭や焼土を含む。特に4層(土色⑥)は焼土塊を含み炭化物が含まれる。1次焼成面と考えられる。南側に土色⑥は偏在していることから焼成地点は南側と考えられる。

また、土色⑤はしまりがある暗褐色シルト(7.5YR2/3)で土色③にも固い焼土ブロックを含むことから2次焼成面と考えられる。第1次焼成面と同様に土色③は南側に偏在していることから焼成地点は南側と考えられる。

遺物出土状況 流れ込みの遺物もなく、詳細は不明である。

まとめ 上層が削平されることから構造の詳細は不明であるが、焼土塊等があり焼成地点が偏在していることなどから、焼成温度がかなり上がる構造を想像できる。天井があり煙出を持つ連結土坑等を推定できよう。年代は難しいが、縄文時代早期等の遺物がでていないことや玉名市教育委員会調査のS053等のあり方から縄文時代晚期と推定したい。

83・84(141)-SK（図6・8、Ph.4）

位置 調査区の東隅のS40E55に位置する。北東部分が調査区外に位置する。

構造 当初、83-SKと84(141)-SKを同一のものとして掘削したが平面プランや土層から見て2つに分けられると考えられ、北西部部分を83-SK、南東部分を84(141)-SKとした。83-SKは、底部の形状から径1.8m程の円形を呈すると推定できる。検出した深さは約70cmであるが、上部が削平されているので、90cm以上はあつた可能性が高い。

84(141)-SKは東西からやや東に長軸が振れる土坑と推定できる。検出した状況では長軸2.2m以上の土坑であるが、平面プランから見て長軸2.5m、短軸1.5mの土坑と見られる。検出面の深さは約80cmであるが、1m以上あつた可能性がある。

遺物出土状況 流れ込みの遺物もなく、詳細は不明である。

まとめ 83-SKの断面を見ると2層以下に段を持ち掘り返されたような形状を示す。貯蔵穴であった可能性がある。

同様に84(141)-SKも大きく6層に分けられるが、3層以下の堆積と上層の土層の堆積が異なる。掘り返しの可能性がある。貯蔵穴等の用途を推定したい。

82-SK（図6・8、Ph.1）

位置 調査区の東隅のS40E50に位置する。

構造 長軸約1.1m、短軸約60cmで、検出面からの深さは約20cmである。上層が削平されており、もう少し深かつたと推定できる。長軸の土層の堆積を見ると掘り返しているように見え、貯蔵穴の可能性がある。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

14-SK（図6・8、Ph.1・2）

位置 調査区の南東のS35E35に位置する。

構造 長軸約1.3m、短軸約65cmで、検出面からの深さは約30cmだが、上層が削平されており、もう少し深かつたと推定できる。土層の堆積を見ると土坑中央部の堆積と周りの堆積が区別される。墓等の可能性を指摘したい。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

339-2-SK (図 6・8、Ph. 1・5)

位置 調査区の南東隅の S45E45 に位置する。

構造 長軸約 1.0m、短軸約 70cm で、検出面からの深さは約 16cm である。上層が削平されており、45cm 以上はあったと推定できる。82-SK と同規模であることから同様な用途が考えられるが、上層の削平があり詳細は不明である。

76-SK (図 6・8、Ph. 1・3)

位置 調査区の南東の S45E40 に位置する。

構造 長軸 1.5m、短軸 1.1m で検出面からの深さは約 35cm である。断面を観察すると大きく分けて 3 層に分けられるが、土色①～③までとそれ以下の層に段差が見られ、平面的にも掘り返しているような状況が見られる。貯蔵穴の可能性がある。

71-SK (図 6・8、Ph. 3)

位置 調査区北部の S15E30 に位置する。

構造 不定形を呈し長軸約 1.5m、短軸約 1.2m、深さ 25 cm を測る。検出面が削平されているため深さは 55cm 以上はあったと推定できる。埋土が水平に 2 層に分けられ、貯蔵穴等の用途が考えられよう。

103-SK (図 6・9、Ph. 3)

位置 調査区南西隅の S35E25 に位置する。

構造 楕円形を呈し、長軸約 1.3m、短軸約 80cm、深さ約 20cm と長軸約 1.1m、短軸約 70cm、深さ約 10cm が重複したように断面・平面ともに検出された。掘り返しの可能性があり、貯蔵穴等の用途が考えられよう。深さは遺物が出土していないため詳細は不明である。

70-SK (図 6・9、Ph. 3)

位置 調査区北部の S15E30 に位置する。05-SD に一部を壊されている。

構造 楕円形を呈し長軸 1.2m、短軸約 95cm、深さ 30cm を測る。検出面が削平されているため深さは 60cm

以上あったと推定できる。また、断面から直に掘っており、三角堆積が見られる。貯蔵穴の可能性と墓等の可能性が考えられよう。

125-SK (図 6・9)

位置 調査区の南隅の S40E10 に位置する。

構造 圓丸方形を呈す。長軸の長さ約 1.35m で短軸の幅は約 80cm、検出面からの深さは 20cm を測る。上層が削平されており、50cm 以上はあったと推定できる。遺物は出土していない。

中央部と壁際の堆積が区別される。墓等の可能性がある。

133-SK (図 6・9、Ph. 4)

位置 調査区の中央の S15E10 に位置する。上層が 77-SD に削平されている。

構造 楕円形を呈し長軸の長さ約 1.5m で短軸の幅は約 30cm、検出面からの深さは 10cm を測る。上層が削平されており、40cm 以上はあったと推定できる。焼土を含む。下面にピット状の掘り込みがあり上層に焼土塊を出土する。ピットに搅乱されていたとすれば焼土坑の可能性がある。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

131-SK (図 6・9、Ph. 4)

位置 調査区の中央の S15E10 に位置する。

構造 圆丸方形を呈し長軸の長さ約 1.7m で短軸の幅は約 70cm、検出面からの深さは 10cm を測る。上層が削平されており、40cm 以上はあったと推定できる。中央部と壁際の堆積が区別される。墓等の可能性がある。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

132-SK (図 6・9、Ph. 4)

位置 調査区の中央の S15E10 に位置する。131-SK によって一部を壊されている。

構造 圆丸方形を呈し長軸の長さ約 1.7m で短軸の幅は約 70cm、検出面からの深さは 5cm を測る。上層が削平されており、35cm 以上はあったと推定できる。中央部と壁際の堆積が区別される。墓等の可能性があるが、

131-SK と平面プランが等しく、検討は必要である。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

122-SK (図 6・9、Ph. 4)

位置 調査区の中央の S30E5 に位置する。

構造 隅丸方形を呈し長軸の長さ約 2m で短軸の幅は約 1.15m、検出面からの深さは約 25cm を測る。上層が削平されており、65cm 以上はあったと推定できる。中央部と壁際の堆積が区別される。墓等の可能性がある。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

121-SK (図 6・9、Ph. 4)

位置 調査区の中央の S15E10 に位置する。122-SK によって一部を壊されている。

構造 楕円形を呈し長軸の長さ約 1.3m で、短軸の幅は約 1.2m である。検出面からの深さは 15cm を測る。上層が削平されており、45cm 以上はあったと推定できる。

遺物は出土していない。

土坑のまとめ

遺物が出土していないため時期の決定が難しい。構造的に見て、焼土坑以外、大きく分けて 1~1.5m 程度の楕円形を呈し、掘り返し等が見られるものと隅丸方形で長軸の長さが 1.7~2m のものに分けられよう。前者は貯蔵穴と推定した。後者は墓と推定した。削平されていて堅穴建物等はあっても削平を受けており。解明が難しいが、墓域や貯蔵区域と推定したい。

2 遺物包含層の遺物 (図 26・27・28、Ph. 9)

石器 遺物包含層が調査区の南側一部に残存しているのみで、量的にも少ない。近世の層 (08b-SD 埋土 1 層) から出土しているものもある。分布では遺跡の性格は不明である。

以下代表的なものを紹介する。

遺物出土状況 図 26 の 1 は基部 5 角形を呈する鎌である。先端部は片面（主要面）から刃部を作成している。基部側面は両面から左側の側面を押圧剥離で加工している。基部も主要面から最後に調整して基部（抉り）を作成している。

図 26 の 2 はスクレーパーと推定できる。側縁に使用痕を持つ。基部と刃部と共に欠損しており、器種は断定しづらく、ナイフ形石器の可能性もある。基部を 2 次加工し、刃つぶしの調整を行っている。

図 27 の 1 は礫面を一部に残す石核である。打面を転移した後、細かい剥離を行っている。図 27 の 2 は打面を転移した後、長さ 4cm 程の縦長剥片を探っている。

図 27 の 3 は 08b-SD の埋土 1 層からの出土で大きく原位置から動いている。剥片として採った一側辺を刃部として用いられたと考えられる。使用痕が残存する。

図 27 の 4 は 08b-SD の埋土 1 層からの出土で大きく原位置を動いている。縦長剥片を探った石核を剥ぎ取つたもので一側辺に使用痕跡が残存する。

図 28 の 2 は、先端部を欠損していて詳細は不明であるが、安山岩製打製石斧と推定できる。全長 8.6cm 以上である。主要剥離面側から調整を行っており、裏面は一部整形する程度である。

図 28 の 1 は調査区外の西側の畠から採集したものであるが、片岩系の磨製石斧である。基部と刃部の一部を欠損しているが、片方の面に刃部側の刃部幅約 1.4cm、側縁部の刃部幅や基部でも幅約 1.2cm の稜を明確に持つ。

第 5 節 古代の遺構

概要

7 世紀前半の堅穴建物及び 8 世紀前半を中心とする掘立柱建物を検出した。土坑の年代は決め手に欠けるが、古代から中世と考えてここで紹介する。

1 堅穴建物 (図 10・11・12・29、Ph. 6・10・11)

概要 玉名市教育委員会の調査で 8 世紀前半代の堅穴建物を 2 基検出しているが今回は、7 世紀前半代の堅穴建物を検出した。

08a-SI(102-SI) (図 10・11・12・29、Ph. 6・10・11)

位置 調査区の南端に位置する。里道部分の整地層で一部を壊されている。

構造 東西の長軸は約 4m、南北は南側が里道部分で壊されており、不明であるが柱穴の検出位置等から 4m 前

後の掘り方を持つと考えられる。4本の主柱穴を持つ構造である。東及び西の掘り方の壁にそれぞれかまどを持つ。2軒の竪穴建物が重複している可能性がある。

柱 南北柱間距離1.5m、東西柱間距離1.8mで掘り方は円形を呈し、規模は30~50cmで柱痕跡は12~20cmである。検出の深さは40~50cmである。

かまど かまどは2カ所出土している。かまど1は西側に位置する。袖部の幅は正面をむかって側面の幅は約30cm、奥の幅は約10cm、第1次の焼成部の幅は約50cm、長さは約120cmある。焼成部の床面奥に炭、奥から35cmくらい手前に焼土が検出されている。袖部左側がトレンチと柱穴で壊された状況で検出した。

もう1つのかまど2は東側に位置する。袖部の幅は正面をむかって側面の幅は約30cm、奥の幅は約10cm、第1次の焼成部の幅は約70cm、長さは約70cmである。焼成部の床面奥に長さ15cm幅約20cmの特に焼けた部分を検出している。2次焼成面はトレンチで不明であるが、焼成部奥に長さが約30cmの範囲に焼土面を検出している。

遺物出土状況 かまど1・2の周辺に遺物が出土している。かまど1の袖部奥に浮いた状況で須恵器や土師器甕が出土している。かまど1周辺の土師器はかまどで使われていたものが壊されたものと推定される。かまど2周辺の須恵器は、土師器甕のやや下から出土しており、手前に置いてあったものが埋まる段階で混入したと考えられる。

北東50cm程の場所に5~10cm程の軽石が床面に出土しており、注目される。

土器 図29の1・2はかまど2の焼成部の上層から出土したものである。図29の1は口径10.6cmの須恵器の杯蓋で天井部と口縁部にわずかだが、稜を残す。図29の2は、須恵器杯身で口縁部は立ち上がりがあり、体部のヘラ削りは1/3程度施している。

図29の6は埋土1層からの出土で図29の1と類似する。規格は同一である。図29の4は須恵器の杯身で最大胴部径14.2cmである。焼きは土師質である。口縁は内側に立ち上がる。図29の2より新しい傾向であろう。図29の3は高杯の脚部で面取りをしている。下

の部分は欠損しているが、開き気味で脚部は短い。

図29の7・8は埋土1層出土で、前者はかまど1周辺出土(No.1)である。土師器の甕で頸部外面に指頭圧痕が残存する。口縁部の厚いところで1cm、端部付近でも6mmと厚みがある。胴部内面はヘラ削りを施しているが上半でまだ1cmと厚い。図29の5も同様である。

須恵器の杯はその形態から陶邑田辺編年TK209からTK217型式併行期と考えられる。

小結 かまどが2つあることから考えて2つの住居が重複している可能性が高い。そういう視点で見ると、硬化面の状況及び遺物の状況や柱穴の検出状況から見て西側のかまどを持つ建物が古く、東西の軸長が約3mの竪穴建物であったと推定したい。柱穴はうまく検出できていないことになる。

もう1つの建物は東側のかまどに伴うもので、東西幅はもう1つの建物と重複しており不明であるが約3m程のものである可能性が高い。

建物の状況及び出土した土器等から考えて7世紀初頭を中心とするものと推定される。

建物の所属時期は完全に伴うものではないにしても須恵器の年代を当てはめたい。

2 掘立柱建物 (図10・13・14、Ph.1・7・8)

概要 遺物包含層があるのが調査区南東端の一部であり、時期や構造の詳細をつかむのは困難である。

以下個々に、詳説する。

107a-SB (図10・13、Ph.1・7)

位置 調査区の東端のS35E50ほかに位置する。調査区の東側に続くと推定できる。

柱配置 2間×3間以上の側柱建物と推定される。柱間距離は基本的には約1.8m(6尺)である。南側の柱列が5尺間隔でやや狭い。径20~25cmの掘り方を持つ。柱痕跡は12~15cmである。柱穴の検出面からの深さは10~15cmである。検出面が削平されているので45cm以上はあったと推定できる。建物の軸は、座標北より25°程西に振れている。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

23-SB (図 10・13、Ph. 1・7)

位置 調査区の東端の S40E50 ほかに位置する。

柱配置 2 間 × 2 間の側柱建物に北側の南北柱列に 1 本側柱を足しているような構造と推定される。柱間距離約 1.8m (6 尺) である。径 30~40cm の円形の掘り方を持つ。柱痕跡は約 10~12cm である。柱穴の検出面からの深さは約 5~15cm である。検出面が削平されているので 45cm 以上はあったと推定できる。基本的な柱列の柱間距離は 6 尺であるが、南側に東西に並ぶ柱列は柱間距離 5 尺と短い。建物の軸は、座標北より 25° 程西側に振れている。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

22-SB (図 10・13、Ph. 1・8)

位置 調査区の東端の S35E45 ほかに位置する。

柱配置 2 間 × 2 間の側柱建物と推定できる。柱間距離約 2.1m (7 尺) である。径 20~25cm の円形掘り方を持つ。柱痕跡は約 12~15cm である。柱穴の深さは約 10~25cm である。座標北より 10° 西へ振れている。柱列の中に南側の東西の柱列から 4 尺程離れて 2.4m (8 尺) の柱間で柱が検出されている。位置関係から床束の可能性がある。建物の軸はやや西に振れている。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

19-SB (図 10・13、Ph. 1・2・7)

位置 調査区の南東側に位置する。

柱配置 2 間 × 2 間の側柱建物と推定される。柱間距離約 1.8m (6 尺) である。径 15~30cm の円形の掘り方を持つ。柱痕跡は 10~15cm である。柱穴の深さ 10~40cm である。北西の柱穴が検出面からの深さが浅く削平されている割合が大きいと考えられ、深さは約 50 から 70cm はあったと考えられる。P6 は 70cm 程検出できている。樹痕なども一緒になっている可能性もある。検出面は削平されている。建物の軸はほぼ座標に沿っている。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

18-SB (図 10・14、Ph. 1・2・7)

位置 調査区の西端の S35E45 に位置する。

柱配置 1 間 × 2 間の小形の建物である。柱間距離は約 1.8m (6 尺) である。P4~P5 の柱間距離が 5 尺程しかないが、柱が曲がっていた可能性があろう。径 25~30cm の円形の掘り方の柱穴である。柱痕跡は 10~15cm であり検出面からの深さは 25~40cm である。柱列内に柱間 6 尺で柱穴が 2 基 (P7・8) 検出できており、床束の可能性がある。建物の軸はほぼ座標に沿っている。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

21-SB (図 10・14、Ph. 1・7)

位置 調査区の南端の S45E35 に位置する。

柱配置 2 間 × 3 間の側柱建物と推定できる。柱間距離は約 1.8m (6 尺) である。P4~P5 の柱間距離が 5 尺程しかないが、柱が曲がっていた可能性があろう。径 30~40cm の円形の掘り方の柱穴である。柱痕跡は 10~15cm であり検出面からの深さは 40~60cm である。東側の柱列がやや不規則である。内に柱間 10 尺で柱穴が 2 基 (P11・12) 検出できており、床束の可能性がある。深さは検出面から約 10cm であるが 40cm 以上あったと考えられる。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

28-SB (図 10・14、Ph. 1・8)

位置 調査区の北側の S15E20 に位置する。

柱配置 柱間距離が一定しないが、南北 18 尺、東西 14 尺の建物の可能性がある。P1~P2 間 6 尺で、P2 から P3 の間に柱穴が 1 基、P4 の東側には隅柱 1 基、東の柱列にはその南側に柱穴が 1 基あった可能性があるが、06-SD 及び上面を削平されている可能性があり不明である。判明する柱列は南側の東西の柱列で、P1~P9 間が 4 尺、P8~P9 間が 6 尺、P7~P8 間が 4 尺である。径 15~30cm の円形の掘り方の柱穴である。柱痕跡は 10~15cm であり検出面からの深さは 20~65cm である。東 P1 及び P8 は削平されているわりに深いため、樹痕が入り込んだ可能性もある。建物の軸は座標北から東に約 30° 振れている。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

小結 建物と認定するには困難であるが、候補として考えたい。

31-SB (図 10・14、Ph. 1)

位置 調査区の中央 S15E15 に位置する。

柱配置 2 間 × 1 間の側柱建物と推定される。柱間距離約 1.5m(5 尺) である。径 20~35cm の円形の掘り方を持つ。柱痕跡は約 10~12cm である。柱穴の検出面からの深さは約 20~25cm である。P3・5 は検出面が削平されている状況で 45cm 以上であるのでやや深すぎる。樹痕等が入り込んでいる可能性もある。

小結 建物と認定するには難しいが、28-SB が建物であるなら付属する建物の候補として考えたい。

3 土坑

概要 浅い土坑が多くローム層まで掘り込んでいるので、遺物が出土しないと埋土では時期の区別がつきにくい。遺物包含層や玉名市教育委員会の中世以降や縄文時代の遺構に属する可能性があるが、古代のものとして報告する。

(1) 遺物等の出土で時期が推定できるもの

340-SK (図 10・15)

位置 調査区の東端 S45E40 に位置する。

構造 楕円形を呈し、長軸約 1.35m、短軸約 1m で検出面からの深さは約 15cm を測る。検出面が削平されており、深さ 45cm 以上はあったと考えられる。

遺物出土状況 土師器片が 1 点出土しているが、流れ込みの遺物であり詳細は不明である。

347-SK (図 10・15・29)

位置 調査区の東端 S45E40 に位置する。

構造 楕円形を呈し、長軸約 1.3m、短軸約 95m で検出面からの深さは約 15cm を測る。検出面が削平されており、深さ 45cm 以上はあったと考えられる。

遺物出土状況 土師器甕や壺片が出土しているが、摩

滅が激しく流れ込みの遺物であり詳細は不明である。

図 29 の 9 は須恵器の甕片であり、外面は格子目タタキ後ナデで、内面は同心円文タタキである。

339-1-SK (図 10・15・29)

位置 調査区の東端 S45E40 に位置する。

構造 楕円形を呈し、長軸約 80cm、短軸約 65cm で検出面からの深さは約 15cm を測る。埋土は 2 層に分けられる。検出面が削平されており、深さ 45cm 以上はあったと考えられる。

遺物出土状況 土師器甕片(図 29 の 11)が出土しているが、摩滅を受けて流れ込みの遺物であり詳細は不明である。厚みが 6mm あり、古代のものである。

(2) 遺物等が出土せず時期決定が困難なもの

107b-SK (図 10・15、Ph. 5)

位置 調査区南東の S40E40 に位置する。

構造 楕円形を呈し長軸約 85cm、短軸約 65cm である。深さ約 10cm であるが、詳細は不明である。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

15-SK (図 10・15)

位置 調査区南東 S40E30 に位置する。

構造 楕円形を呈し長軸約 1.2m、短軸約 1m である。深さ約 10cm であるが、詳細は不明である。埋土は鈍い褐色粘質土 (7.5YR5/4) (粘性がやや強く、ロームブロック混入) である。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

16-SK (図 10・15)

位置 調査区南側の S40E30 に位置する。

構造 楕円形を呈し、長軸約 1.4m、短軸約 1.1m、検出面からの深さは約 15cm である。検出面が削平されていたため、深さについては 45cm 以上あったと推定できる。埋土は鈍い褐色粘質土 (7.5YR5/4) (粘性がやや強く、ロームブロック混入) である。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

26-SK (図 15、Ph. 5)

位置 調査区中央 S30E25 及び S30E30 に位置する。

構造 楕円形を呈し、長軸約 80cm、短軸 55cm で深さは約 10cm である。調査区の北東隅 S10E25 に位置する。楕円形を呈し、長軸約 1.1m、短軸約 70cm を測る。深さ約 24cm である。検出面が削平されていたため、深さについては 55cm 以上あったと推定できる。大きさとしては 17-SK に類似する。

埋土は鈍い褐色粘質土 (7.5YR5/4) (粘性がやや強く、ロームブロック混入) である。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

17-SK (図 10・15、Ph. 5)

位置 調査区中央やや北より S15 E25 に位置する。

構造 楕円形を呈し、長軸約 1m、短軸約 60cm を測る。深さ約 25cm で中央に約 20cm のくぼみを持つ。検出面が削平されていたため、深さについては 55cm 以上あったと推定できる。埋土は 2 層に分けられる。柱穴が重複していた可能性もある。

25-SK (図 10・15、Ph. 5)

位置 調査区の北隅 S5E20 に位置する。

構造 楕円形を呈し、長軸約 1.1m、短軸約 70cm を測る。深さ約 24cm である。検出面が削平されていたため、深さについては 65cm 以上あったと推定できる。大きさとしては 17-SK に類似する。

24-SK (図 10・15、Ph. 5)

位置 調査区の北隅 S10E20 に位置する。

構造 楕円形を呈し、長軸約 65cm、短軸約 50cm を測る。深さ約 20cm である。検出面が削平されていたため、深さについては 50cm 以上あったと推定できる。中央に約 25cm のくぼみを持つ。柱穴等が重複している可能性がある。

72-SK (図 10・15、Ph. 5)

位置 調査区の東 S30E35 に位置する。

構造 楕円形を呈し、長軸約 65cm、短軸約 50cm、深さ

約 20cm を測る。上層が削平されているため、深さは 50cm 以上あったと推定できる。

構造から柱穴の痕跡である可能性がある。

123-SK (図 10・15)

位置 調査区の中央 S20E20 に位置する。

構造 楕円形を呈し、長軸約 1m、短軸約 80cm、深さ約 10cm を測る。上層が削平されているため、深さは 40cm 以上あったと推定できる。

124-SK (図 10・15)

位置 調査区の南西 S35E10 に位置する。

構造 長軸約 1.3m、短軸約 90cm を測る。深さは約 10cm を測る。上層が削平されているため、深さは 40cm 以上あったと推定できる。

85-SK (図 10・15)

位置 調査区の西端の S20W5 に位置する。

構造 やや不整形の楕円形を呈する。長軸 2m、短軸 1.2m で深さ 10cm を測る。下場の形状から見ると 2 つの土坑の重複の可能性があるが、深さがなく不明である。長軸の長さが 2m の土坑の可能性がある。遺物は出土していない。

4 道路状遺構 (図 10)

04-SF (図 10)

位置 調査区の南端の遺物包含層 IIa 層が残存する箇所に位置する。南東方向から北西方向に伸びながら屈曲し東西方向に伸びる。

構造 幅は残存しているところで 1.15m、長さ約 13m 残存する。

60cm の幅で硬化した面が存在する。

小結 IIa 層の途中から検出できたもので、層位から見て、古代と考えて良いと考えられる。

下層から 08a-SI が検出されていることから埋土に流れ込みの遺物はみられないものの、7 世紀前半以降 8 世紀代を想定したい。建物等の区画を兼ねた通路と想定したい。

5 遺物包含層出土土器（図 32、Ph. 14・15）

図 32 の 1～7 は削平された箇所で、遺構に伴うか表土で搅乱されている土からの出土である。土坑や掘立柱建物（28・31-SB 等）に伴っていたもの可能性がある。図 32 の 1 は須恵器の杯蓋で輪状つまみを持つものである。図 32 の 2～4 は須恵器の杯身で外に踏ん張る高台を持つ。底径約 10cm である。図 32 の 5 は須恵器杯で底部外面に丁寧なナデを施している。図 32 の 6 は土師器の椀である。

図 32 の 7 は須恵器の高杯の脚部である。残存状況から見て脚部の高さは 4cm 以下と推定できる。

図 32 の 8～10 は南側の遺物包含層であるIV層出土の遺物である。図 32 の 8 は土師器高杯の脚部である。図 32 の 9 は須恵器の杯蓋で輪状つまみを持つものである。図 32 の 10 は須恵器高杯の杯部と推定したが、輪状つまみの杯蓋の可能性もある。

図 32 の 11 は S45E50 のIV層出土で 04-SF や周辺の柱穴に関連する遺物の可能性がある。須恵器の高杯の脚部で突帯がつく。

図 32 の 12 は S45E50 のIV層出土で、04-SF や周辺の柱穴に関連する遺物の可能性がある。須恵器長頸壺の口縁である。

図 32 の 13 は S30E50IV層出土で、調査区外の北側の遺構に関連する遺物の可能性がある。須恵器壺の口縁である。

図 32 の 19 は土師器の杯の底部である。S45E40 の遺物包含層（IV層）からの出土で 21-SB 等に関連する遺物と推定できる。黒色土器の椀の底部と考えられる。大宰府編年IX期併行期と推定できる。

6 その他の遺構からの古代出土土器(図 31・32、Ph. 13)

図 30 の 3 は 06-SD の埋土 1 層出土で、グリッドは S10E20 である。24・25-SK 等と関連する遺物の可能性がある。須恵器の杯で底部のやや内側に高台がつく。高台は外側が接するものである。網田編年III～IV期（大宰府編年III～IV期併行期）と推定される。

図 30 の 6 は 74-SD の出土でグリッドは S10E10 である。29-SB 付近の遺構や調査区の北側の遺構に関連するも

のと考えられる。須恵器の杯である。高台が剥離している。底部付近の体部はヘラ削りを施している。網田編年V期（大宰府編年VI期併行期）と推定される。

図 31 の 5 は 08b-SD 埋土 1 層出土でグリッドは NOE10 である。調査区外の北側の遺構等に関連する遺物と考えられる。須恵器の杯で口縁端部はやや外方に反る。底部付近の体部は削りのちナデ調整を施す。網田編年IV期（大宰府編年IV期併行）と考えられる。

図 31 の 12 は 05-SD [09-1-SD(SX)] の埋土 1 層出土でグリッドは S45E30 である。21-SB 等と関連する遺物と考えられる。須恵器の杯で体部の底部付近に縦方向の線刻が入る。

第6節 中世後期の遺構

概要

中世の遺構を検出した部分は玉名市教育会で調査した部分と同じく III層が削平されており、遺構の認定が困難である。玉名市教育委員会調査の空堀状遺構（S021）の続きが確認されたことと 06-SD を新たに検出し、S021 よりやや新しい区画の溝を検出した。

また、時期判定は困難であるが、削平された建物の痕跡を確認した。古代や近世に属するかもしれないが、中世と考えられるものとしていくつか紹介したい。

1 掘立柱建物

108-SB （図 16・17、Ph. 1）

位置 調査区の中央の S30E20 を中心として位置する。

柱配置 1間 × 1間の側柱建物と推定できる。柱間距離は約 2.7m (9 尺) を基本としている。径 25～30cm の円形の掘り方の柱穴である。柱痕跡は 10～15cm であり検出面からの深さは北側の隅柱で 25～35cm で南側で約 15cm を測る。削平されていることを考えると建物を構成する南側の主柱穴が削平されている可能性もある。建物の軸はほぼ座標に沿っている。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

小結 建物の柱間距離が 2.7m と広く 1間 × 1間の構造であり、建物と断定するには困難であるが、可能性として提示したい。

105-SB (図 16・17)

位置 調査区の中央の S25E15 を中心に位置する。

柱配置 2 間 × 1 間の側柱建物と推定できる。東西に長く、建物の軸はやや西に振れている。柱間距離は約 2.4m(8 尺)を基本とている。北東隅の柱がやや外側に寄っており、柱が曲がっていた可能性があろう。径 20 ~ 30cm の円形の掘り方の柱穴である。柱痕跡は 10 ~ 15cm であり検出面からの深さは北側の柱列で 35 ~ 50cm の深さがあるものがあるが、南側は 15 ~ 20cm である。削平されていることを考えると樹痕が入り込んでいる可能性もある。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

29-SB (図 16・18、Ph. 1)

位置 調査区の北端の S5E10 に位置する。

柱配置 2 間 × 2 間の側柱建物と推定できる。北側に 3 尺くらいの張り出しを持つ構造である。柱間距離は東西に約 2.1m(7 尺)、約 2.4m(8 尺)を基本とする。北側の東西軸の中央の柱穴は削平されていると推定できる。径 25 ~ 40cm の円形の掘り方の柱穴である。柱痕跡は 10 ~ 15cm であり検出面からの深さは隅柱 10 ~ 30cm で北東の隅柱が 50cm の深さがあるものがあるが、削平されていることを考えると樹痕が入り込んでいる可能性もある。

建物の軸はほぼ座標に沿っている。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

30-SB (図 16・18、Ph. 8)

位置 調査区の北端の S5E10 に位置する。

柱配置 2 間 × 3 間の側柱建物と推定できる。北側に 3 尺くらいの張り出しを持つ構造である。柱間距離は東西に約 1.5m(5 尺)、約 1.8m(6 尺)を基本とする。北東側の隅柱はやや内側にあり柱が曲がっていた可能性がある。径 20 ~ 30cm の円形の掘り方の柱穴である。柱痕跡は 10 ~ 15cm であり検出面からの深さは北西の隅柱の深さが約 15cm であるが、他は 40cm 以上の深さがあるものがある。削平されていることを考えると樹痕が入り込んでいる可能性と高さが高い建物の可能性もある。

考えられる。

建物の軸はほぼ座標に沿っている。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

104-SB (図 16・17、Ph. 1)

位置 調査区の中央の S30E10 に位置する。

柱配置 2 間 × 2 間の側柱建物と推定できる。北側に 3 尺くらいの張り出しを持つ構造である。柱間距離は約 1.8m(6 尺)を基本とし、5 尺程しか柱間距離がない部分もある。柱が曲がっていた可能性があろう。径 25 ~ 40cm の円形の掘り方の柱穴である。柱痕跡は 10 ~ 15cm であり、検出面からの深さは隅柱で 25 ~ 30cm で 50 ~ 70cm の深さがあるものがあるが、削平されていることを考えると樹痕が入り込んでいる可能性もある。

建物の軸はほぼ座標に沿っている。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

まとめ

建物の時期は遺物包含層がなく、時期の決め手に欠ける。柱間が長い建物と溝の中で溝の軸と平行するような建物を抽出した。今後の周辺の調査での成果と併せて再考する必要がある。

2 土坑

中世の土坑として認定できるものはないが、古代や縄文の項で記述した土坑が中世に属す可能性も否定できない。今後の周辺の調査での成果と併せて再考する必要がある。

3 溝

08b-SD (S021) (図 16・19・20・21・31、Ph. 1・8・12)

位置 調査区の北端の NOE10 を中心とするグリッドに位置する。玉名市教育委員会の調査で検出され S021 の続きの一部を検出した。

構造 玉名市教育委員会の調査で指摘されているように遺構の上半部とか下半部では大きく形状が異なる。細かく追ってみると下半部でも段状の断面を呈し、2 ~ 3 時期はある可能性がある。下半部は玉名市教育委員

会の報告では 14 世紀前半頃までさかのぼる可能性がある。

また上部も 4 時期くらいに細分できる可能性があり、上部は掘畑状に利用されていた可能性がある。これらは近世から近代にかけて機能したものであろうと考えられるので後述する。

構造は底面が約幅 5m で台形状を呈する。最深部が検出面からではあるが 1 m 以上、最浅部は 0.2m である。溝の幅は上層部分が拡張されているのを修正すると約 12m と推定できる。

遺物出土状況 埋土 5 層から土師器皿（図 31 の 6）が出土している。また、上層からではあるが、須恵器擂鉢（図 31 の 4）が出土している。

土器 図 31 の 6 は口径 8.4cm、器高 2.4cm の土師器で口縁部に煤が付着する。底部はへら切りで器壁は厚いところで 6mm と厚い。灯明皿と考えられる。

図 31 の 4 は須恵質の擂鉢で擂り目と擂り目の間が 2cm 以上空く形式である。06-SD と接合している図 31 の 5 は須恵器は体部から口縁部にかけて S 字状に外反するもので古代でも奈良時代後葉までには収まると考えられる。溝への流れ込みであろう。

06-SD （図 16・19・20・21・30、Ph. 1・8・10・11）

位置 調査区の北東部分の S15E25 を中心に分布する。08b-SD (S021) の北西から南東に向かう部分の方向とほぼ同一の振れである。

構造 08b-SD で記述したように遺構の上半部と下半部で大きく形状が異なる。細かく追ってみると下半部でも段状の断面を呈し、2 時期はある可能性がある。また上半部も 2 時期に細分できる可能性があり、上半部は掘畑状に利用されていた可能性がある。これらは近世から近代にかけて機能したものであろうと考えられるので後述する。

構造は底面が約幅 0.7～1 m でやや丸みを持つ台形状を呈する。最深部が検出面からではあるが 0.8～1 m であるが、長さ 21m で両端が検出されていない。08b-SD と同様な構造と考えられる。溝の幅は上層部分が拡張されているのを修正すると約 2.2m と推定できる。

遺物出土状況 出土土器は少ない。最下層からは時期を認定できるような遺物が出土していない。埋土 3 層から流れ込みの遺物が出土している。

土器 図 30 の 1 は埋土 3 層からの出土遺物で須恵質の擂鉢である。擂り目と擂り目の間が約 2cm 空く形式で 08b-SD 埋土 5 層出土の擂鉢（図 31 の 4）と同形式と推定できる。図 31 の 4 は須恵器の擂鉢で 08b-SD 出土のものと接合している。また、埋土 1 層からは須恵器の高台付杯（図 30 の 3）が出土している。高台がやや外側に踏ん張る形式で高台端部が沈線状を呈するもので 8 世紀中葉～後葉と推定できる。流れ込みの遺物である。

まとめ 08b-SD と接合する資料があることから、06・08b-SD が中世以降同時に機能していた時期があることが示唆されよう。

74-SD (S028) （図 16・19・20・21・30、Ph. 1・13）

位置 調査区の北端の NOE10 を中心とするグリッドに位置する。玉名市教育委員会の調査で検出され S028 の続きの一部を検出した。

構造 玉名市教育委員会の調査で指摘されているように遺構の上半部とか下半部では大きく形状が異なる。上半部は掘畑状に利用されていた可能性がある。これらは近世から近代にかけて機能したものであろうと考えられるので後述する。

構造は底面が幅約 1m で台形状を呈する。最深部は 50cm 以上である。溝の幅は上層部分が拡張されているのを修正すると約 2m と推定できる。もともとは玉名市教育委員会検出の S023 に続く溝の 1 つと推定される。

遺物出土状況 埋土から時期を推定できる遺物が出土していない。ただし、埋土上層から須恵器の高台付杯（図 30 の 6）の一部が出土している。流れ込みの土器である。奈良時代後期のものか。

ただ、玉名市教育委員会調査時に瓦質の鉢及び火鉢を出土しており、中世後期に比定されている。

75-SD (S026) （図 16・19・20・21・30、Ph. 1）

位置 調査区の北端の NOE10 を中心とするグリッドに位置する。玉名市教育委員会の調査で検出され S026 の

続きの一部を検出した。

構造 玉名市教育委員会の調査で指摘されているように遺構の上半部とか下半部では大きく形状が異なる。上半部は掘畑状に利用されていた可能性がある。これらは近世から近代にかけて機能したものであろうと考えられるので後述する。

上層が削平されているため今回の調査区では、幅 60cm 以上、深さ 15cm 以上としか判明しないが、緩やかな台形で U 字に近く、底部の幅 50cm、溝幅約 60cm で検出面からの高さは約 25cm 以上の溝で削平を受けていることから深さは 60cm 以上の溝であると推定される。もともとは玉名市教育委員会検出の S023 に続く溝の 1 つと推定される。

遺物出土状況 埋土から時期を推定できる遺物が出土していない。ただし、玉名市教育委員会の報告で中世の土器の小片が出土しており、中世後期に比定されている。

S027（図 16・24）

位置 調査区の北端の NOE10 を中心とするグリッドに位置する。玉名市教育委員会の調査で検出され S027 の続きの一部を検出した。

構造 玉名市教育委員会の調査では遺構の上半部とか下半部では大きく形状が異なるが今回の調査では下半部しか検出されていない。ただ、長さ幅 20cm で 6m 以上検出された。玉名市教育委員会の調査では深さ 20cm 以上であり、削平されたことを考えると深さは 60cm 以上あったと推定できる。もともとは玉名市教育委員会検出の S023 に続く溝の 1 つと推定される。

遺物出土状況 埋土から時期を推定できる遺物が出土していない。玉名市教育委員会の S027、S026、S028、S023 の調査によるとその構造及び位置関係から中世後期に比定できよう。

4 遺物包含層出土土器（図 32、Ph. 15）

遺物包含層が南側のごく一部しか残存しておらず、遺物はごくわずかである。

図 32 の 17 は S40E20 の出土である。07・09-2-SD 等

と関連する遺物と考えられる。土師質の火鉢の底部か。

図 32 の 18 は S40E20 の出土である。07・09-2-SD 等と関連する遺物と考えられる。瓦質の火鉢の口縁と推定している。

第 7 節 近世後期から近代の遺構

概要 中世後期に成立した区画を一部踏襲した耕作に伴う溝等を検出した。

1 溝

08b-SD (S021)（図 22・23・31、Ph. 1・2・12）

位置 調査区の北端の NOE10 を中心とするグリッドに位置する。玉名市教育委員会の調査で検出され S021 の続きの一部を検出した。

構造 玉名市教育委員会の調査で指摘されているように遺構の上半部とか下半部では大きく形状が異なる。細かく追ってみると下半部でも段状の断面を呈し、2 から 3 時期はある可能性がある。下半部は玉名市教育委員会の報告では 14 世紀前半頃までさかのぼる可能性があろう。

また上半部も 4 時期くらいに細分できる可能性があり、上半部は掘畑状に利用されていた可能性がある。上半部が近世から近代にかけてのものと推定できる。

06-SD（図 22・23・30、Ph. 1・2・12）

位置 調査区の北東部分の S15E25 を中心に分布する。08b-SD (S021) の北西から南東に向かう部分の方向とほぼ同一の振れである。

構造 08b-SD で記述したように遺構の上半部と下半部で大きく形状が異なる。細かく追ってみると下半部でも段状の断面を呈し、2 時期ある可能性がある。また上半部も 2 時期に細分できる可能性があり、上半部は掘畑状に利用されていた可能性がある。これらは近世から近代にかけて機能したものであろうと考えられる。

構造は底面が幅約 60cm でやや丸みを持つ台形状を呈する。近世の時期の最深部は検出面からではあるが 45cm である。長さ 21m は検出されているが両端が検出されていない。08b-SD と同様な構造と考えられる。溝

の幅はそのつど拡幅されているが、少なくとも近世には 2.5m 以上、近代では 3.5m の幅を持っていた可能性がある。

遺物出土状況 上層に図 30 の 2 の土人形が出土している。他には近世から近代にかけての時期を示すような遺物が見当たらない。

小結 07-SD に上層の埋土が壊されていることから、07-SD には、くらわんか手茶碗等が入っていることから 18 世紀末には埋まつた可能性が高い。

74-SD (S028) (図 24・25、Ph. 1)

位置 調査区の北端の NOE10 を中心とするグリッドに位置する。玉名市教育委員会の調査で検出され S028 の続きの一部を検出した。

構造 玉名市教育委員会の調査で指摘されているように遺構の上半部とか下半部では大きく形状が異なる。上半部は掘畠状に利用されていた可能性がある。これらは近世から近代にかけて機能したものであろうと考えられる。

調査区の北西隅で検出されているので詳細な構造は検証できなかつたが、底面は幅約 1m で台形状を呈する。近世以降の最深部は 25cm 以上と推定される。溝の幅は上層部分が削平されているため不明であるが検出面で約 1.8m から 2.1m と推定できる。2m 以上の幅はあったと推定できる。もともとは玉名市教育委員会検出の S023 に続く溝の 1 つと推定される。

遺物出土状況 埋土から時期を推定できる遺物は出土していないが、玉名市教育委員会の調査等から中世後期から機能していたと思われるが、位置関係等から見て、75-SD とそう変わらない時期であり、近世後期から近代まで形を変えながら機能していたと推定したい。

75-SD (S026) (図 24・25・30、Ph. 1・18)

位置 調査区の北端の NOE10 を中心とするグリッドに位置する。玉名市教育委員会の調査で検出され S026 の続きの一部を検出した。

構造 玉名市教育委員会の調査で指摘されているように遺構の上半部とか下半部では大きく形状が異なる。

上半部は掘畠状に利用されていた可能性がある。これらは近世から近代にかけて機能したものであろうと考えられる。

上層が削平されているため今回の調査区では、幅 1m 以上、深さ 10cm 以上としか判明しないが、緩やかな台形で U 字に近く底部の幅約 40cm であろう。もともとは玉名市教育委員会検出の S023 に続く溝の 1 つと推定される。

遺物出土状況 埋土上層からは陶磁器や炮烙が出土している。(Ph. 18) ただし、玉名市教育委員会の報告で中世の土器の小片が出土しており、中世後期に比定されている。上層が削平されてまた、再利用されており、検出した部分は近世後期にも位置づけても報告しておく。

S027 (図 24)

位置 調査区の北端の NOE10 を中心とするグリッドに位置する。玉名市教育委員会の調査で検出され S027 の続きの一部を検出した。上層は、近世に下ると考えられる。

構造 玉名市教育委員会の調査では遺構の上半部とか下半部では大きく形状が異なるが今回の調査では下半部しか検出されていない。もともとは玉名市教育委員会検出の S023 に続く溝の 1 つと推定される。

遺物出土状況 埋土から時期を推定できる遺物が出土していない。

09-2-SD (SX) (図 24・25・31、Ph. 1・8・13・16)

位置 調査区の中央を南北に走る溝である。S40E25 を中心に位置する。

構造 07-SD と S35E25 の付近でずれるように位置する。掘削の単位のずれの可能性もある。幅約 1m で底面の幅約 50cm である。検出面からの深さは約 15cm である。

遺物出土状況 埋土 1 層から桟瓦のほか陶磁器類が多数出土した。唐津のハケ目壺や擂鉢段重の蓋、菖蒲文の椀やくらわんか手等が出土しており 18 世紀後半を中心とする時期のものと推定できる。いずれも流れ込みの遺物である。

遺物 図31の18は西洋式の銃の鉛玉と推定できる。先端が物体に当たりつぶれている。詳細な検討が必要

であるが、西南戦争（明治 10 年；1877 年）時的小銃弾と考えられ、その口径と形状からエンフィールド銃弾の可能性がある。

図 31 の 14 から 17 は棟瓦である。

また、埋土から図 31 の 12 の須恵器杯や図 31 の 13 の須恵器皿等のような古代の遺物も流れ込んで出土している。図 31 の 12 は杯の外面に下から上への縦方向の線刻を約 1.2cm 間隔で施している。

また、土瓶や刷毛目唐津や染付・擂鉢等の陶磁器類が流れ込みの遺物として出土している。（Ph. 16）

小結 西南戦争の時期には、玉名の高瀬が激戦地になつており、吉丸の丘陵地（八嘉台地）を降りるとすぐ高瀬にいたる。高瀬の戦い前後で使用された銃弾であることが推察される。

また、鉛製の銃弾であるエンフィールド銃弾が出土しているとすれば、これも詳細な検討を要するが、径約 1 cm の鉛玉は、西南戦争時に使用された散留弾の中の銃弾の可能性がある。（図 31 の 18・19）

*岡本真也氏の教示による

07-SD （図 24・25・31、Ph. 1・2・17）

位置 調査区の中央を南北に走る溝である。S20E25 を中心に位置する。06-SD が埋没してから掘削されている。

構造 09-2-SD と S35E25 の付近でずれるように位置する。掘削の単位のずれの可能性もある。幅約 90cm で底面の幅約 40cm である。検出面からの深さは深い部分で約 50cm である。遺物包含層が削平されているため、深さは 80cm 以上あったと推定できる。05-SD とは溝の芯芯距離で 6.6m 離れて平行に走る。

遺物出土状況 埋土 1 層から図 31 の 3 の棟瓦が出土している。他にも擂鉢や近世陶磁器類（くらわんか手含む）が出土している。

また、図 31 の 1・2 を出土している。中世の鉢類と推定される。流れ込みの遺物と推定できる。18 世紀後半を中心とする時期のものと推定できる。

05-SD [09-1-SD(SX)] （図 24・25、Ph. 1・17）

位置 調査区の中央を南北に走る溝である。S25E30 を

中心に位置する。

構造 幅約 130cm で底面の幅約 40cm である。検出面からの深さは深い部分で約 25cm である。遺物包含層が削平されているため、深さは 65cm 以上あったと推定できる。07-SD とは溝の芯芯距離で 6.6m 離れて平行に走る。09-2-SD との芯芯距離は 5.4m で平行して走る。

遺物出土状況 埋土から陶磁器類が出土している。（Ph. 17）擂鉢や染付椀等 18 世紀以降を中心とする時期と考えられる。流れ込みの遺物である。

小結 位置関係から 09-2-SD 及び 07-SD と関連があると考えられる。両溝との間は道路等の用途が考えられる。

73-SD （図 24・25、Ph. 1）

位置 調査区の北東に位置し東西に走る溝である。S20E0 を中心に位置する。

構造 幅約 35cm で底面の幅約 25cm である。ゆるやかな台形を呈する。検出面からの深さは深い部分で約 10cm である。遺物包含層が削平されているため、深さは 40cm 以上あったと推定できる。110-SD と 111-SD と平行して走る。111-SD とは溝の芯芯距離で約 2m 離れている。

遺物出土状況 遺構の時期を表すような遺物が出土していない。

110-SD （図 24・25、Ph. 1）

位置 調査区の北東に位置し東西に走る溝である。S20E0 を中心に位置する。

構造 幅約 35cm で底面の幅約 25cm である。ゆるやかな台形を呈する。検出面からの深さは深い部分で約 10cm である。遺物包含層が削平されているため、深さは 40cm 以上あったと推定できる。110-SD と 111-SD とは平行して走る。111-SD とは溝の芯芯距離で約 2m 離れている。

遺物出土状況 遺構の時期を表すような遺物が出土していない。

111-SD （図 24・25・30、Ph. 1・13・17）

位置 調査区の北東に位置し東西に走る溝である。

S20E0 を中心に位置する。

構造 幅約 180cm で底面の幅約 100cm である。ゆるやかな U 形を呈する。検出面からの深さは深い部分で約 20cm である。遺物包含層が削平されているため、深さは 50cm 以上あったと推定できる。110-SD と 111-SD とは平行して走る。110-SD とは溝の芯芯距離で約 2m 離れている。

遺物出土状況 埋土からは、近世陶磁器類が出土している。茶碗や土瓶類等である。(Ph. 17 下段左) 18 世紀後半以降と推定できる。

2 近代以降

01-SD・02-SD・03-SD (図 24)

位置 調査区の北東に位置し東西に走る溝である。S30E35 を中心に位置する。

構造 01-SD は幅約 20cm、02-SD は幅 10cm、03-SD は幅約 10cm で調査以前の土地利用を表すものである。耕作遺構と考えられる。深さ 15cm から 20cm である。

1002-SD・1005-SD・1006-SD (図 24)

位置 調査区の南端の S45E50 を中心に位置する。

構造 里道の下にあたり、近代の遺構と推定できる。

第IV章 まとめ

第 1 節 中世後期の区画について

玉名市教育委員会の調査で短辺（東西 170m、長辺（南北）220m 以上の連郭式城館の一部を発掘したとの見解であるが、図 2 で触れられている区画より構造は複雑を呈するものと思われる。遺物から細別はできないが、14 世紀前半から 15 世紀にかけて溝を共有したり、隣接して掘り直したりしているのではないかと考えられるが、溝の細かい時期や埋没時期を決められる程遺物は出土していない。

建物の復元は遺物包含層が削平されており、困難である。本報告書では、中世の時期にあてはまりそうなものをあえて提示した、簡易な建物や柱穴の深い建物

(30-SB 等) の可能性も指摘した。しかしながら確証に欠けるもので今後の周辺の調査に期待するのみである。

今回の調査で判明した 1 つ成果をあげれば、06-SD の検出である。近世・近代まで機能していたと思われるが、中世後期までさかのぼると推定できる。連郭式城館の区画が複雑になっていると仮定する根拠にもなる。いずれにしても周辺の調査の結果を待つしかない。

遺物包含層が削平されており、遺構の全容は不明であるが、玉名平野に抜ける道は木の葉川の流路沿いの道を通り、「津留」の地名が残る菊池川の水運の拠点の一つに至る道のほか、八嘉台地を通り、「伊倉」や「高瀬」の津（港）に至る主要道が想定されている区域であり「大堂」という地名も隣接地に残存する。

昔の地割りが良く残されておる区域であり、中世の開発領主の活躍が残されている区域であろう。

周辺の確認調査で区画及び内部が確認できれば、近世～現代の集落の原点が残されていることになり、まちづくりにいかせねばと願う。

第 2 節 古代の遺構について

遺物包含層から出土した遺物は古代のものが多い。中世や近世の溝にも古代の須恵器や土師器が流れ込んでいる。

今回小規模なものであるが、古代の掘立柱建物をいくつか検出した。必ずしも規格的とは言えないが、建物の主軸方向から見ると 3 時期に分けられる。建物の認定は難しいが、中世後期の区画が座標にほぼ沿っていることから考えて、他の軸の建物は古代に属するものと考えられる。

道路状遺構も検出した。ある時期の建物と関連があると考えられる。

さて掘立柱の建物の時期であるが、遺物包含層からは 8 世紀中葉～後葉と推定できるものが多い。竪穴建物が一般的であり、玉名市教育委員会の調査でその時期の竪穴建物を 2 基検出しているが、掘立柱建物もその時期に比定したい。

2 間 × 1 間の簡易な建物が多く、倉庫等の機能の建物も存在したと考えられる。

また、堅穴建物を 1 軒いや重複して 2 軒検出した。その時期が陶邑田辺編年で TK209～TK217 型式併行期と考えられ 7 世紀前半代である。律令制の導入前にここに集落が営まれており、重要な地点であったことが確認できた。1 km 北の城ヶ辻古墳群の立地や他の周辺の寺田古墳群等の位置から見て北側の玉名平野部を見下ろしているイメージがあったが、八嘉台地に古墳時代終末～飛鳥時代にかけての集落が見つかった意義は大きい。

第3節 縄文時代晚期について

今回の調査区で遺物包含層及び遺構から見つかった縄文土器は極めて少ない。

しかしながら玉名市教育委員会や北側に位置する寺田山口遺跡や吉丸西遺跡では縄文晚期の土器が出土している。

寺田山口遺跡では、縄文晚期から弥生時代前期の墓域を検出している。また、玉名市教育委員会の調査では晚期と推定できる連結土坑も検出している。

今回検出した土坑群は遺物包含層が削平されており、時期の認定が困難である。ただ、今回の調査で墓や貯蔵穴と推定できるものは、他に出土した遺構の時期も考えて縄文晚期に所属するものと認定している。

その仮定が許されれば、遺物包含層が削平されており、詳細は困難であるが、貯蔵エリアと墓域が混在しているエリアの可能性があろう。吉丸西遺跡周辺の調査の進展が望まれる。

第4節 近世以降の遺構について

近世の遺構は 09-SD、07-SD を新たに検出した。また、中世後期に掘削された溝が埋まる段階で幅を広げて掘り広げられており、耕作地として利用されている。近世の区画を利用しながら区画溝を利用しながら、排水や耕作面として利用しながら、その横を通路（道）として、開発をしていったものと考えられる。

また、鉄滓も出土しており（Ph. 18）、近世後期に集落内に鍛冶をしていた所があることが示唆された。

（引用・参考文献）

- ・荒木 隆宏編『吉丸前遺跡』玉名市文化財調査報告 第16集 2007
- ・玉名市史編集委員会『玉名市史』通史編 上巻 玉名市 2005
- ・玉名市史編集委員会『玉名市史』資料篇 1 絵図・地図 玉名市 1992
- ・網田 龍生「古代肥後の土器」『大江遺跡群 1』熊本市教育委員会 2007
- ・網田 龍生「奈良時代肥後の土器」『先史学・考古学論究』龍田考古会 1994
- ・網田 龍生「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』X 中世土器研究会 1994
- ・山本 信夫「北部九州の 7～9 世紀中頃の土器」古代土器研究会第1回シンポジウム資料 奈良国立文化財研究所 1992
- ・「大宰府市史」考古資料編 太宰府市 1999
- ・陸上自衛隊北熊本修親会編『新編 西南戦史』付図集 1977 原書房

吉丸前遺跡における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネを中心とするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。

2. 試料

分析試料は、玉名市教育委員会調査III区の土層断面（概略位置は図4参照）、および熊本県調査V区（本報告）の08a-SI(102-SI)（住居跡）の埋土と住居外から採取された計10点である。試料の詳細を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1 g に対し直径約 $40 \mu\text{m}$ のガラスピーズを約 0.02g 添加（電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法 ($550^{\circ}\text{C} \cdot 6$ 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 ($300\text{W} \cdot 42\text{kHz} \cdot 10$ 分間) による分散
- 5) 沈底法による $20 \mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体重、単位 : 10—5 g）をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は 2.94（種実重は 1.03）、ヨシ属（ヨシ）は 6.31、ススキ属（ススキ）は 1.24、メダケ節は 1.16、ネザサ節は 0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は 0.75、ミヤコザサ節は 0.30 である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1、図2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ムギ類（穎の表皮細胞）、キビ族型、ヨシ属、シバ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）

[イネ科—タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、マダケ属型、未分類等

[イネ科—その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

[樹木]

クスノキ科、その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

1) III区の土層断面（図1）

IIIa 層からV層までの層準について分析を行った。その結果、最下位のV層ではミヤコザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、およびクスノキ科などの樹木も検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い。IV層では、メダケ節型やネザサ節型が大幅に増加しており、ススキ属型も出現している。IIIc 層ではクスノキ科などの樹木が増加しており、メダケ節型やネザサ節型はやや減少している。IIIb 層とIIIa 層では、イネ、ムギ類（穎の表皮細胞）、シバ属、マダケ属型が出現しており、メダケ節型やネザサ節型は減少している。イネの密度は 1,400～2,000 個 /g と比較的低い値であり、稻作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている 3,000 個 /g を下回っている。ムギ類（穎の表皮細胞）の密度は 700 個 /g と低い値であるが、穎（穂殼）は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。おもな分類群の推定生産量によると、IV層より上位ではメダケ節型およびネザサ節型が優勢となっている。

2) V区住居内（図2）

08a (102-SI) 住居跡の埋土（1層、2層）では、ネザサ節型が多量に検出され、メダケ節型も比較的多く検出された。また、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型、クスノキ科なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、メダケ節型およびネザサ節型が優勢となっている。

3) V区住居外（図2）

3 (V) 層では、ミヤコザサ節型が比較的多く検出され、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、クスノキ科なども検出された。2層ではススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型が大幅に増加しており、イネやシバ属も出現している。イネの密度は 700 個 /g と低い値である。1層ではイネが増加しており、他の分類群は減少している。イネの密度は 2,700 個 /g と比較的低い値である。おもな分類群の推定生産量によると、2層ではメダケ節型およびネザサ節型が優勢となっている。

5. 考察

(1) III区の土層断面

縄文時代晩期とされるV層の堆積当時は、クマザサ属（おもにミヤコザサ節）などの竹笹類を主体としたイネ科植生であったと考えられ、遺跡周辺にはクスノキ科などの照葉樹が分布していたと推定される。古代とされるIV層から中世とされるIIIc層にかけては、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などの竹笹類を主体としたイネ科植生であったと考えられ、遺跡周辺にはクスノキ科などの照葉樹が分布していたと推定される。

中世～近世とされるIIIa層～IIIb層の堆積当時は、ススキ属やチガヤ属、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、調査地点もしくはその周辺では稻作およびムギ類の栽培が行われていたと推定される。なお、遺跡の立地や周辺の植生などから、ここで行われた稻作は畑作の系統（陸稻）と考えられる。陸稻栽培の場合は、連作障害や地力の低下を避けるために輪作を行ったり休閑期間をおく必要があることから、一般にイネの密度は水田よりもかなり低くなる。

(2) V区の住居内と住居外

08a (102-SI) 住居跡の埋土の堆積当時は、ススキ属やチガヤ属、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。また、遺跡周辺にはクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと考えられる。住居跡の埋土は、植物珪酸体の組成や密度が住居外の土層と類似していることから、住居跡は当時の周辺の土壤によって埋没されたと推定される。なお、ここでは住居の屋根材や敷物等に利用された植物の検出が期待されたが、これを示唆するような明瞭な結果は得られなかった。

住居外の1層と2層の時期には、調査地点もしくはその周辺で稻作が行われていたと推定される。前述と同様に、ここで行われた稻作は畑作の系統（陸稻）と考えられる。

文献

- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号, p. 70-83.
- 杉山真二 (1999) 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史. 第四紀研究, 38(2), p. 109-123.
- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p. 189-213.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p. 15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) —プラント・オパール分析による水田址の探査—. 考古学と自然科学, 17, p. 73-85.

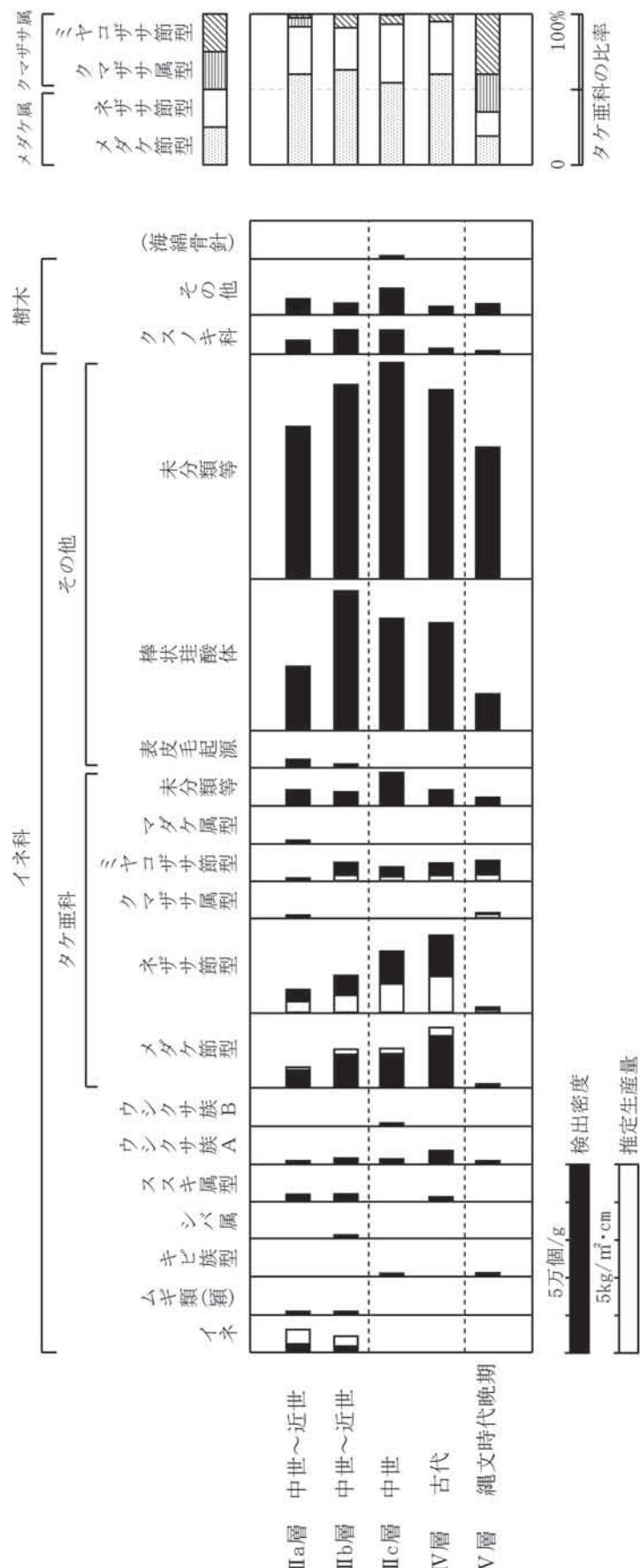
表1 熊本県、吉丸前遺跡における植物珪酸体分析結果
検出密度(単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料	III区				V区102-SI住居内			
			IIIa	IIIb	IIIc	IV	V	1	2	1
イネ科	Gramineae (Grasses)									3
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	20	14							7
ムギ類(穀の表皮細胞)	<i>Hordium-Triticum</i> (husk Phytolith)	7	7	6						7
キビ族型	Panicae type									
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)		7							
シバ属	<i>Zoisia</i>									
ススキ属型	<i>Misanthus</i> type	13	14	7						
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	7	14	12	34	7				
ウシクサ族B	Andropogoneae B type			6						
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)									
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	47	90	92	142	7	60	50	27	94
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	60	97	160	202	14	186	121	102	302
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	7								35
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	7	49	37	47	54	27	50	47	47
マダケ属型	<i>Phyllostachys</i>	7								
未分類等	Others	40	35	86	40	20	46	36	27	67
その他イネ科	Others									
表皮毛起源	Husk hair origin	20	7				13	21		7
棒状珪酸体	Rod-shaped	168	368	295	283	95	232	85	210	409
未分類等	Others	402	513	571	499	347	338	377	386	550
樹木起源	ArboREAL									
クヌキ科	Lauraceae	34	62	61	13	7	27	14	14	13
その他	Others	40	28	68	20	27	33	7	20	14
(海綿骨針)	Sponge			6						
植物珪酸体総数	Total	878	1304	1394	1287	599	1074	790	914	1671
										630

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²・cm) : 試料の反比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.59	0.41							
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)									
ススキ属型	<i>Misanthus</i> type	0.17	0.17	0.08						
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	0.54	1.05	1.07	1.64	0.08	0.69	0.25	0.75	0.09
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.29	0.47	0.77	0.97	0.07	0.89	0.58	0.31	1.09
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	0.05								
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	0.02	0.15	0.11	0.14	0.16	0.08	0.10	0.49	1.45
タケ亜科の比率 (%)										
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>	60	63	55	60	19	39	44	33	36
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	32	28	39	35	16	51	44	52	25
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	6								
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	2	9	6	5	40	6	11	2	40

*V区102-SIは08a-SIと同じ住居である。



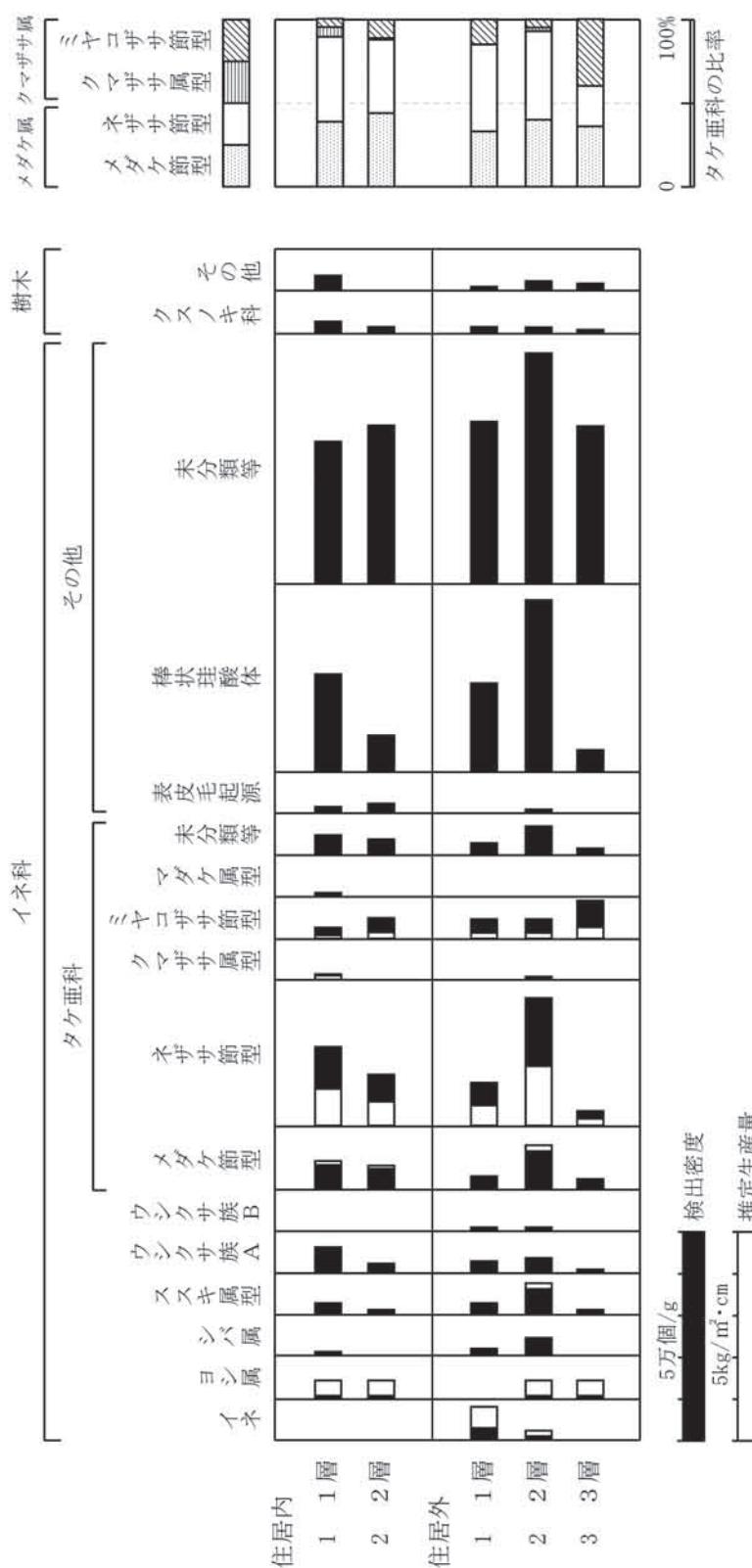
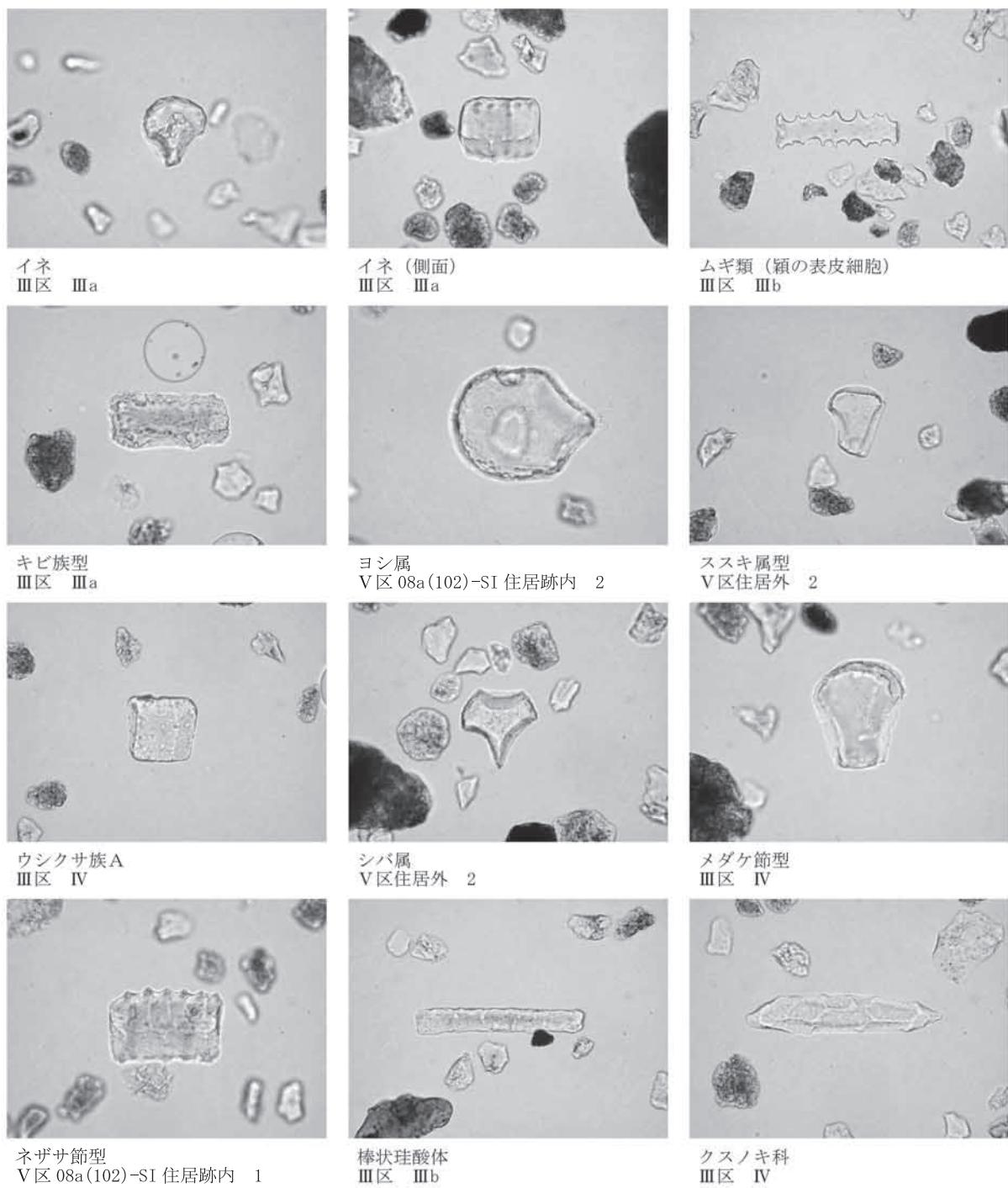


図2 吉丸前遺跡、V区102-S1住居跡における植物珪酸体分析結果

吉丸前遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)



— 50 μ m —

II. 吉丸前遺跡の各試料におけるリン・カルシウム含量分析

1. はじめに

土壤中に含まれるリンやカルシウムの起源としては、土壤の母材、動物遺体、植物遺体などがある。また、遺跡の生活面や遺構内には遺体、排泄物、代謝物、食物残渣、燃料灰などに由来するリンやカルシウムが蓄積している。カルシウムは一般に水に溶解しやすいが、リンは土壤中の鉄やアルミニウムと強く結合して難溶性の化合物となるため、土壤中における保存性が高い。このようなリンやカルシウムの性質を利用して、墓状遺構などにおける生物遺体（人骨など）の確認、および生活面や遺構面の確認などが試みられている。

2. 試料

分析試料は、基本土層のIV層とV層、08a (102) -SI 住居外の1層、2層、3層、14-SK の1層、3・4層、最下層、およびS30-E50G 地点のV' 層から採取された計9点である。

3. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子㈱製、JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP 法）による定量分析を行った。試料の処理法は次のとおりである。

- 1) 試料を絶乾（105°C・24 時間）
- 2) メノウ製乳鉢を用いて試料を粉碎
- 3) 試料を塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力 15t/□でプレスして錠剤試料を作成
- 4) 測定時間 300 秒、照射径 20mm、電圧 30keV、試料室内真空の条件で測定

4. 分析結果

各元素の定量分析結果 (wt%) を表1に示し、リン酸 (P 205) とカルシウム (CaO) の含量を図1に示す。

5. 考察

一般に、未耕地の土壤中におけるリン酸含量は 0.1～0.5%程度、耕地土壤でリン酸肥料が投入された場合は 1.0%程度である。農耕地では施肥による影響が大きく、目的とする試料の分析結果のみから遺構・遺物内における生物遺体の存在を確認するのは困難である。このため、比較試料（遺物・遺構外の試料）との対比を行う必要がある。

14-SK では、遺構埋土（1層、3・4層、最下層）について分析を行った。その結果、リン酸含量は 1.32%～1.51%と高い値であり、基本土層（IV層、V層）の 1.11～1.34%、102-SI 住居外（1層、2層、3層）の 1.17～1.42%、S30-E50G 地点（V' 層）の 1.05%と比較して、同等もしくはやや高い値となっている。カルシウム含量は、14-SK の埋土では 0.38～0.45%であり、基本土層や 08a (102) -SI 住居外の 0.74～1.18%と比較して明らかに低い値である。

以上の結果から、14-SK の遺構内部にはリン酸を多く含む何らかの生物遺体が存在していた可能性が考えられるが、比較試料との差異があまり明瞭ではないことや、カルシウム含量が比較試料よりも明らかに低いことから、後代の農耕に伴う施肥などの影響も否定できない。なお、カルシウムは一般に溶解性が大きいことから（竹追、1993）、土壤中で拡散・移動した可能性も考えられる。

文献

竹迫 紘 (1993) リン分析法. 日本第四紀学会編. 四紀試料分析法2, 研究対象別分析法. 東京大学出版会, p. 38-45.

表1 熊本県、吉丸前遺跡における螢光X線分析結果

原子No.	元素	地点・試料	1	2	3	4	5	6	7	8	9
単位: wt (%)											
11	Na ₂ O	0.162	0.165	0.088	0.236	0.264	0.080	0.034	0.052	0.190	
12	MgO	1.178	1.008	1.027	1.086	0.953	1.227	1.261	1.081	1.304	
13	Al ₂ O ₃	25.214	26.404	25.919	24.807	26.259	25.265	26.466	26.151	24.762	
14	SiO ₂	53.881	52.992	53.268	53.801	52.063	52.870	51.724	52.819	54.352	
15	P ₂ O ₅	1.338	1.113	1.416	1.259	1.166	1.513	1.514	1.321	1.049	
16	SO ₃	0.115	0.069	0.040	0.092	0.092	0.234	0.204	0.131	0.191	
19	K ₂ O	1.937	1.938	1.755	1.805	1.899	2.521	2.393	2.367	1.962	
20	CaO	1.175	0.914	1.003	0.941	0.744	0.448	0.379	0.376	0.514	
22	TiO ₂	1.514	1.565	1.568	1.625	1.726	1.543	1.609	1.551	1.619	
23	V ₂ O ₅	0.051	0.037	0.044	0.060	0.048	0.053	0.053	0.055	0.048	
25	MnO	0.596	0.603	0.530	0.555	0.521	0.451	0.522	0.449	0.463	
26	Fe ₂ O ₃	12.711	13.141	13.293	13.606	14.150	13.688	13.680	13.524	13.429	
30	ZnO	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.031	0.000	0.000	
37	Rb ₂ O	0.025	0.023	0.025	0.026	0.023	0.030	0.026	0.027	0.027	
38	SrO	0.029	0.029	0.026	0.026	0.020	0.013	0.023	0.013	0.022	
40	ZrO ₂	0.075	0.000	0.000	0.075	0.074	0.065	0.082	0.082	0.067	

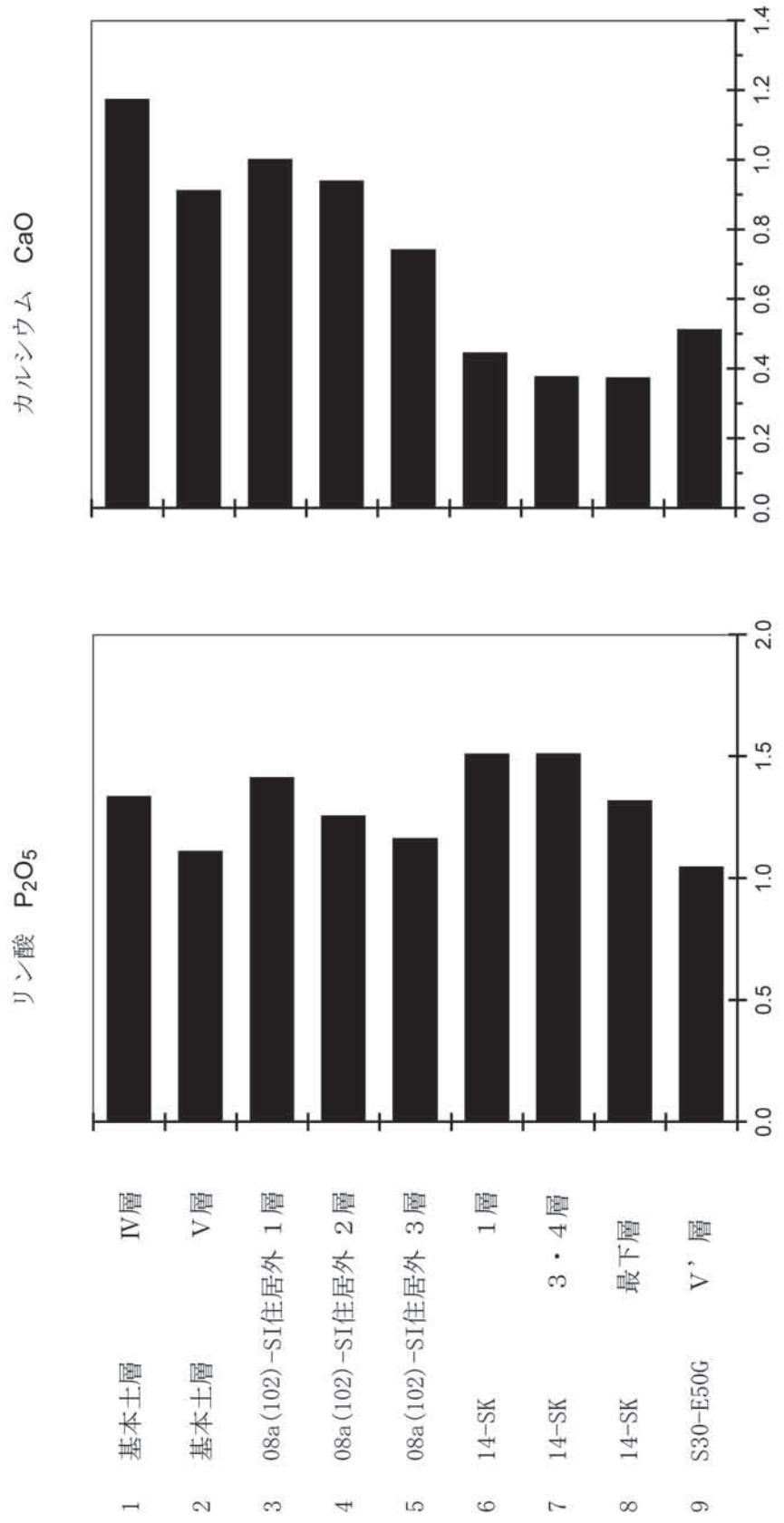
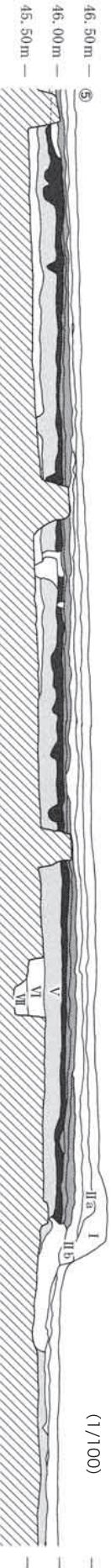


図1 熊本県、吉丸前遺跡の各試料におけるリン・カルシウム含量 (wt%)

(吉丸前遺跡 2007 玉名市教育委員会 P18・19より引用)



層位名	色調*	特徴
I		
II a		
II b		
III a	極暗褐色土層 (hue7, 5YR2/3)	現代の耕作土
III b	黒褐色土層 (hue7, 5YR2/2)	近代の耕作土
III c	黒褐色土層 (hue7, 5YR2/1.5)	
IV	黒色土層 (hue7, 5YR2/1)	中～近世の耕作土層。 しまり、粘性ともやや弱い。IIIa層に比べローム粒の混入少ない。
V	褐色土層 (hue7, 5YR4/4)	中～近世の耕作土層。 しまり、粘性ともやや弱い。IIIa・III b層に近似するが、ローム粒の混入少なく、色調はIVに近づく。IV層が攪拌されたもの。 ～近世の耕作土層。 しまり、粘性とも上層より弱い。粒子が細かく、若干下位の層の 粒子を含む。古代の包含層。 しまり、粘性ともやや強い。下位の層の小トブロックをまれに含む が、混入物は非常に少ない。細文晚期の包含層。 しまり強く、粘性やや強い。灰色～にぶい褐色の粒子をやや含む。 無遺物層。
VI	黒色土層 (hue7, 5YR2/1)	しまり強く、粘性とも非常に強い。若干の砂粒を含むローム層。
VII	褐色土層 (hue7, 5YR4/6)	

*小山正忠・竹芳秀雄著『新版標準土色版』

日本色材事業株式会社: 1986

土層柱状図および観察表

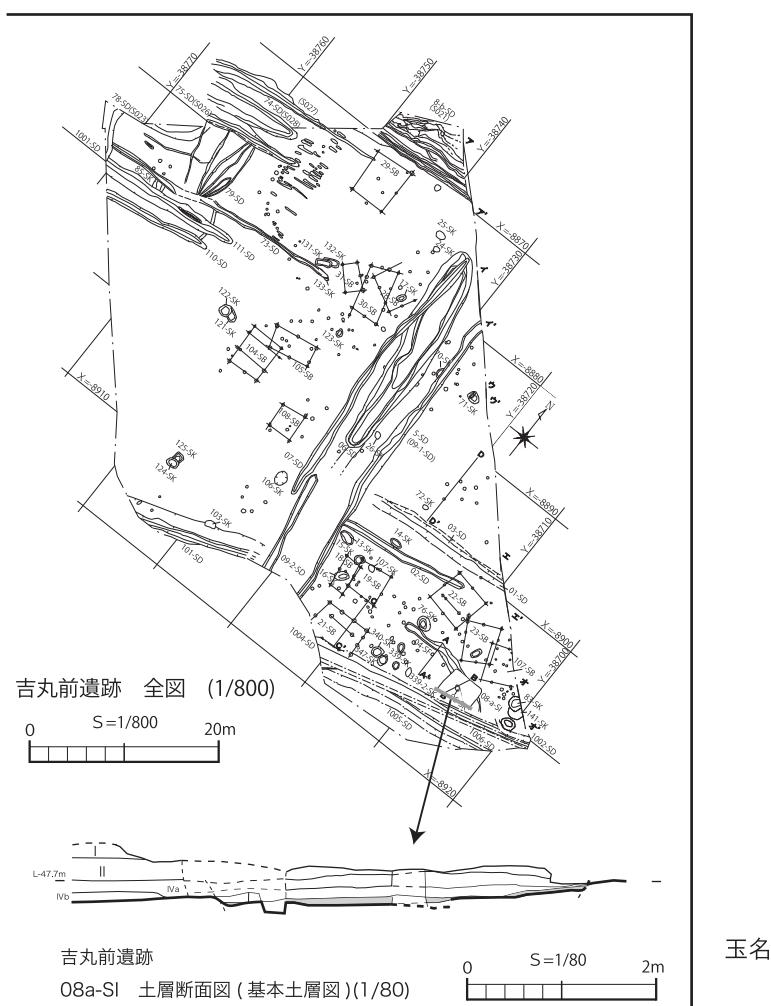


表1 石器観察表

図版番号	遺物番号	実測番号	クリット	遺構名	遺構種類	出土層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(?)	登録番号	写真番号
26	1	S2	S50_E50	-	-	暗褐色層	石鏃	黒曜石	2.4~	1.9~	0.4	6.8	15	Ph.9
26	2	S5	S45_E45	-	-	スケレイバー	黒曜石	2.9~	2.0~	1.3~	1.1	42	Ph.9	
27	1	S1	S40_E40	-	-	黄褐色層	石核	黒曜石	1.8~	2.8~	1.7~	9.9	51	Ph.9
27	2	S6	S0_E20	07	SD	一括	石核	黒曜石	3.5~	3.5~	1.55~	3.7	90	Ph.9
27	3	S3	S0_E10	08b	SD	第1層トシチ	使用痕剥片	黒曜石	3.1~	2.9~	1.3~	3.5	97	Ph.9
27	4	S4	S0_E10	08b	SD	第1層トシチ	使用痕剥片	黒曜石	2.0~	2.7~	0.7~	14.5	97	Ph.9
28	1	S8	調査区外西側	-	-	尾製石斧	片岩系	17.4	6.0	2~2.3	103.7	189	Ph.9	
28	2	S7	表土剥ぎ	-	-	打製石斧	安山岩系	8.6~	5.1~	1.8~	352.8	184	Ph.9	

表2 土器観察表

図面番号	遺物番号	遺物名	遺構	出土層位	種類	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調(外)(内)	焼成	調整(外)	備考	調整(内)	備考	残存率	登録番号	Ph.No.
29	1	S40_E50	08a	SI	万円2.2 燃焼部、埋1層	須恵器	杯蓋	口～腹部	(11.0)	2.9~	-	緑青	回転ナデ・汎線	かまど2 No.1-1	1/3×1/2	23-24	Ph.10			
29	2	S40_E50	08a	SI	燃焼部、埋1層	須恵器	杯	杯身	(10.1)	3.6~	(3.6)	密(長石)	回転ナデ・ヘラ記号	かまど2 No.1-1	1×1/6	26	Ph.10			
29	3	S50_E50	08a	SI	P-1柱痕跡	土師器	高杯	脚部	-	4.8~	-	「草」字形・魚鱗・墨 島、赤点捺	回転ナデ・ヘラ記号	かまど2 No.1-1	1/10以下	9	Ph.10			
29	4	N40_E50	08a	SI	埋1層	須恵器	杯	杯身	(14.2)	2.9~	(5.4)	美・長石・角閃石	回転ナデ・ヘラ記号	焼きは土師質	1×1/4	32-160-	Ph.10			
29	5	S32_E50	08a	SI	埋2層	土師器	甕	口縁部	(准)7.0	2.8~	-	密(長石・石英・墨) (外)淡青灰色	焼ナデ	回転ナデ・汎線ナデ	かまど2 No.1-1	1/12×1/10	31	Ph.10		
29	6	S40_E50	08a	SI	埋1層	須恵器	杯	口縁部	(准)11.0	3.6~	(7.5)	密	回転ナデ・汎線ナデ	かまど2 No.1-1	1×1/2	24-25	Ph.10			
29	7	S50_E50	08a	SI	埋1層	須恵器	甕	口縁部	(准)11.0	3.6~	(7.5)	密	焼ナデ・織錦模様の模様 ナデ・ヘラ記号	かまど2 No.1-1	1/5×1/8	3-19	Ph.10			
29	8	N40_E50	08a	SI	埋1層	土師器	甕	口縁部	(准)17.0	8.9~	-	長石・石英・墨・赤色	焼ナデ・ 格子目	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	1/10以下	20	Ph.10			
29	9	S45_E40	347	SK	埋1層	須恵器	甕	脚部	-	7.3~	-	長石・長石	焼ナデ・ 格子目	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	1/10以下	47	Ph.10			
29	10	S45_E40	339-1	SK	埋1層	土師器	甕	口縁・脚部	-	4.0~	-	密(赤色)	焼ナデ・ナデ	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	1/10以下	48	Ph.10			
29	11	S45_E45	339-1	SK	埋2層	土師器	甕	口縁部	-	1.4~	-	密(長石・墨・石英) (外)赤褐色	焼ナデ	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	1/10以下	40	Ph.10			
30	1	47	-	06	SD	埋3層	須恵器	擂鉢	脚部	-	3.6~	-	密(長石・角閃石) (外)内青灰色	焼ナデ	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	1/10以下	121	Ph.11		
30	2	S10_E20	06	SD	第1層西側	土製品	土人形	頭から下	嘴3.6~	長さ7.5~	厚さ2.4~	密(長石)	多方向擂目	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	-	84	Ph.11			
30	3	S10_E20	06	SD	埋1層	須恵器	高台付杯	底部	-	3.4~	(13.8)	外赤褐色 (中)深灰色	回転ナデ	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	1/3×1/4	85	Ph.10			
30	4	S10_E20	75	SD	一括	絹文土器	甕	底部	-	1.7~	-	長石・石英・角閃石・赤 色	ナデ(佳)	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	1/10以下	107	Ph.10			
30	5	56	-	75	SD	一括(1層)	瓦質土器	火鉢	脚部	-	4.4~	-	密(墨母・角閃石)	焼錆文 横方向ナデ	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	1/10以下	107	Ph.13		
30	6	S10_E10	74	SD	-	須恵器	高台付杯	底部	-	1.9~	-	長石・墨母	回転ナデ・ナデ	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	1/8×3/5	106	Ph.13			
30	7	S20_E10	111	SD	埋1層	瓦	棧瓦	-	幅10.4~	長さ11.7~	幅1.8~	密(長石マーブル灰) 1.3~色層が入る。	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	16c~19c	-	103	Ph.13			
31	1	44	-	07	SD	一括	須恵器	程鉢	口縁部	(准)8.0	4.1~	-	密(長石・角閃石・墨母) (外)内青灰色	回転ナデ	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	1/10×1/3	90	Ph.12		
31	2	S40_E20	07	SD	埋1層	瓦質土器	火鉢	口縁部	-	5.4~	-	密(長石)	回転ナデ	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	1/10以下	72	Ph.12			
31	3	S40_E20	07	SD	-	瓦	棧瓦	-	嘴3.9~	長さ12.3~	厚さ1.8~	密(長石・吹き出し) (裏)赤褐色 (裏)青灰色	表面いぶし	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	-	72	Ph.12			
31	4	S10_E20	08b	SD	埋1層	中世須恵器	擂鉢	口縁部	-	4.9~	-	密	ナデのち棒描眉目	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	1/8×1/5	89	Ph.12			
31	5	4	N40_E10	08b	SD	第1層レシ内	須恵器	杯	口縁・底部	-	3.9	-	外2.2Y 黄灰4.1 (内)2.5Y 黄灰5.1	ナデ・指おさえ	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	1/10以下	97	Ph.12		
31	6	8	N40_E10	08b	SD	埋1層	土師器	灯明皿	口～底部	(准)8.3	2.4	(5.4)	角閃石・墨母・赤色粒	ヘラ記号によるナデ	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	1/2×1/5	127	Ph.12		
31	7	42	S40_E20	09	SX	埋1層	土師質	焰鉢	口縁部	(准)16.0	2.8~	-	密(長石・角閃石・墨母) (内)赤褐色	回転ナデ	吉丸西遺跡・金銅702-74-SX	1/10×1/5	70	Ph.13		

図面番号	遺物番号	実測	クリット	遺物名	種類	出土地位置	遺物名	種類	部位	口径(cm)	器高(cm)	器底(cm)	底径(cm)	胎土	色調(外)(内)	焼成	調整(外)	備考	調整(内)	備考	残存率	登録番号	Ph. No.
31	8	43	S40.E21	09	SX	壺・壜	土師質	火鉢	口縁部	-	2.5~	-	-	密(長石・角閃石・雲母)	(外)内赤褐色	良	横ナデ			1/10以下	70	Ph.13	
31	9	39	S50.E22	09	SX	壺・壜	土師質	火鉢	口縁部	-	2.8~	-	-	密(長石・石英)	(内)赤褐色	良				1/10以下	57	Ph.12	
31	10	41	S40.E32	09	SX	壺・壜	土師質	火鉢	底部	-	1.4~	(12.6)	密(長石)	良	横方向十字窓(直径約11mmの第2窓)新窓左	ナデ			1/10以下	60	Ph.13		
31	11	40	S40.E32	09	SX	壺・壜	土師質	火鉢	底部	-	2.4~	-	-	密(長石)	(外)赤褐色や茶色を帯びる。(内赤褐色)	良	横方向十字窓(直径約11mmの第2窓)新窓左	ナデ	経方向窓目	1/10以下	60	Ph.13	
31	12	37	S50.E32	09	SX	壺・壜	土師質	火鉢	底部	-	0.9~	(5.8)	密(長石・石英)	(外)内青灰色	良	回転ナデヘラ切離し	ナデ		蓋の可能性あり	1/10以下	58	Ph.13	
31	13	38	S50.E20	09	SX	壺・壜	須恵器	皿	口縁底部	推(1.6)	1.7	-	密(長石)	(外)内青灰色	良	回転ナデ			1/10以下	68	Ph.12		
31	14	51	S40.E32	09	SX	壺・壜	土師質	火鉢	端部	幅(4.1~	長さ3.5~	厚さ1.5~	密(長石)	(外)赤褐色	良	横方向ナデ	ナデ			1/10以下	62	Ph.13	
31	15	27	S40.E20	09	SX	壺・壜	土師質	火鉢	端部	-	幅(1.5~	長さ2.0~	密(長石・角閃石)	(外)赤褐色	良					-	70	Ph.13	
31	16	52	S40.E20	09	SX	壺・壜	須恵器	皿	?	幅(1.3~	長さ7.7~	厚さ2.0~	密(長石)	(外)赤褐色	良	回転ナデ				-	71	Ph.13	
31	17	53	S40.E32	09	SX	壺・壜	土師質	火鉢	平五	幅(5.0~	長さ10.6~	厚さ1.9~	密(長石・雲母)	(外)赤褐色	良	表丁寧なナデ(深らか)	ナデ				-	62	Ph.11
32	1	15	西側貯	-	-	掏出一面一括	須恵器	杯蓋	つまみ筋	幅(5.0~	長さ21.0~	厚さ2.0~	密(長石)	(外)赤褐色	良	回転ナデ(ラスリ貼)	ナデ				1/5×1/3	139	Ph.14
32	2	13	西側貯上位	-	-	掏出一面一括	須恵器	高台付杯	底部	-	2.0~	(10.2)	角閃石・雲母	長石	付輪然つまみ、(外)赤褐色	良	付輪然つまみ、(外)赤褐色	ナデ			1/10×1/2	139	Ph.14
32	3	16	S32.E32	-	-	掏出一面一括	須恵器	杯	底部	-	2.7~	(10.4)	角閃石	長石	回転ナデ(ラスリ貼)	ナデ				1/6×1/2	64	Ph.14	
32	4	25	S40.E40	-	-	黄褐色層	須恵器	高台付杯	底部	-	1.3~	(9.4)	密(長石)	良	回転ナデ(ラスリヘラスリ)回転ナデ・指ナデ	ナデ				1/8×1/4	50	Ph.14	
32	5	14	西側貯上位	-	-	掏出一面一括	須恵器	杯	底部	-	1.9~	(7.8)	長石・雲母	良	回転ナデ(ラスリヘラスリ)回転ナデ・指ナデ	ナデ				1/10×1/2	139	Ph.14	
32	6	12	西側貯上位	-	-	掏出一面一括	土師器	楕	底部	-	2.2~	(8.0)	密(長石)	良	近世機器の土蔵のドガモ-電	ナデ				1/10×1/2	139	Ph.15	
32	7	28	南側	-	-	須恵器	高杯	脚部	-	3.1~	-	密(長石)	(外)青灰色	良	外面に自然釉かかる。	ナデ				1/10以下	136	Ph.14	
32	8	29	南側	-	-	須恵器	高杯	脚部	-	1.7~	(9.9)	密(長石・雲母)	(外)内赤褐色	良	7c後半～切頭	ナデ				1/10以下	136	Ph.15	
32	9	22	S50.E30	-	-	暗褐色層	須恵器	杯	蓋	-	1.8~	-	密(長石・角閃石)	(外)内青灰色	良	回転ナデ(ラスリヘラスリ)・ヘラ引	ナデ				1/10×1/2	139	Ph.14
32	10	20	S32.E30	-	-	暗褐色層	須恵器	高杯	杯部	(14.0~	2.1~	-	密(長石)	(外)内青灰色	良	回転ナデ(ラスリヘラスリ)回転ナデ	ナデ				1/4×1/4	35	Ph.14
32	11	33	S50.E40	-	-	-	須恵器	高杯	脚部	-	1.2~	(13.6)	密(長石)	(外)内青灰色	良	回転ナデ(ラスリヘラスリ)回転ナデ	ナデ				1/3×1/10	43	Ph.14
32	12	23	S50.E30	-	-	暗褐色層	須恵器	長期壺	口縁部	(15.1)	2.8~	-	長石	(外)内青灰色	良	回転ナデ(ラスリヘラスリ)回転ナデ	ナデ				1/9×1/12	12	Ph.14
32	13	21	S32.E30	-	-	暗褐色層	須恵器	壺	口縁部	-	3.8~	-	密(長石)	(外)内青灰色	良	回転ナデ(ラスリヘラスリ)沈線	ナデ				1/10以下	11	Ph.15
32	14	31	S50.E30	-	-	暗褐色層	土師器	高杯	脚部	-	1.7~	(13.0)	密(長石・角閃石・石英)	(外)赤褐色	良	摩滅が著しい。	ナデ				1/8×1/8	13	Ph.15
32	15	32	S50.E40	-	-	-	土師器	杯	底部	-	1.0~	(7.9)	密(長石・石英)	(外)内赤褐色	良	摩滅が著しい。大量有鉄量平	ナデ				×	43	Ph.14
32	16	30	南側	-	-	掏出一面一括	土師器	皿	底部	-	0.5~	-	密(長石)	(外)内赤褐色	良	外面部部に柘本粘付	ナデ				1/10以下	136	Ph.15
32	17	35	S40.E20	-	-	-	土師質	火鉢	底部	-	1.3~	(14.0)	密(長石)	(外)内青灰色	良	ナデ・指ナデ	ナデ				1/9×1/10	73	Ph.15
32	18	34	S40.E20	-	-	-	瓦質土器	火鉢	口縁部	-	2.2~	-	密(長石・角閃石・石英)	(外)内赤褐色	良	外面部部に柘本粘付	ナデ				1/10以下	73	Ph.15
32	19	17	表土剥ぎ	-	-	-	土師器	杯	底部	-	1.9~	(10.7)	長石	(外)内5YR明茶7.6	良	摩滅が著しい。	ナデ				1/6×1/2	155	Ph.15
32	20	19	表土剥ぎ	-	-	-	瓦	平瓦	-	幅9.3~	長さ29.5~	厚さ1.8~	角閃石・雲母・石英	(外)内22.5YR明赤褐5.6	良	表ナデ・指ナデ	ナデ				-	144	Ph.15

义 面

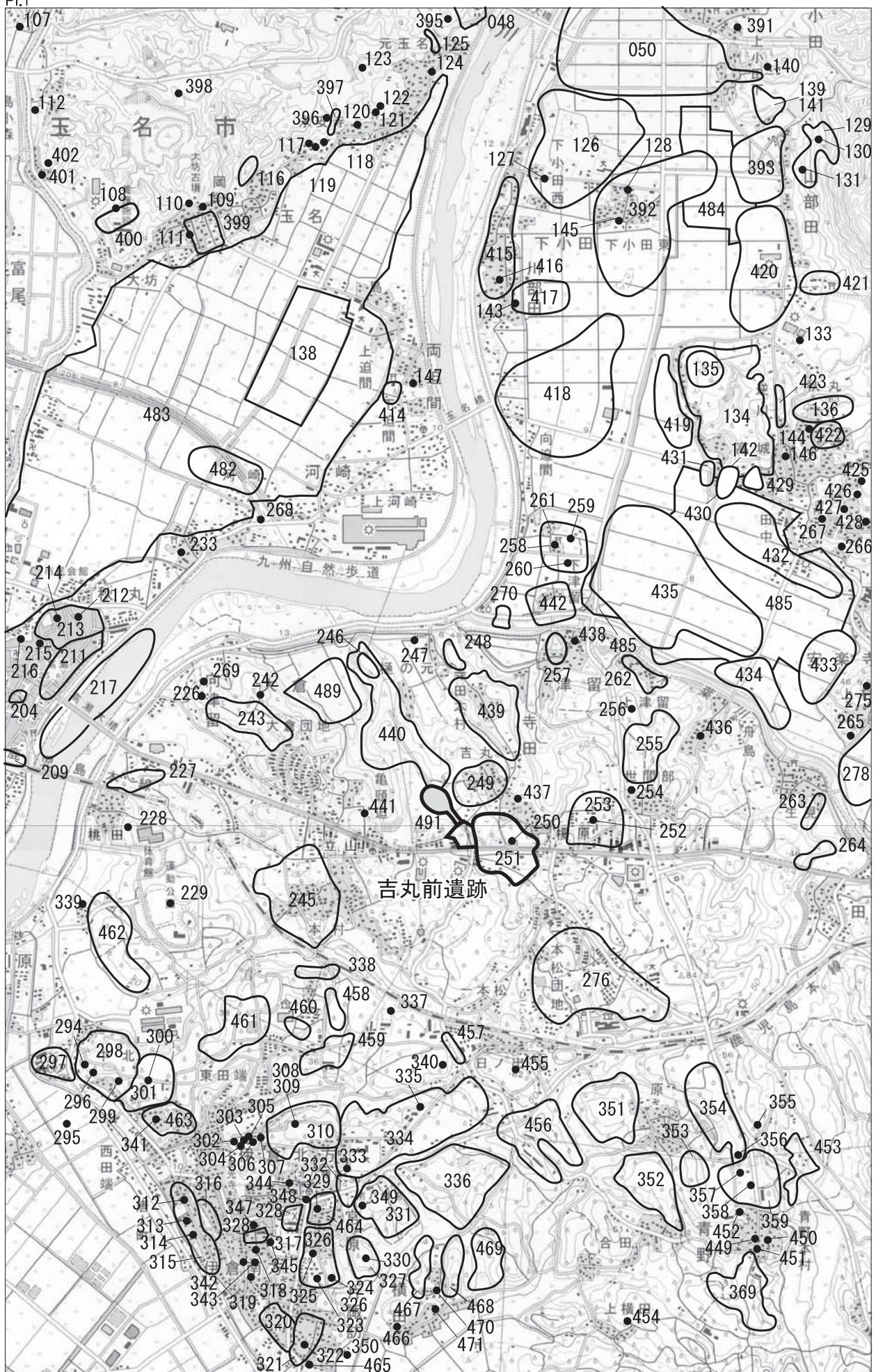


図1 周辺遺跡分布図(1/25.000)

0 1000m
1/25000

図1 付表1 吉丸西遺跡周辺遺跡表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
491	吉丸前	寺田吉丸前	縄文～中世	包蔵地		
482	柳町	玉名市河崎柳町	縄文～平安	集落	県調査、文字資料	
126	上小田古屋敷	上小田 古屋敷	縄文～中世	包蔵地	土師器・須恵器片散布	
251	吉丸西	寺田 吉丸	縄文～中世	包蔵地		
253	寺田久保	寺田 久保	縄文～中世	包蔵地		
262	上津留	津留 部田	縄文～中世	包蔵地		付近畑地耕作で発見と伝えられる
270	津留中林	津留 中林	縄文～中世	包蔵地		
301	中北	伊倉北方 五社	縄文～中世	包蔵地		
310	本村	伊倉北方 本村	縄文～中世	包蔵地		
211	高瀬本町通	高瀬 保田木町など	縄文～近世	包蔵地		地道路3.5mの下層、鎌倉期の遺物大量出土
320	片諫訪貝塚	片諫訪 屋敷	縄文～鎌倉	貝塚		
212	保田木貝塚	高瀬 保田木町	縄文	貝塚	城跡神社境内全域、阿高式中心	
227	桃田貝塚	大倉 桃田原	縄文	貝塚	JR線北2箇所、阿高式～土師器・須恵器	
332	伊倉八幡宮境内	宮原 北方ほか	縄文	包蔵地	縄文土器、阿高式・御領式を多く含む	
334	伊倉宮の後	伊倉北方 宮の後	縄文	包蔵地	縄文、阿高式・御領式土器・石斧・石鏃	
138	両迫間日渡	両迫間 日渡	弥生・古墳	包蔵地	弥生土器・土師器・須恵器包含、水田中	
351	青野原	青野 原・北原	弥生・古墳	包蔵地	弥生土器・土師器・須恵器包含、水田中	
352	合田	青野 合田	弥生・古墳	包蔵地		
354	青野本村曲煙	青野 本村・田の尻	弥生・古墳	包蔵地	弥生～古墳土器多量包含	
359	青野天神原	青野 天神原	弥生・古墳	包蔵地	弥生～古墳期土器包含	
369	青野本村堂の久保	青野 本村堂の久保	弥生・古墳	包蔵地		
243	亀頭迫	大倉 亀頭迫など	弥生～中世	包蔵地	土師器・弥生後期	
245	立山	大倉(通称立山)	弥生～中世	包蔵地	弥生後期、土師器等散布	
255	部田	津留 部田	弥生～中世	包蔵地	高台畑地、磨製大型石鏃出土	
276	一本松	田崎 一本松ほか	弥生～中世	包蔵地	甕棺群あり	
298	城が崎	伊倉北方 五社	弥生～中世	包蔵地	町北端舌状台地上、広範に弥生中期遺物を含む	
299	中北△	伊倉北方	弥生～中世	埋葬	小児合口式4基出土、1期鉄斧、外副葬品	
316	唐人町貝塚	北方	弥生～中世	貝塚		
050	上小田宮の前	上小田 宮の前など	弥生	包蔵地	弥生土器・石斧・土師器・須恵器	
116	岡箱式石棺群	玉名 上原	弥生	埋葬	妙修寺の墓地内3基・2基保存	
136	秋丸	下 秋丸	弥生	包蔵地	弥生土器多量出土	
295	五社支石臺参考地	伊倉北方 五社	弥生	埋葬	十五社石祠、旧城跡にあり、台石は掌石か	
297	城が崎貝塚	伊倉北方 五社下	弥生	貝塚	町北端舌状台地上、南裾一帯弥生貝層出土多量	
321	片諫訪	片諫訪 屋敷	弥生	包蔵地	貝塚のある台地一帯	
326	宮原土井の内	宮原 土井内	弥生	包蔵地	弥生石器・土器出土	
327	禮社	宮原 禮社	弥生	包蔵地	弥生土器散布	
328	伊倉宮原町	宮原 屋敷	弥生	包蔵地	弥生土器散布	
331	伊倉宮川	宮原 宮川	弥生	包蔵地	弥生土器・石器	
335	伊倉宮の後甕棺群	伊倉北方 宮の後	弥生	埋葬	合口甕棺多数	
336	伊倉古宮原	宮原 古宮原	弥生	包蔵地	弥生土器・土師器・須恵器散布	
213	保田木城跡・高瀬町奉行所跡	高瀬 保田木町	中世～近世	城	保田木神社内、外濠一部残存、高瀬城ともいう	
048	玉名の平城跡	玉名 平城	中世	城	菊池川右岸に屹立、眺望地	
107	中原寺跡	瀬川 中原	中世	寺社	石塔群	
110	大坊寺跡	玉名 東屋敷	中世	寺社	大坊前天満宮社地、糸切皿が出土する	
111	大坊五輪塔群	玉名 大坊	中世	石造物	部落中5～6基祀る	
112	小畠六地蔵塔	石貫 小畠	中世	石造物	玉名～南関県道端	
119	永安寺跡・永安寺古塔碑群	玉名(通称永安寺)	中世	寺社	東古墳の東隣、玉名大神宮西、五輪塔・宝塔、在銘	
124	大永・弘治の板碑群	玉名 浦小路	中世	石造物	元玉名の地蔵堂前に2基あり	
128	下小田養寺塚	下小田 養寺	中世	墳墓	養音寺跡という、板碑あり	
130	長建寺跡	山部田 瀬戸坂	中世	寺社	木葉山の西裾、現在形跡なし	
131	諫訪宮跡	山部田 出羽	中世	寺社	熊野宮に合祀、現在形跡なし	
135	下村城跡	下 高城	中世	城	本丸跡に薬師堂・五輪塔群あり	
141	上小田城跡	上小田下 徳丸など	中世	城	中世丘城古墳、改造の形跡	
142	大宝院跡	下 和田	中世	寺社		
143	金光寺跡	川部田 東屋敷	中世	寺社		
144	海福寺跡	下 白丸	中世	寺社		
145	養音寺跡	下小田 養寺	中世	寺社		
146	普門寺跡	下 田中	中世	寺社		
147	長慶寺跡	両迫間 上川端	中世	寺社		
204	宝成就寺跡(古塔碑群・石仏群)	高瀬 下町	中世	包蔵地	市 多くの古塔碑・石仏を残す、跡地小学校建つ	
209	大倉山永徳寺跡	永徳寺 出口	中世	寺社	藏跡北隣の地、形跡なし	
214	高瀬山清源寺跡	高瀬 保田木町	中世	寺社	保田木城西隣、墓地のみ残る	
215	龍造寺隆信首塚	高瀬 横町	中世	墳墓	願行寺境内、主体は明治4年佐賀に移す	
216	大覚寺豪室宝塚印塔	高瀬 横町	中世	石造物	大覚寺本堂前、市内3基の1つ	
233	金盆山玉飯寺跡	川崎 出の上	中世	寺社	川崎八幡神宮寺墓地のみのこる	
237	長福寺跡	高瀬 八日町	中世	寺社		
247	城が辻城跡	寺田 城が辻	中世	城		
257	花群山吉祥寺跡	津留 堂園	中世	寺社	峠い高台上、跡地に毘沙門天を祀る	
258	安楽寺跡	津留 太郎丸	中世	寺社	跡地に氏神菅原神社を祀る	
259	安楽寺居館跡	津留 太郎丸	中世	包蔵地	跡地に氏神菅原神社を祀る、	
260	菅原神社の六地蔵	津留 白柏子	中世	石造物		
261	安楽寺	津留	中世	寺社		
263	朝日寺跡	安楽寺 生見	中世	寺社	跡地に觀音堂・板碑あり、規模拡大	
266	善応寺跡	下 平野	中世	寺社		
267	賢長寺跡	下 桑迫	中世	寺社		
268	金盆山玉飯寺跡	川崎 烟尾	中世	寺社		
269	金地山松林寺跡	向津留 下	中世	寺社		
275	安楽寺京塚	安楽寺 京塚	中世	経塚	十王社を祀る	
294	城が崎城跡	伊倉北方 五社	中世	城	町北端舌状丘陵地、城の遺構は残らない	
302	振倉謝公墳	伊倉北方	中世	墓	安山岩自然石板碑形式、本堂山にあり	

図1付表2

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
303	大宮司宇佐一族の墓・石碑	伊倉北方 堂山	中世	石造物	市	7基あり、市指定3基
304	中尾山報恩寺跡	伊倉北方 堂山	中世	寺社		本堂山、墓地だけが残る
305	補陀落渡海碑	伊倉北方 堂山	中世	石造物		本堂山墓地内にあり、日照渡海、天正4年建立
306	本堂山古塔碑群	伊倉北方 堂山	中世	石造物		本堂山報恩寺跡あり、板碑12基、外塔
307	本村屋敷古塔碑群	伊倉北方 本村屋敷	中世	石造物		板碑1基、五輪塔部分多数散乱
308	福田寺跡	伊倉北方 本村屋敷	中世	寺社		跡地に豪壮な地蔵堂・宝篋印塔・五輪塔あり
309	福田寺跡宝篋印塔	伊倉北方 本村屋敷	中世	石造物		地蔵堂前にあり、「文政十一年戊子春」
313	桜井山安住寺跡	伊倉南方 西屋敷	中世	寺社		伊倉五山の一、祠・大銀杏(県指)あり
314	伊倉舟倍津跡	伊倉北方 八龍など	中世	包蔵地		天正以前まで貿易港をして栄えた
315	唐人町	伊倉 唐人町	中世	包蔵地		
318	肥後四位宮の墓	伊倉南方 東屋敷	中世	墓	市	浜沂郭公、中国式の異形壯重な型、元和5年建立
319	西屋敷六地蔵塔	伊倉南方 西屋敷	中世	石造物		民家の一角、石垣中にたたみこむ
322	清国父惠助の墓	伊倉南方 片諏訪	中世	墓		刀匠清國の墓といっているが疑問あり
323	伊倉城跡古碑	片諏訪 中城	中世	石造物		伊倉台地南端、五輪塔片がある
324	中ん城跡	片諏訪 中城	中世	城		伊倉台地南端、眺望地、形跡を止めぬ
329	屋敷古塔碑群	宮原 屋敷	中世	石造物		五輪塔・重塔部分あり
330	伊倉南八幡宮社寺古塔碑群	宮原 屋敷	中世	石造物		板碑・五輪塔・宝篋印塔部分
344	伊倉山太平寺跡	宮原 屋敷	中世	寺社		伊倉五山の一、観音堂あり
345	長福寺跡	伊倉南方 東屋敷	中世	寺社		伊倉五山の一、観音堂あり
346	北牟田塚1号・2号	北牟田 居屋敷	中世	墳墓		2基中世墳墓、木棺・完全人骨、昭和53年発見
347	福願寺跡	伊倉北方 馬場屋敷	中世	寺社		
348	潮音寺跡	宮原	中世	寺社		
349	神宮寺跡	宮原 屋敷	中世	寺社		
350	青雲寺跡	片諏訪 屋敷	中世	寺社		
353	青野屋敷跡	青野 合田・田の尻	中世	包蔵地		
355	七浦経塚	青野 本村・七浦	中世	経塚		古井戸、現在雜木林 内容不明
277	田崎	田崎 天神原・辻	古墳～中世	包蔵地		台地畑、土師器・須恵器片少量散布
108	西原古墳参考地	玉名 西原	古墳			玉名山西端部、楕円状の封土
109	大坊古墳	玉名 出口	古墳			横穴2室、三角連続彩色あり
117	永安寺西古墳	玉名(通称永安寺)	古墳	国		横穴單式、円文線刻
118	永安寺東古墳	玉名(通称永安寺)	古墳	国		横穴複式、円・三角・舟・馬を描く
121	馬出古墳(1~2号)	玉名 馬出	古墳	市		円墳・横穴式、舟形・箱式石棺。出土品市指定
122	小路古墳	玉名 小路	古墳	市		27mの山上にあった。他へ復元。出土品市指定
123	絵下経塚古墳	玉名 絵下	古墳			玉名大神宮裏山にあり、封土・周溝あり
125	元玉名横穴群	玉名 実極田	古墳			風化、2基
127	下小田西丸塚	下小田 陣の浦	古墳			五輪塔部分あり、中世墳墓か
133	山下古墳・山下古墳碑	山郡田 山下	古墳			前方後円墳・舟形棺。弘化5年石碑前方部石棺上
134	高城	下 高城	古墳	包蔵地		土師器・須恵器・青磁片少量散布
139	徳丸古墳群	上小田 下徳丸など	古墳	古墳		前方後円墳3基並列、舟形石棺1
226	松林寺山古墳	向津留 下	古墳	古墳		大型舟形石棺露出、棺蓋不明
228	桃田古墳	大倉 桃田原	古墳			伝箱石棺出土
229	高田古墳	大倉 高田	古墳			台地頂上、円墳内部不明
242	飯塚古墳	向津留 飯塚	古墳			円墳・保存度良し
246	城が丘古墳群(1~5号)	寺田 城が丘	古墳			1号箱式石棺・2号円墳・完形遺存・5号丘陵先端
248	寺田古墳群(1~4号)	寺田 宇土	古墳			1号台地北端・2号舟形・3号箱式石棺・4号妃女墳
250	ナカント塚古墳	寺田 吉丸	古墳			部落西南畑中、封土あり、内部不明
252	久保地下式横穴	寺田 久保	古墳			国道208号線の北大穴窟、出土品なし
254	世間部塚古墳	寺田 世間部	古墳			「塚さん」という、山伏塚か
256	上津留古墳	津留 小部田	古墳			円墳、高台北端に位置、径25mの封土遺存
264	田崎横穴群	田崎 榆山	古墳			国道208号沿い、3基と造りかけ
265	随月古墳	安楽寺 隨月	古墳			
296	中北古墳	伊倉北方 五社	古墳			県道に面する南小突端に箱式石棺をもつ
325	印鑰神社古墳	宮原 土井内	古墳			円筒埴輪・須恵器・土師器出土
333	伊倉八幡古墳	伊倉北方 宮の後	古墳			北八幡宮境内、社前に巨石材2個あり
337	垣塚古墳	伊倉北方 東垣塚	古墳			くり抜き石棺形式出土、封土不明
338	岩井口横穴	伊倉北方 岩井口	古墳			伊倉台西端崖面、かなり崩壊
339	中北アカハガ古墳	伊倉北方(通称赤壳)	古墳			高田古墳下に一封土あり、古墳と思われる
340	伊倉犬塚古墳	伊倉北方 烏越	古墳			現在封土を失う
343	鍛冶屋町製鉄跡	伊倉南方 東屋敷	古墳	生産		土師器・須恵器、伊倉刀を打つ
356	青野古墳	青野 本村	古墳			
357	青野地下式横穴	青野 田の尻	古墳			現在埋没する
358	青野天神原古墳	青野 天神原	古墳			現在天神石祠建つ
217	高瀬菊池川河床	菊池川河床	古代・中世	包蔵地		
249	吉丸	寺田 吉丸	古代・中世	包蔵地		菊花文入瓦器多量出土
278	中神久	安楽寺 中神久	古代・中世	包蔵地		古代・中世遺物散布
312	桜井川製鉄跡	伊倉北方 西屋敷	古代・中世	生産		鉱滓散布する
483	玉名平野条里跡	玉名、迫間ほか	古代・中世	生産		
484	玉名平野条里跡		古代・中世	生産		
485	玉名平野条里跡		古代・中世	生産		
485	玉名平野条里跡		古代・中世	生産		
489	玉名平野条里跡		古代・中世	生産		
129	小森田松	山郡田 猿喰	古代	包蔵地		墓標に「金誉秀清尼」とあり
140	上小田下丸塚	上小田 堂の後	古代	墳墓		円墳状を呈する
317	鍛冶屋町	伊倉南方 西屋敷	古代	貝塚		貝塚散布地、鉱滓多く散布
342	老女つやの墓	伊倉南方 西屋敷	古代	墓		法号妙妙香年三侯賜文化元年三月没、六十八才
391~472	名称不明					玉名市遺跡地図にあり

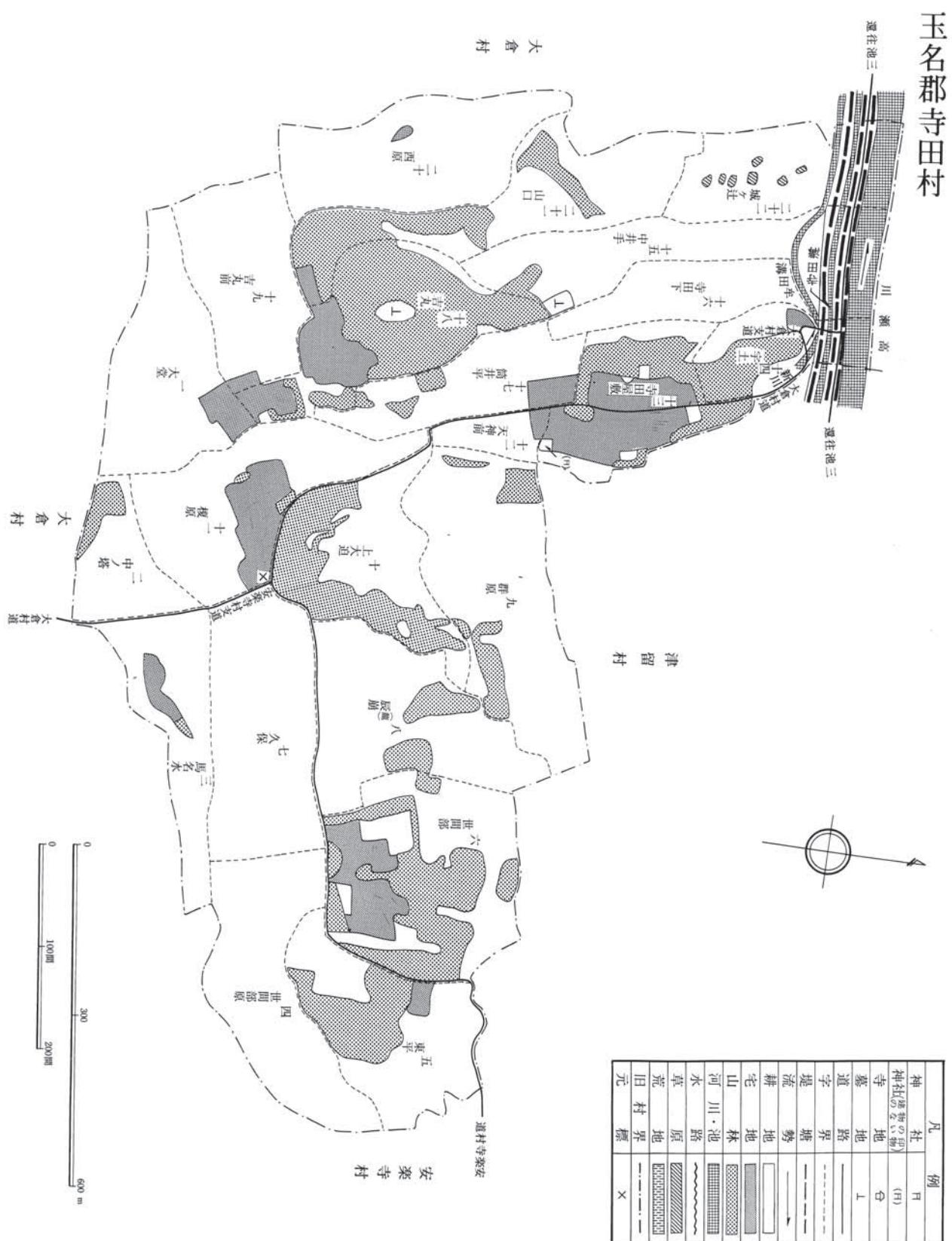


図2 吉丸前遺跡周辺古地図 (1/10,000)

引用文献 『玉名市史 資料篇 1 絵図・地図』 玉名市史編集委員会 95 頁抜粋

17 | 66 玉名郡村図（玉名市関係旧村図）

玉名郡村図
熊本県立図書館

明治十二（一八七九）年から明治十五年（一八八二）年

二一五一〇二九五、以下（各旧村の目録番号は解説の文中に別表とする）

高瀬町図、以下（玉名郡村図）

三二×四七cm、以下（各旧村図の法量は解説の文中に別表とする）

「郡村図」は、『熊本県古地図目録』（熊本県史料集成）所収の解題、森下功「明治前期地図について」によると、明治初年に編纂された郡村地誌の附図である。地誌の編纂は明治五（一八七二）年の太政官布告によつて着手され、ついで明治七年十一月には「村図ハ例則中掲載セスト雖モ便宜ノタメ可成ハ製図致シ、一町六分ノ割ヲ以取調、字地、元標・社寺等記載スヘシ」として、村図と名勝真景図の提出を希望している。次いで編集の業は同八年九月には太政官から修史局の所管に移され、翌年に内務省地理局に移管されて村図の作成が行われた。地図は地誌編集とともに庶務課地誌調掛で測量作成されたが、調掛に熟練者なく支障が多いため、同十四（一八八二）年には土木課に依頼して作成された。「玉名郡村図」についても、玉名郡図とともに各村図が右のような過程を経て作成されたであろうが、「玉名郡誌」の起稿が明治十二（一八七九）年から始まり、明治十五年に定稿が作成された。さらに明治十六年七月の熊本県知事富岡敬明から地理局長宛の進達書案（熊本県立図書館蔵）に「一同郡古城跡略図並真景図共拾五葉、右調整候ニ付、本日通達より則差出候也」とあって、郡村誌と共に郡図（一枚）、郡村図（一七二葉）を調整して地理局に提出したのである。これらのことから、掲載の「玉名郡

村図」は明治十二年から作成に着手し、明治十五年に完成させた図であるといえよう。しかしここでは「玉名郡図」一葉は残存しておらず、「玉名郡村図」一七二葉すべてが熊本県立図書館に所蔵されている。玉名市史の関係図の目録番号と技量は、次表の通りである。（表略）

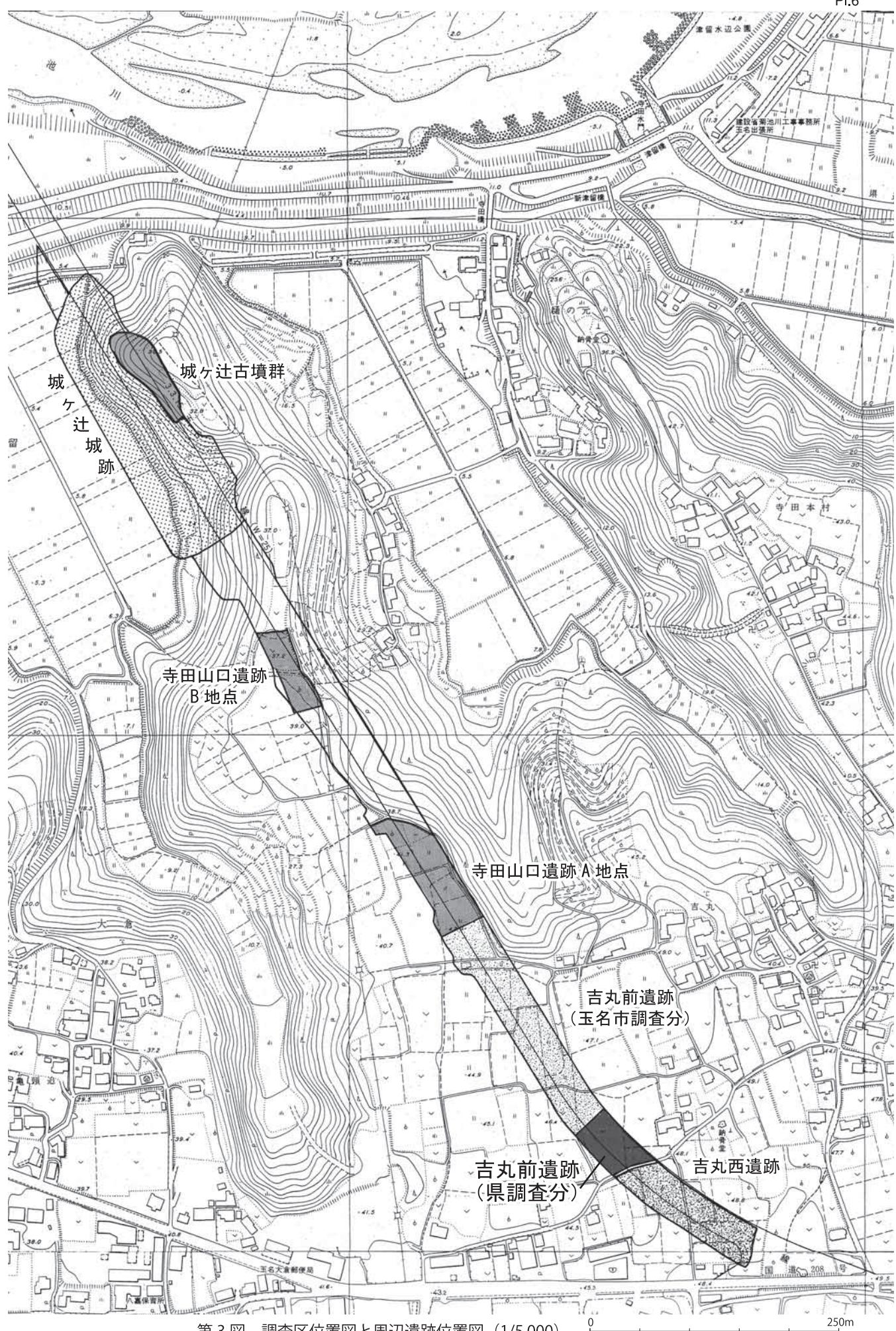
製図の方法については、「玉名郡村図」の凡例に、「村図ハ例ニヨリ一町六分ノ割ヲ以テ調整スト雖モ、土地広潤ノ小天村外二一か村ハ一町三分ノ割ヲ以テ、尤分割ハ該村図三記載ス」とあるので、一町を六分の縮尺、即ち六千分一に、広い村二一か村は一町を三分の縮尺、即ち一万二千分の一の縮小をもつて、一間を六尺と表し（玉名市域では山田村・石貫村・三津川村）、タテ三二×四七cmの用紙を多く使用して描図した。そしてその村図内に、字名と字境、社地、寺地、宅地、墓地、耕血、山林・原野、堤塘、道路、河溝、水路、堀を彩色して区分（河溝、水路、堀は水として同一色）、また×をもつて村の元標の位置を示すようにして作図されていえるので、明治初期の当時の村の姿の概観を知ることが出来る。それらの各村々の項目内容については、『郡村誌』（『玉名市史 資料篇² 地誌』所収）に記載されているので、両者を併用すると、なおさら明確に村の姿が判明する。なお本『玉名市史 資料篇¹ 絵図・地図』には、玉名市関係の旧村図を掲載するとともに、その村図のトレース版の図版の作成方法は各村図の凡例を参照していただきたい。また下村、三津川村、石貫村、築地村の四か村についてえ、小字名を明確にする意味で部分的に拡大した図版とした。

（森山恒雄）

引用文献 『玉名市史 資料篇¹ 絵図・地図』

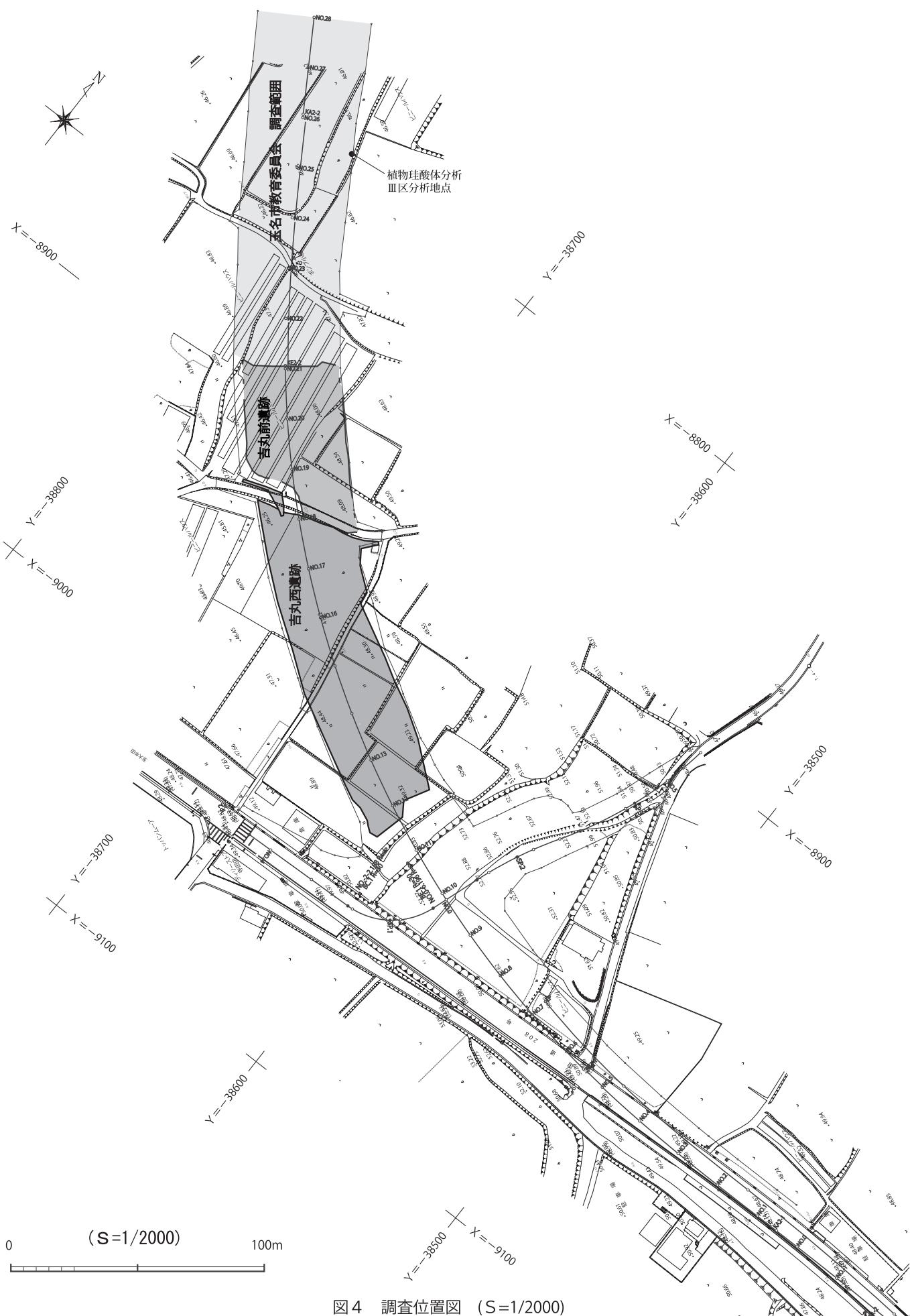
玉名市史編集委員会 玉名市

203・204頁 抜粋



第3図 調査区位置図と周辺遺跡位置図 (1/5,000)

0 250m
(菊池川左岸) (1/5000)

図4 調査位置図 ($S=1/2000$)

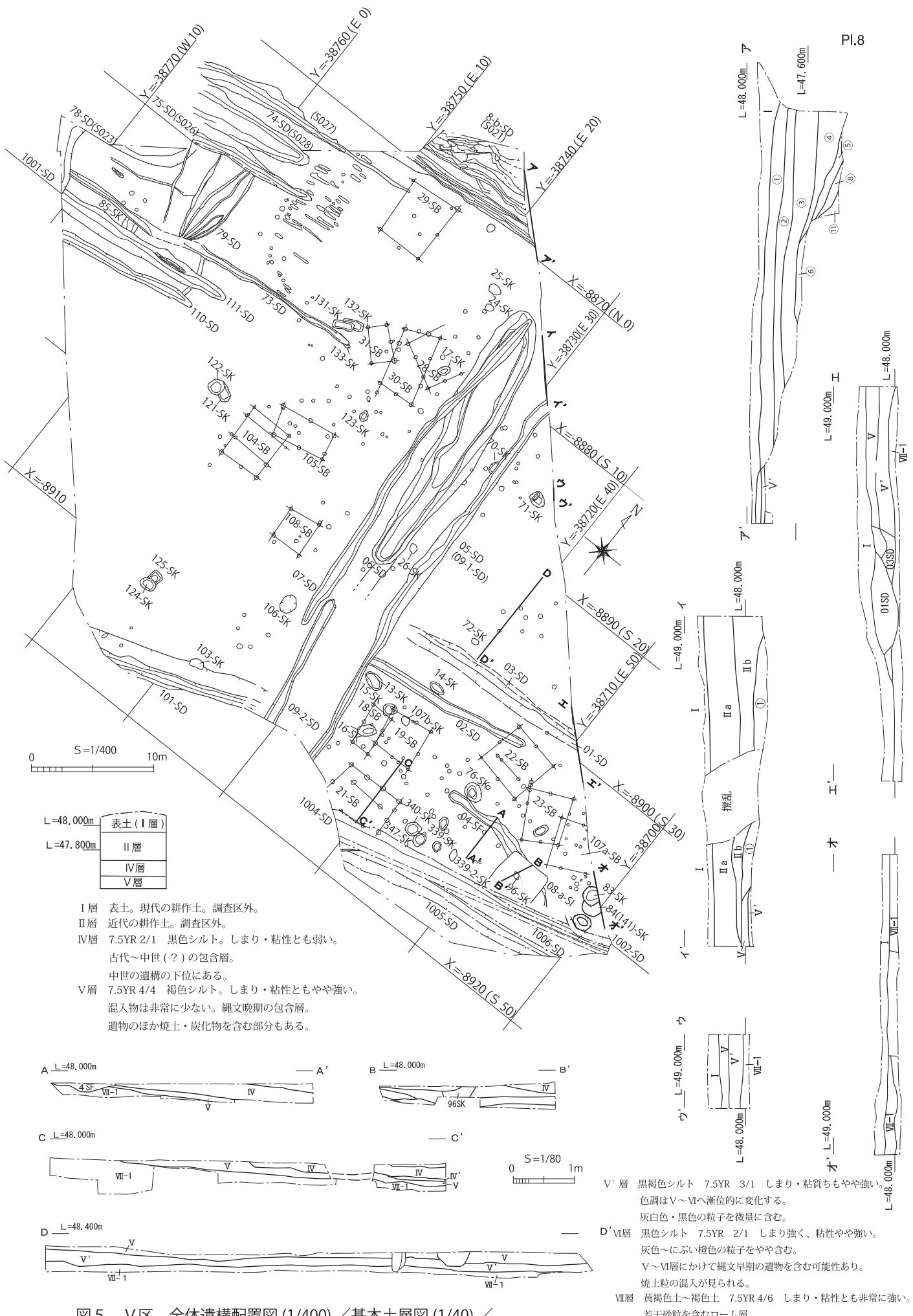


図5 V区 全体構造配置図(1/400)／基本土層図(1/40)／

北東壁面土層断面図 (1/80) / 土層断面図 (1/80)

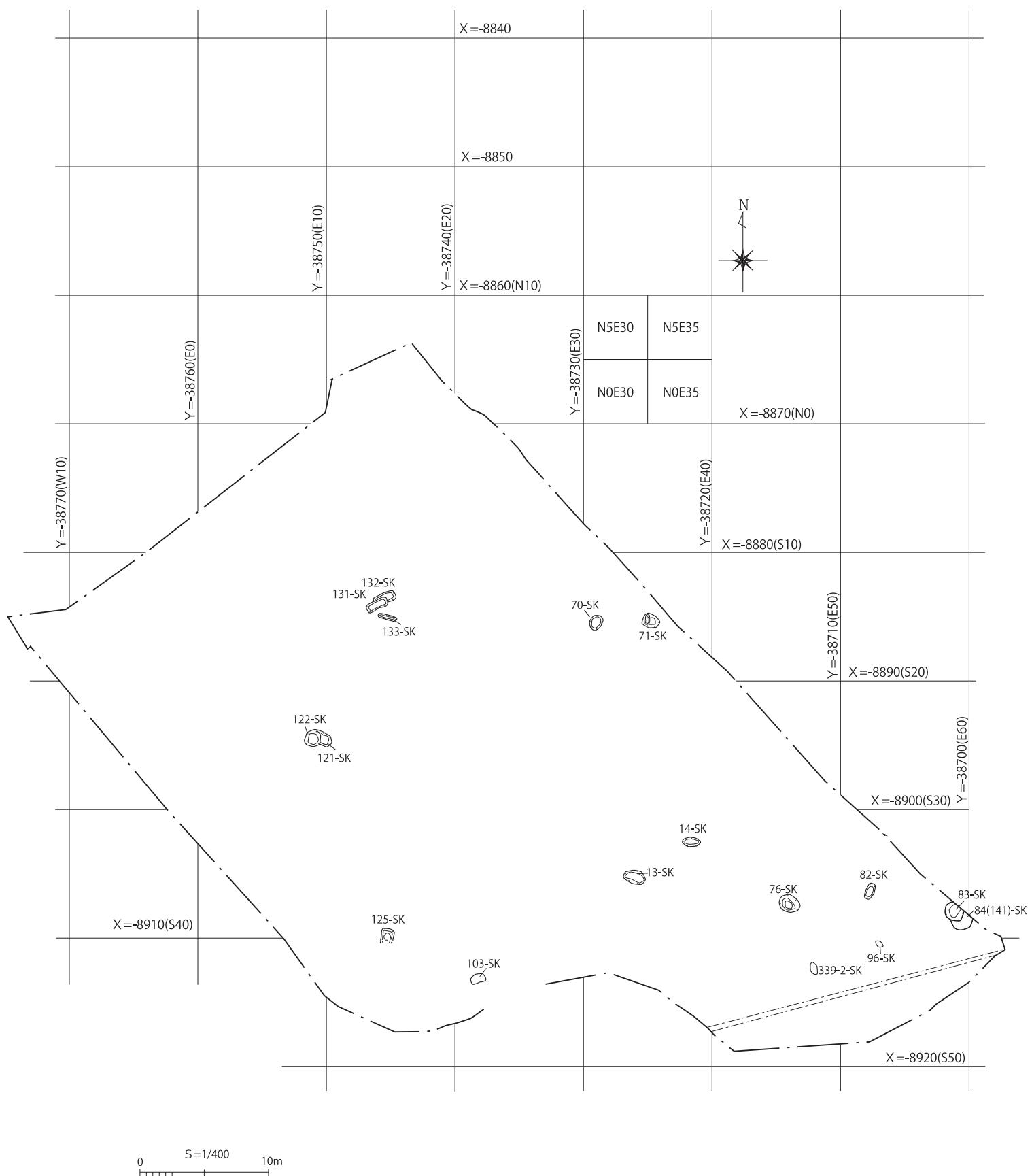
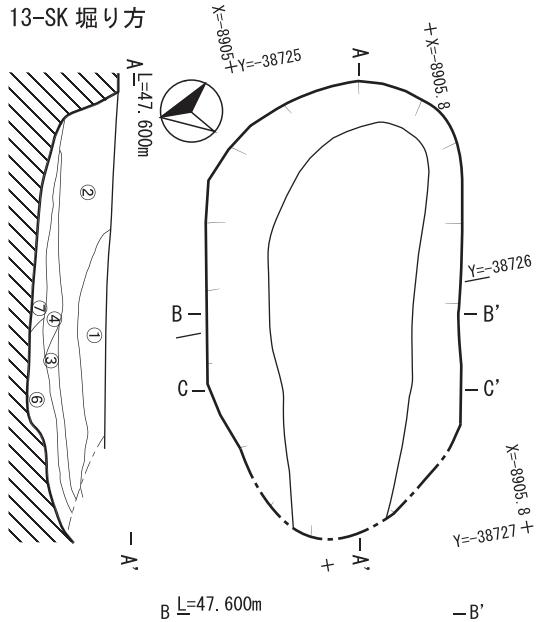
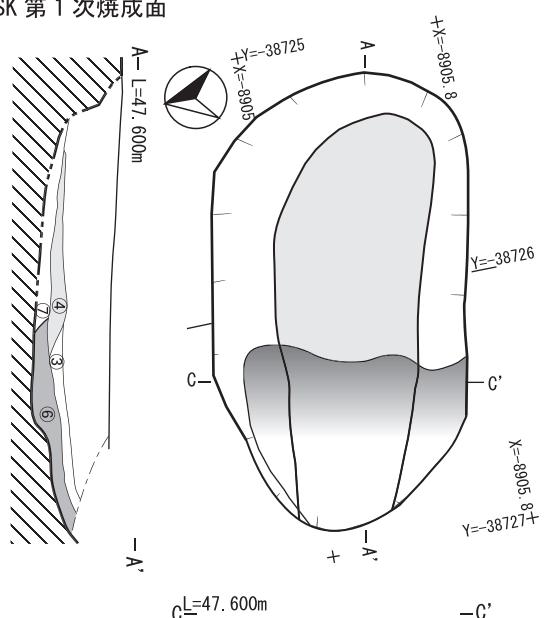


図6 繩文時代遺構配置図 (1/400)

13-SK 堀り方

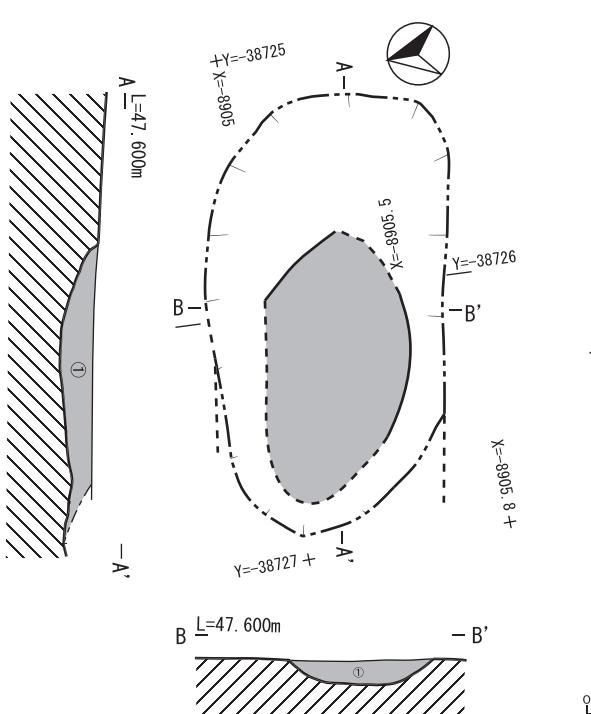


13-SK 第1次焼成面



13-SK 土層
 ①黒褐色粘質土 7.5YR2/2
 粘性がやや強く炭化物・焼土を多量に含む。
 ②暗褐色粘質土 7.5YR3/3
 黄褐色ブロックをわずかに含み、
 焼土・炭化物を多く含む。
 ③褐色粘質土 7.5YR4/3
 烧土・炭化物を多く含み、
 硬い焼土ブロックが多く見られる。
 ④灰褐色粘質土 7.5YR4/2
 炭化物・焼土をやや含む。
 ⑤暗褐色粘質土 7.5YR3/3
 ややしまりあり。
 ⑥にぶい褐色粘質土 7.5YR5/4
 10cm 大の焼土塊を含み、
 炭化物・焼土が認められる。
 焼きしまった土。
 ⑦にぶい褐色粘質土 7.5YR5/3
 烧土・炭化物を微量に含み、しまりあり。

13-SK 第3次焼成面



13-SK 第2次焼成面

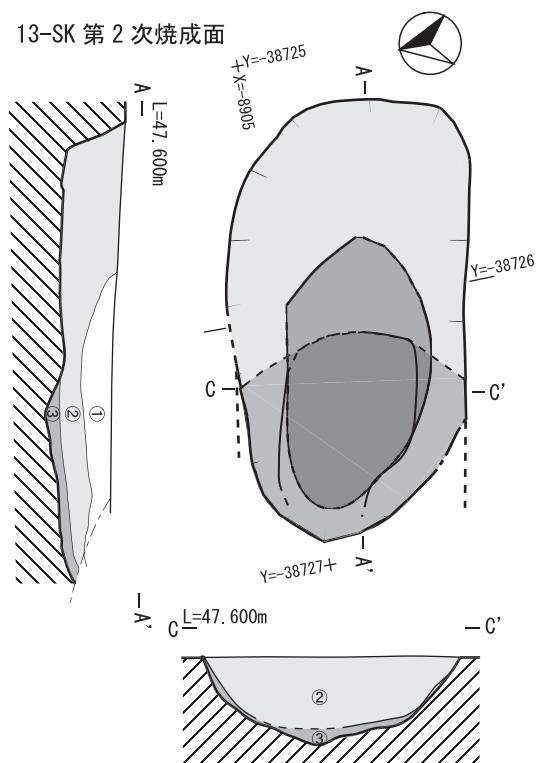


図4 繩文土坑(13-SK)平面・断面図 1(1/30)

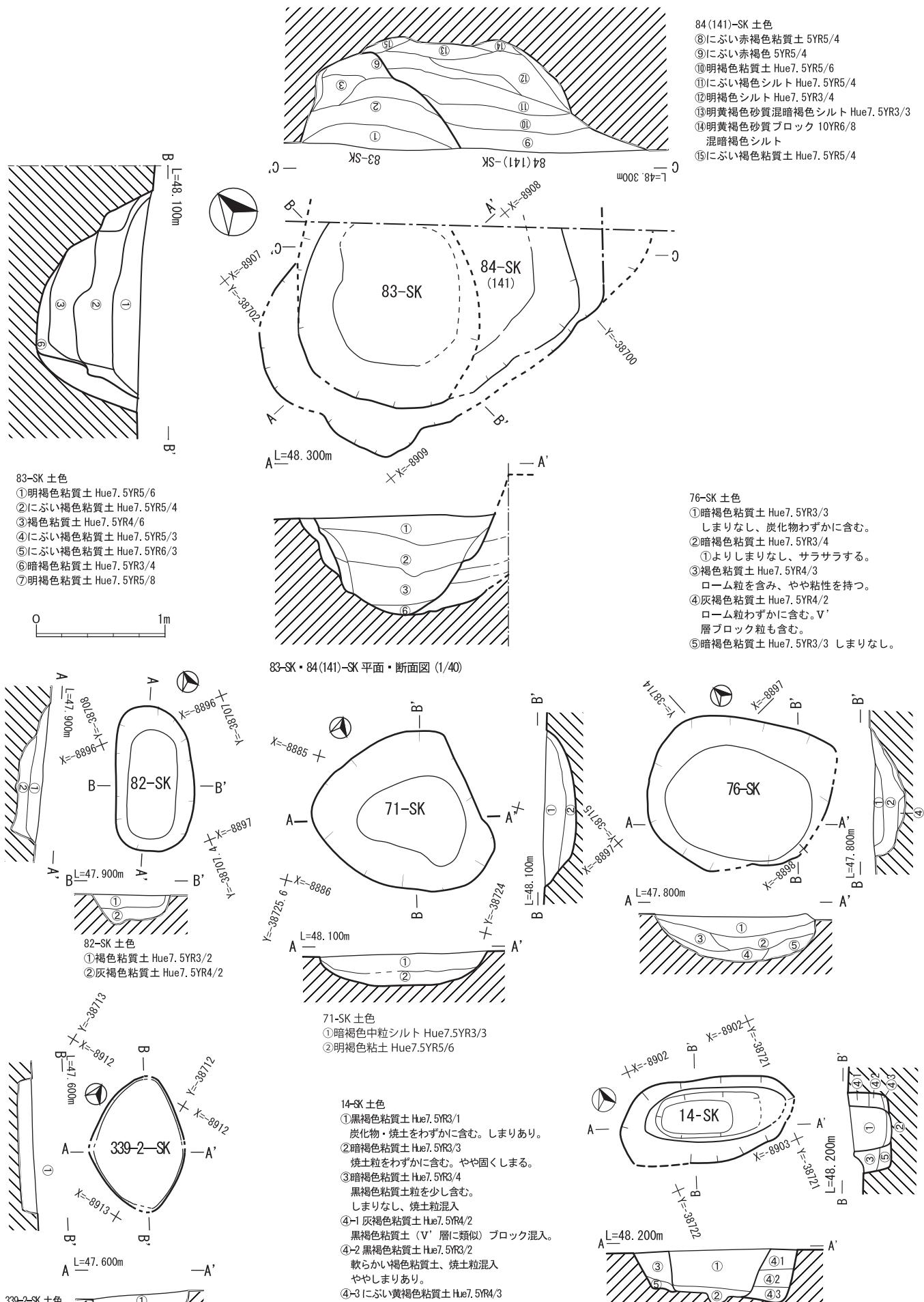


図 8 繩文土坑 (83・84(141)・82・76・339-2・71・14-SK) 平面・断面図 2 (1/40)



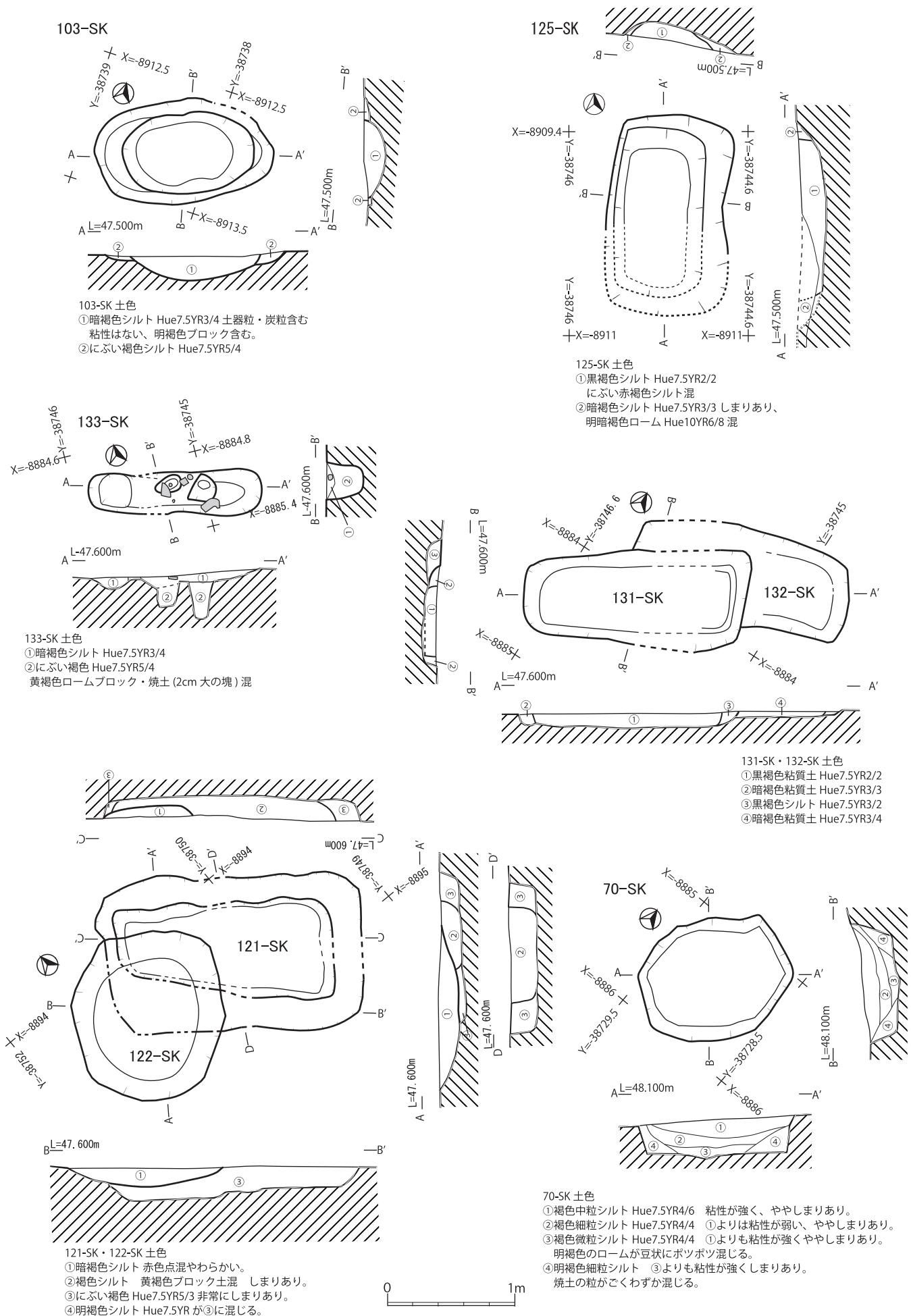
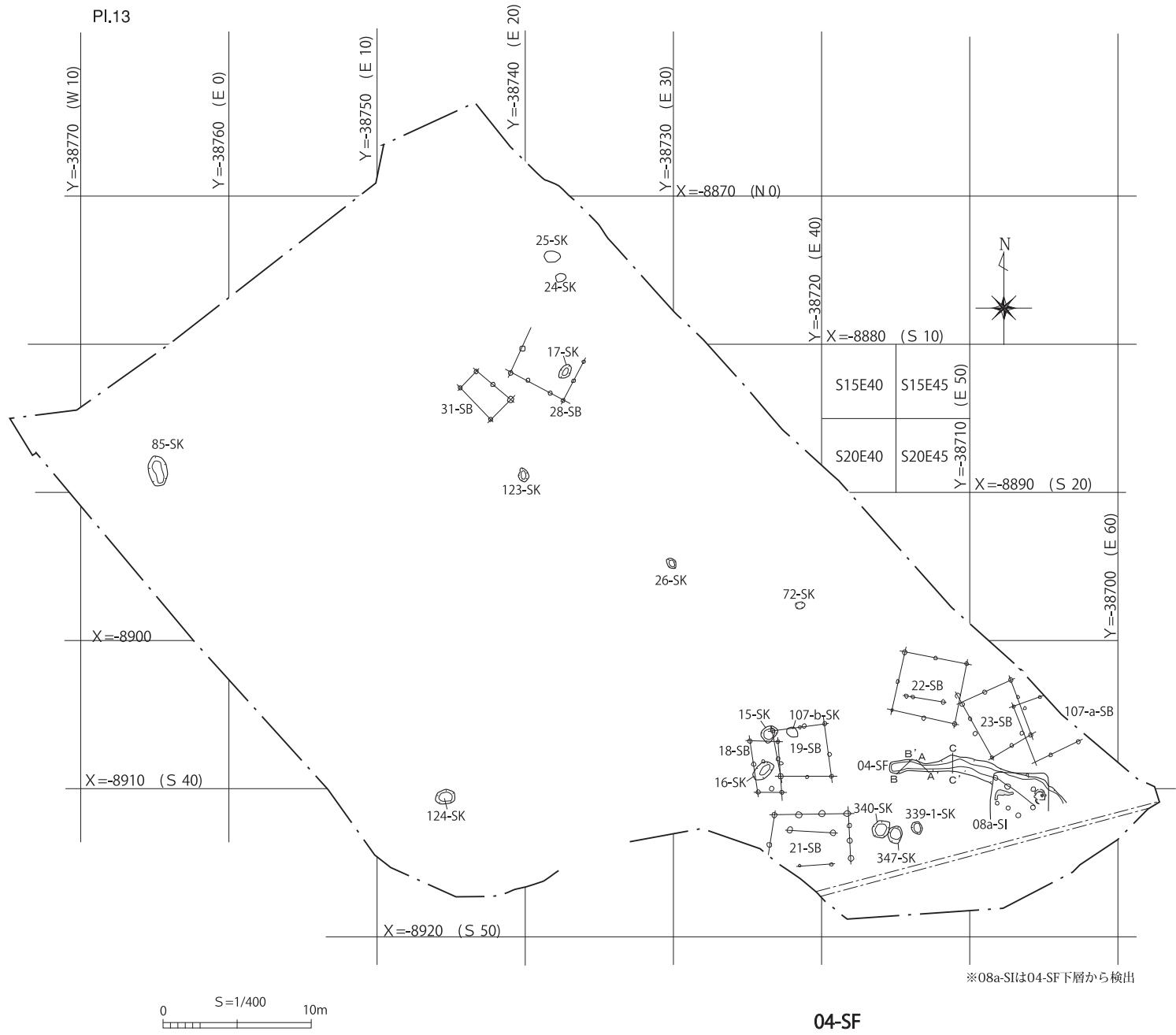
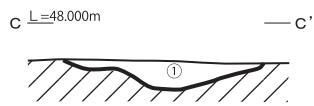
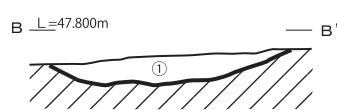
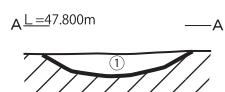


図9 繩文土坑(103・125・133・131・132・121・122・70-SK) 平面・断面図 3(1/40)



04-SF



04-SF

① Hue 7.5 YR 3/4 暗褐色粘質土
しまりはあまりなく、炭化物・ローム粒をわずかに含む。

0 $S = 1/40$ 1m

図 10 古代遺構配置図 (1/400) • 04-SF 断面図 (1/40)

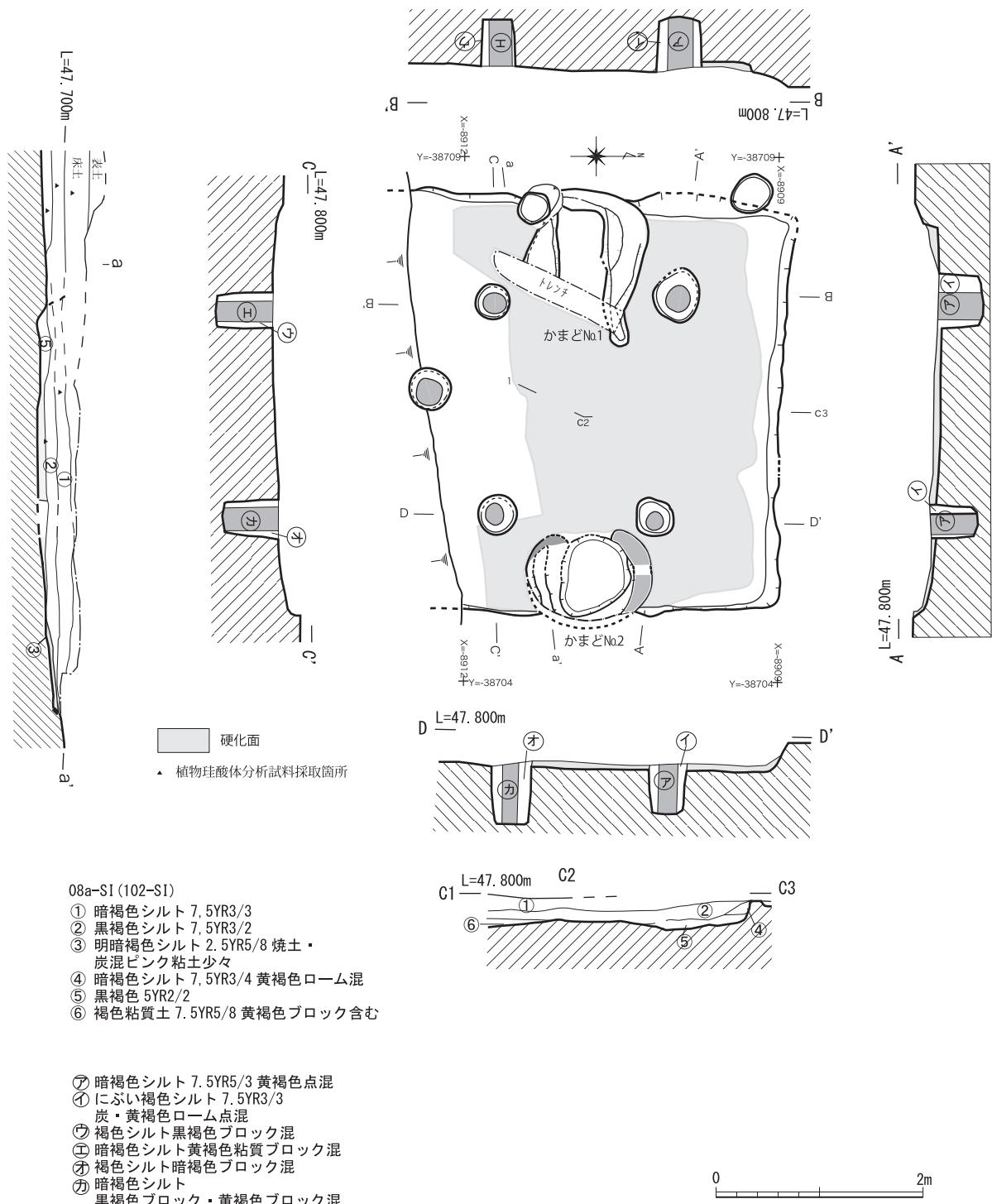
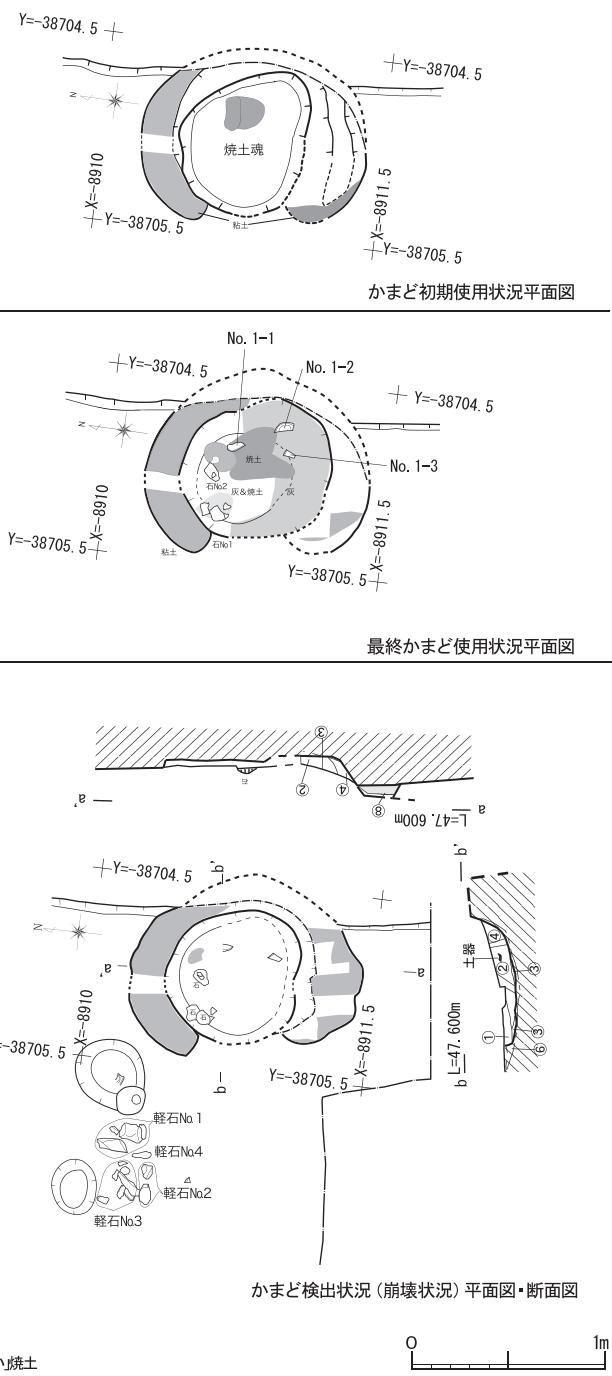
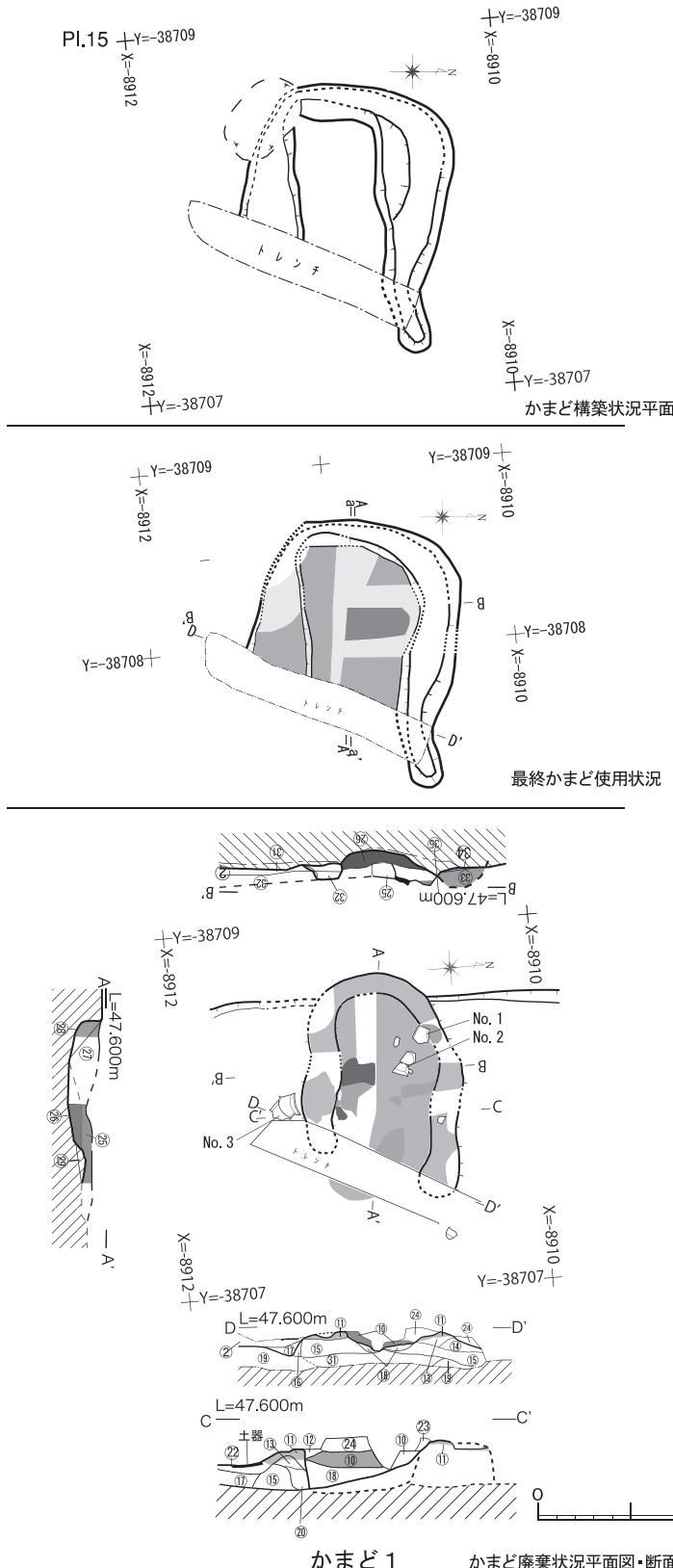


図 11 08a-SI(102-SI) 平面・断面図 (1/60)



- | | | |
|-----------------------------------|--|--|
| 08a-SI(102-SI) かまど1土色 | ㉓ 暗褐色シルト 7.5YR4/1 | 08a-SI(102-SI) かまど2土色 |
| ⑩ 明暗褐色シルト 2.5YR5/8 焼土・炭混ピンク粘土少々 | ㉔ 暗褐色シルト 7.5YR4/4 | ① 暗褐色シルト 7.5YR3/3 |
| ⑪ 淡赤橙色粘土 2.5YR5/8 焼土・粘土ブロック混 | ㉕ 暗褐色シルト 7.5YR4/4 赤色焼土 10YR5/6 ブロック (2~3cm大) 混 | ② 黒褐色シルト 7.5YR3/2 |
| ⑫ 淡赤橙色粘土 2.5YR7/4 ピンク粘土 | ㉖ 赤色シルト 10YR5/6 焼土のみ | ③ 黑褐色シルト 7.5YR2/2 ブロック混 (第1床面もしくは硬化面?) |
| ⑬ 明褐色シルト 7.5YR4/6 きれいな土 | ㉗ 暗褐色シルト 7.5YR4/3 赤色点 (焼土) 混 | ④ 暗褐色粘質土 10YR4/6 (第2次床面?) |
| ⑭ 暗褐色シルト 7.5YR4/3 赤褐色点・粘土粒・焼土塊混 | ㉘ 灰を含む | ⑤ 暗褐色シルト 7.5YR3/4 黄褐色ローム混 |
| ⑮ 暗褐色シルト 7.5YR3/4 やや明るい | ㉙ にぶい褐色粘質土 7.5YR5/4 | ⑥ 橙色粘質土 7.5YR6/8 |
| ⑯ 暗褐色粘質土 10YR4/6 焼土 (5mm大) 含む | ㉚ 暗褐色シルト 7.5YR3/3 赤色点 (焼土) 混 | |
| ⑰ 暗褐色粘質土 7.5YR3/4 | ㉛ 黄褐色ローム層 7.5YR6/8 橙色粘質土 | |
| ⑲ 暗褐色混橙色粘質土 7.5YR6/8 (やや暗い黄褐色粘質土) | ㉜ 暗褐色シルト 7.5YR4/4 | |
| ⑳ 明褐色シルト | ㉝ 黑色粘質土 7.5YR3/2 | |
| ㉑ 明褐色粘質土 7.5YR5/6 | ㉞ 暗褐色シルト 7.5YR3/3 | |

図 12 08a-SI(102-SI) かまど平面・断面図 (1/40)

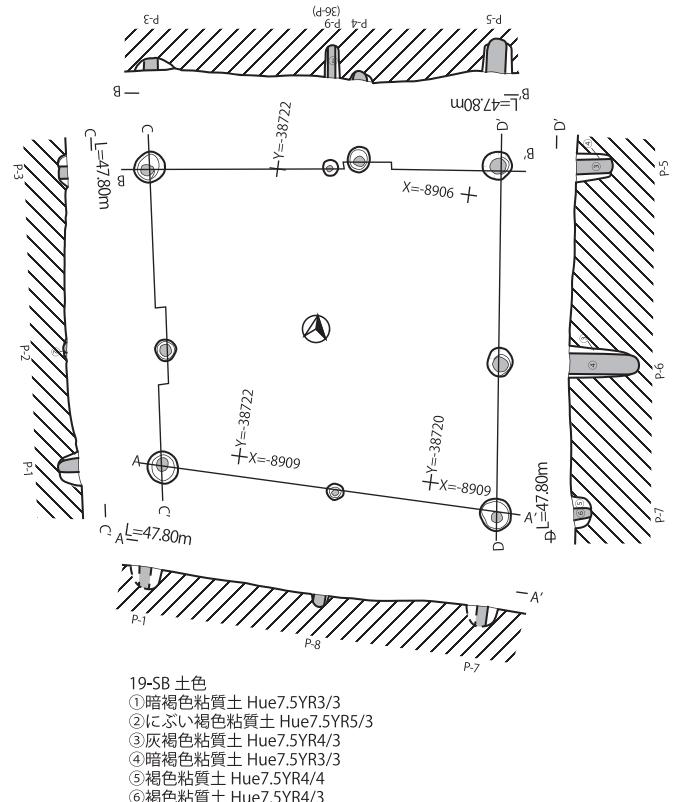
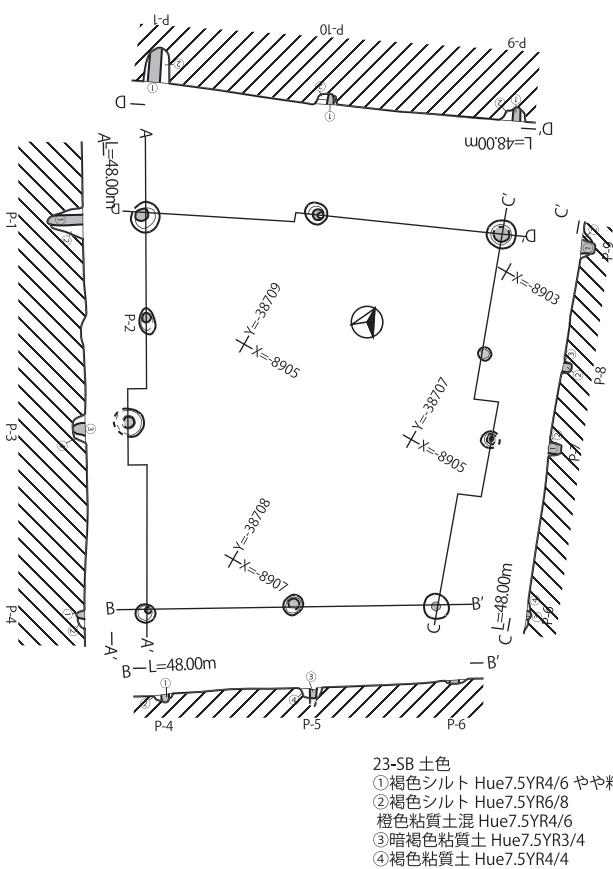
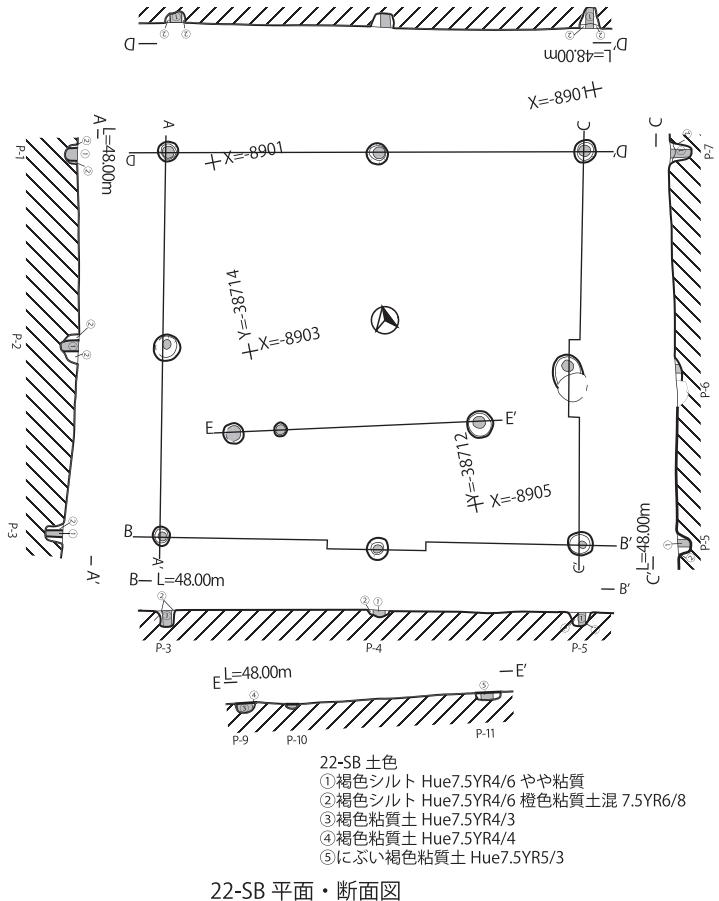
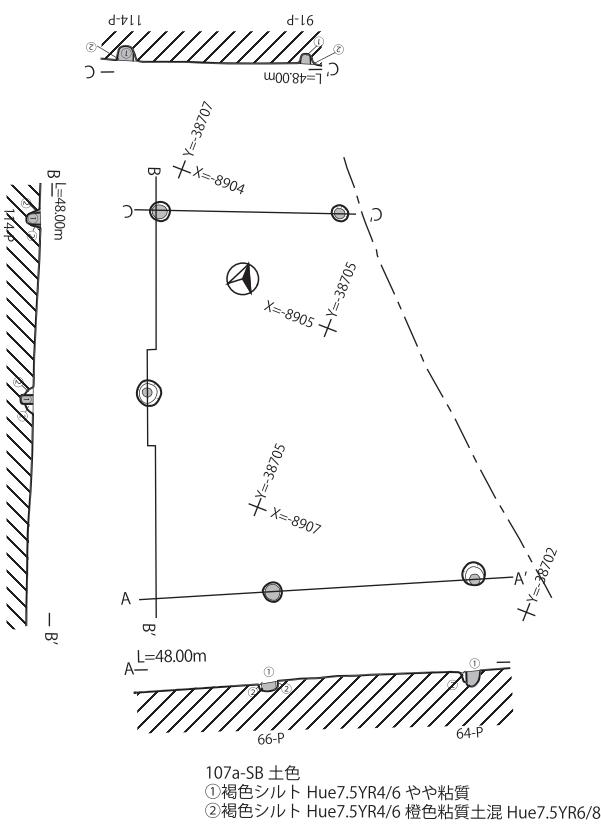
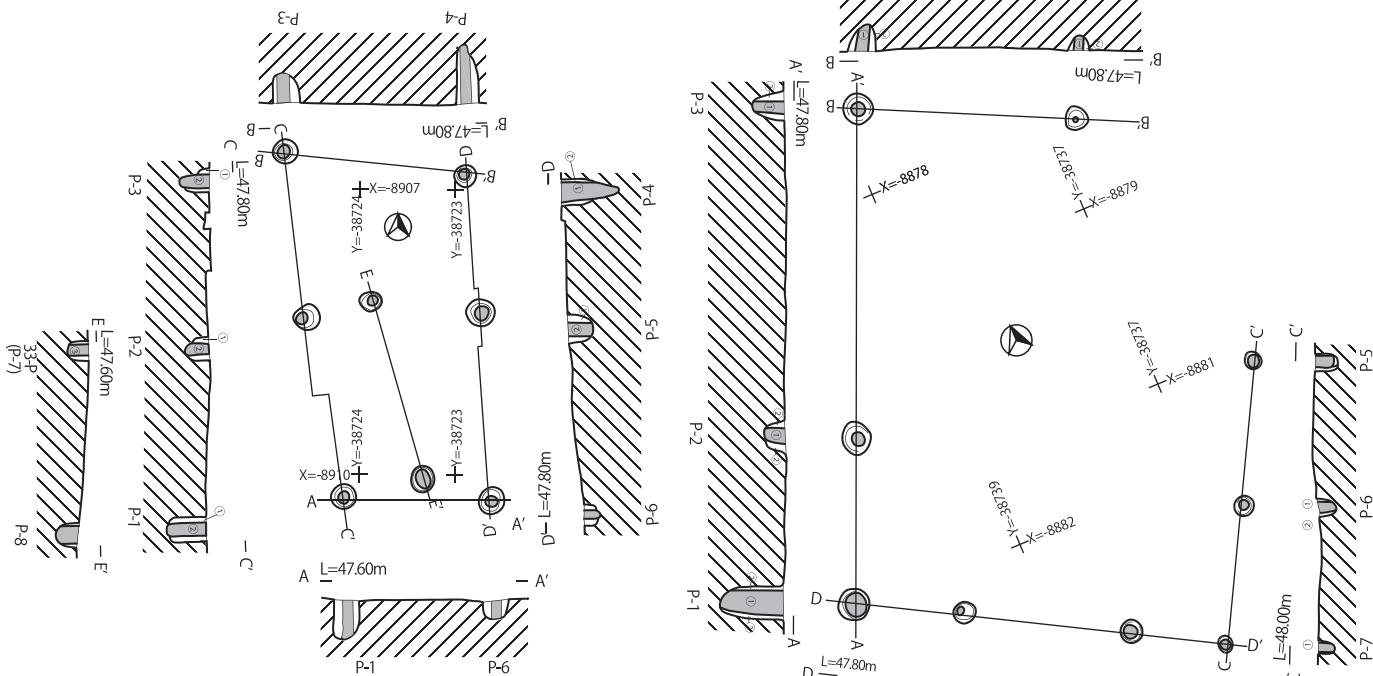


図 13 掘立柱建物 (107a-SB・22-SB・23-SB・19-SB) 平面・断面図 (1/80)

0 2m

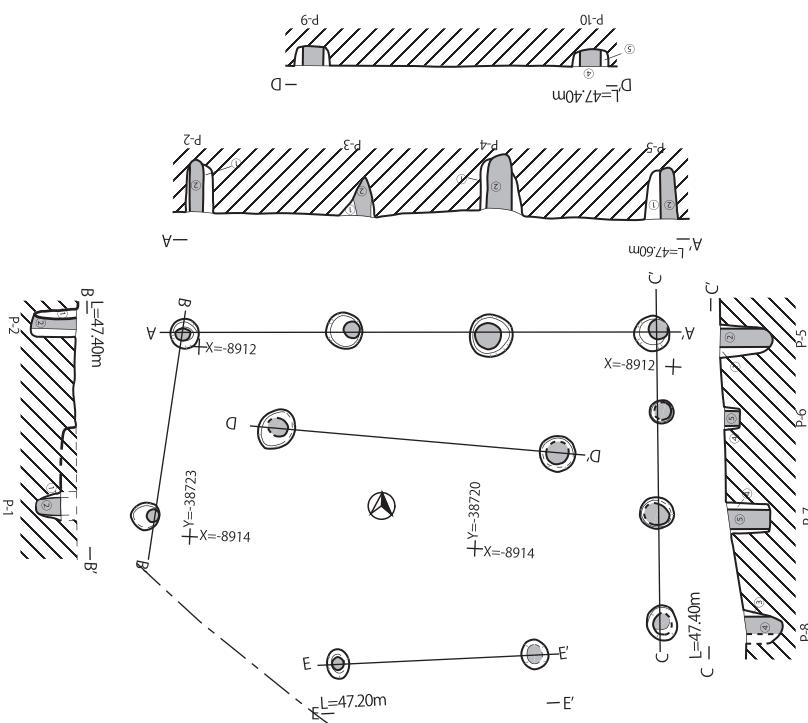


18-SB 土色
 ①暗褐色粘質土 Hue7.5YR3/3 ややしまりあり
 黄色粒をわずかに含む
 ②暗褐色粘質土 Hue7.5YR3/4 ①よりしまりが弱い
 黄色粒をわずかに含む
 ③暗褐色粘質土 Hue7.5YR3/3

18-SB 平面・断面図

28-SB 土色
 ①褐色粘質土 Hue7.5YR4/3 ややしまりあり
 黄色の稜粒をわずかに含む
 ②褐色粘質土 7.5YR4/4 しまりあり
 ローム粒・炭化物含む

28-SB 平面・断面図



21-SB 土色
 ①暗褐色粘質土 Hue7.5YR3/4
 V' 層 (暗褐色粘質土の) ブロック粒を多く含む
 黄色粒をわずかに含む しまりあり
 ②暗褐色粘質土 Hue7.5YR3/3
 V' 層の暗褐色粘質土ブロック粒を多く含む
 炭水化物をわずかに含む
 ①よりしまり少し弱い
 ③暗褐色シルト
 ④暗褐色シルト黄褐色シルト混
 ⑤暗褐色シルト

21-SB 平面・断面図

31-SK 土色
 ①褐色粘質土 Hue7.5YR4/3 ややしまりあり
 炭水化物粒・ローム粒を少し含む。
 ②にぶい褐色粘質土 Hue7.5YR5/3 非常によくしまる
 黄色粒 (ローム) を少し含む。
 ③褐灰色粘質土 Hue7.5YR5/1 ややしまりあり
 ローム粒を含む。
 ④褐灰色粘質土 Hue7.5YR5/1 しまりなし。

31-SB 平面・断面図

図 14 掘立柱建物 (18・28・21・31-SB) 平面・断面図 2 (1/80)

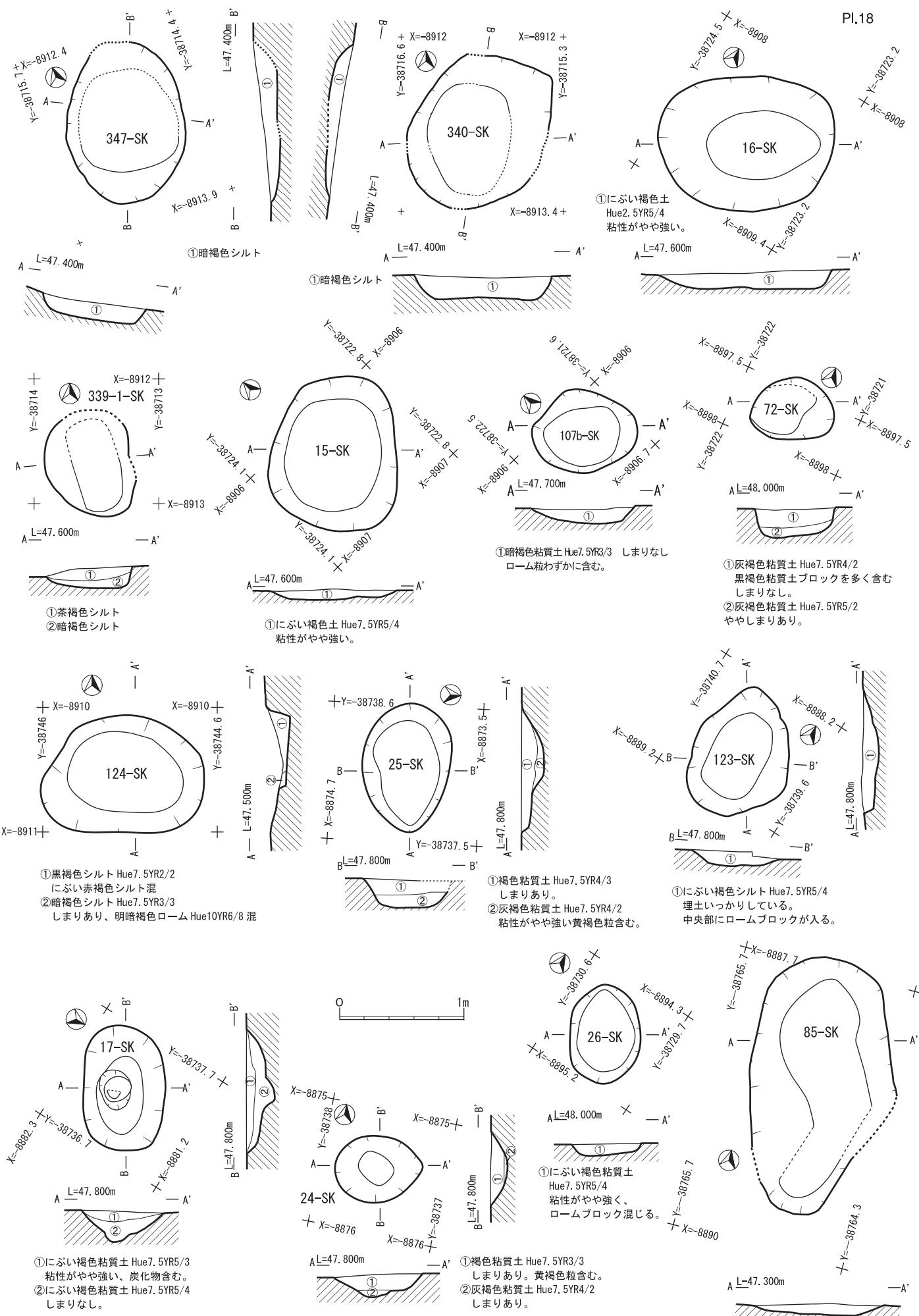


図 15 古代土坑 (347・340・16・339-1・15・107b・72・124・25・123・17・24・26・85-SK) 平面・断面図 (1/40)

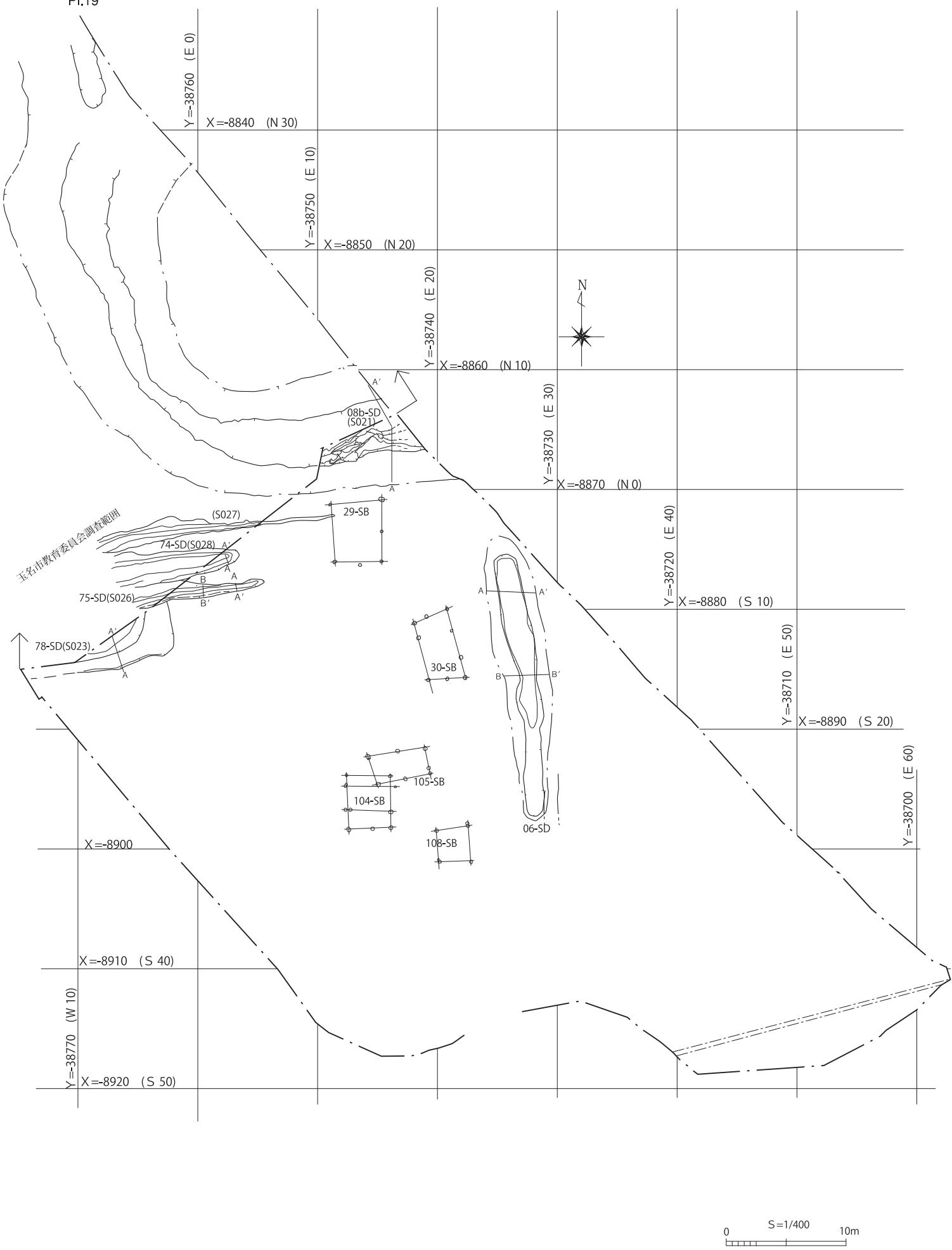


図 16 中世遺構配置図 (1/400)

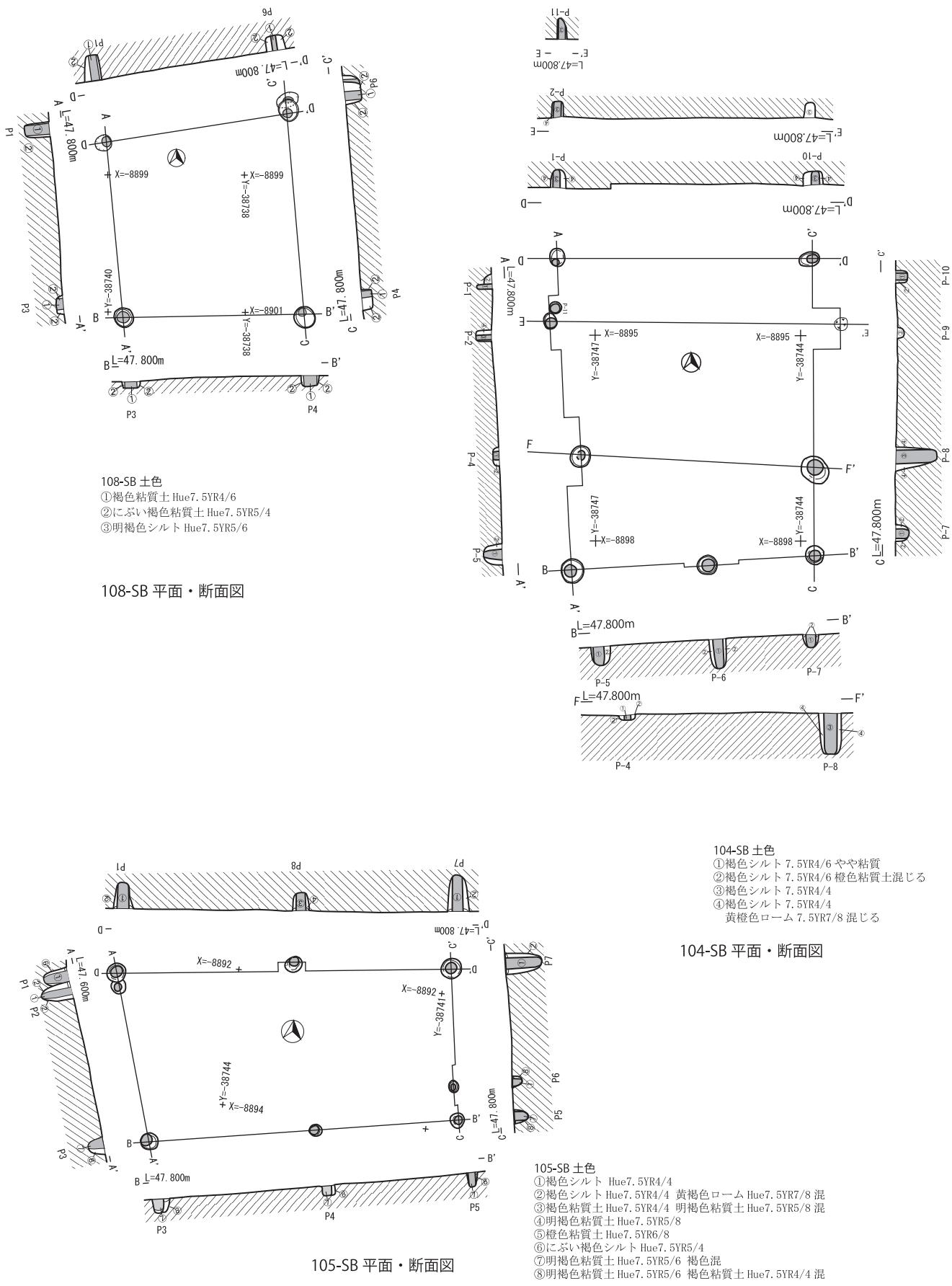
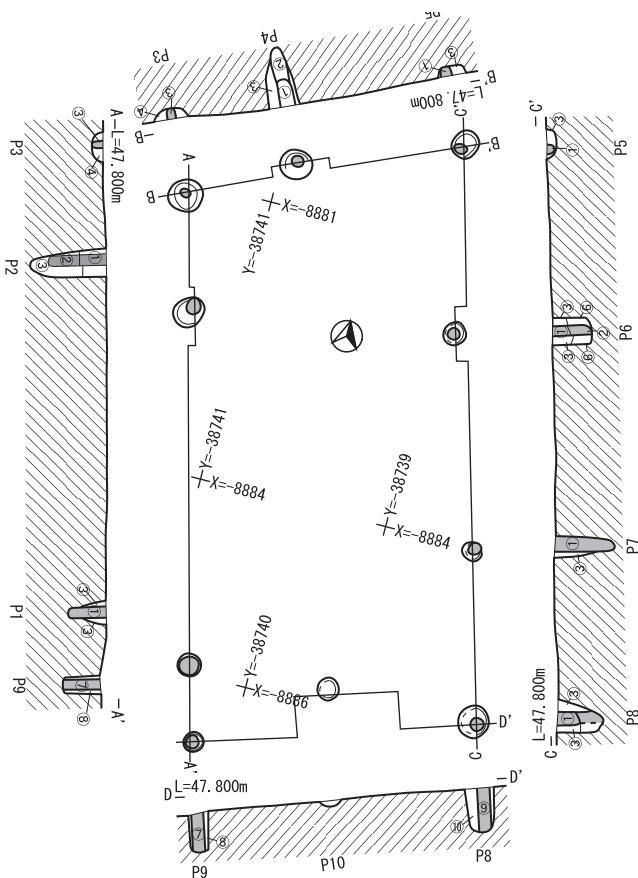


図 17 掘立柱建物(108・104・105-SB)平面・断面図 1 (1/80)



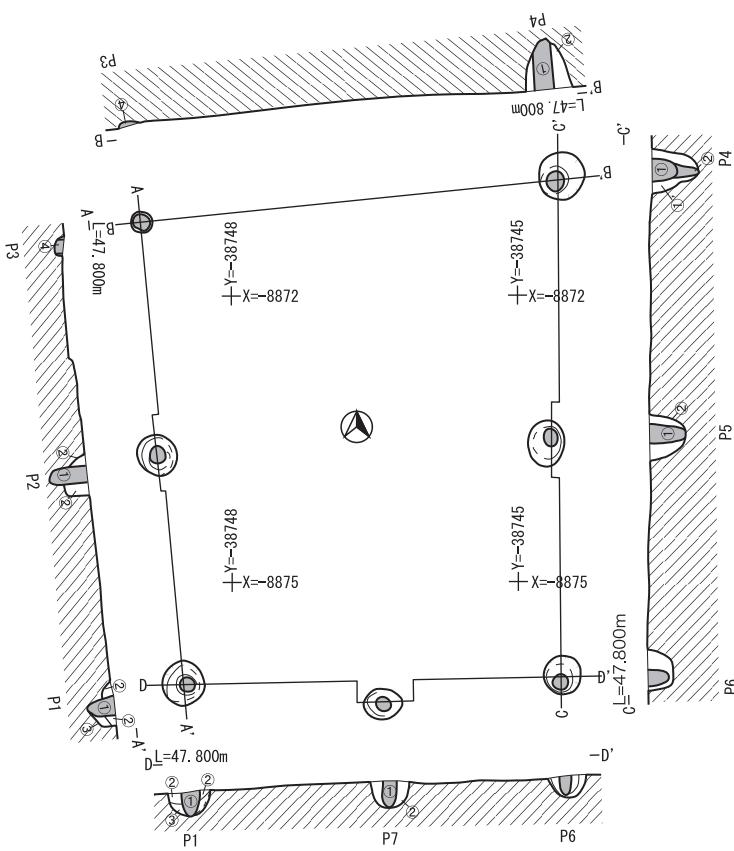
30-SB 平面・断面図

30-SB 土色

- ①褐色粘質土 Hue7.5YR4/3 ややしまりあり。
 - ②灰褐色粘質土 Hue7.5YR4/2 しまりなくサラサラの土。
 - ③灰褐色粘質土 Hue7.5YR4/2 ややしまりあり

ローム粒わずかに含む。

 - ④にぶい褐色粘質土 Hue7.5YR5/3
 - ⑤灰褐色粘質土 Hue7.5YR4/2 ややしまりあり。
 - ⑥灰褐色粘質土 Hue7.5YR4/2 ③に比べ粘性が強い。
 - ⑦褐色シルト Hue7.5YR4/4 黄褐色ローム Hue7.5YR7/8 混
 - ⑧褐色シルト Hue7.5YR4/4
 - ⑨暗褐色シルト
 - ⑩褐色シルト



29-SB 平面・断面図

29-SB 土色

- ①褐色粘質土 Hue7.5YR4/3 ややしまりあり
炭化物粒含む、ローム粒わずかに含む。
 - ②褐色粘質土 Hue7.5Yr4/4 黄褐色粘質土（ローム）粒含む。
 - ③褐色粘質土 Hue7.5YR4/1 ややしまりあり。
 - ④褐色粘質土 Hue7.5YR4/3 しまりあり。



図 18 掘立柱建物(30・29-SB)平面・断面図 2 (1/80)

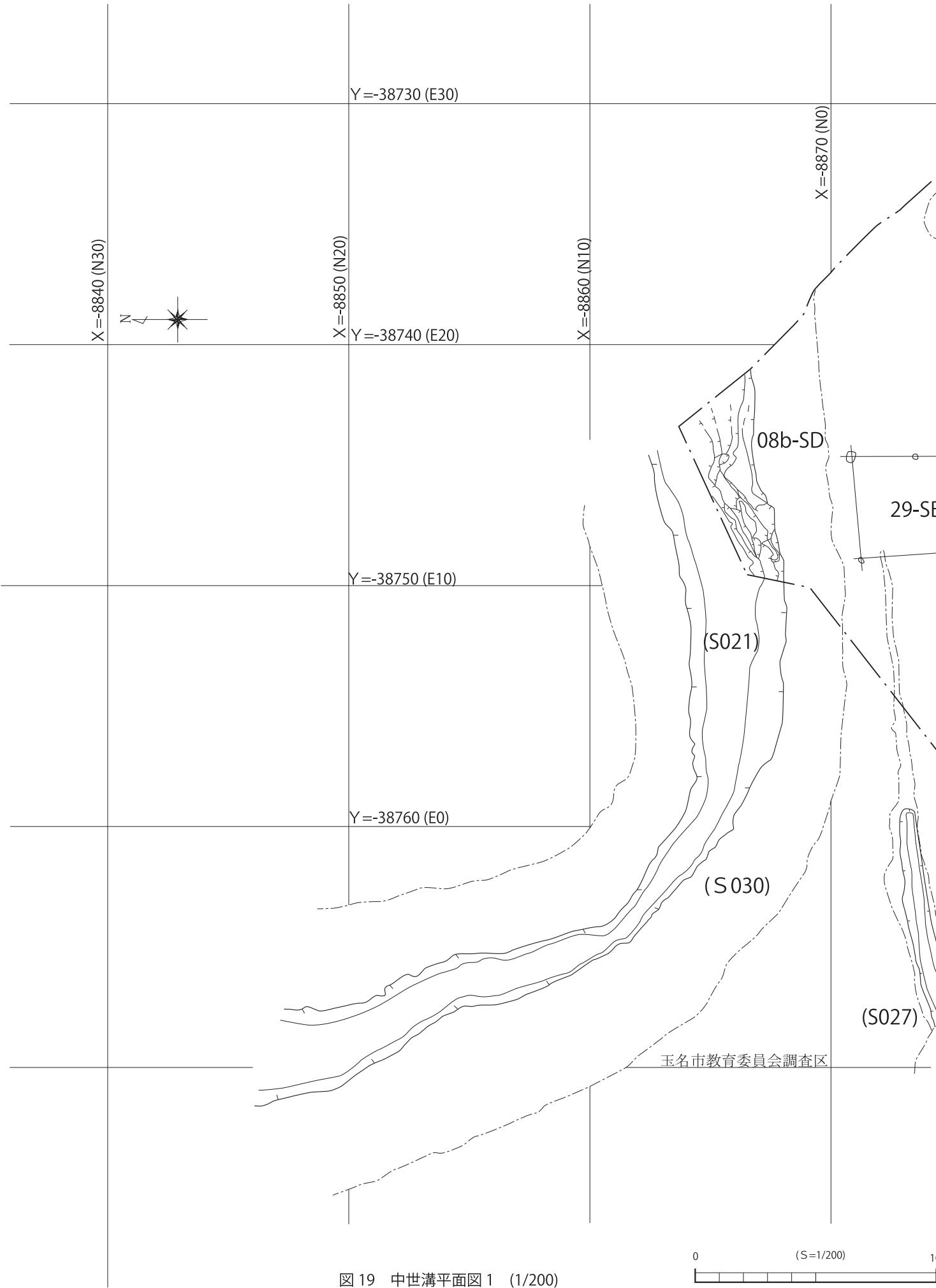


図 19 中世溝平面図 1 (1/200)

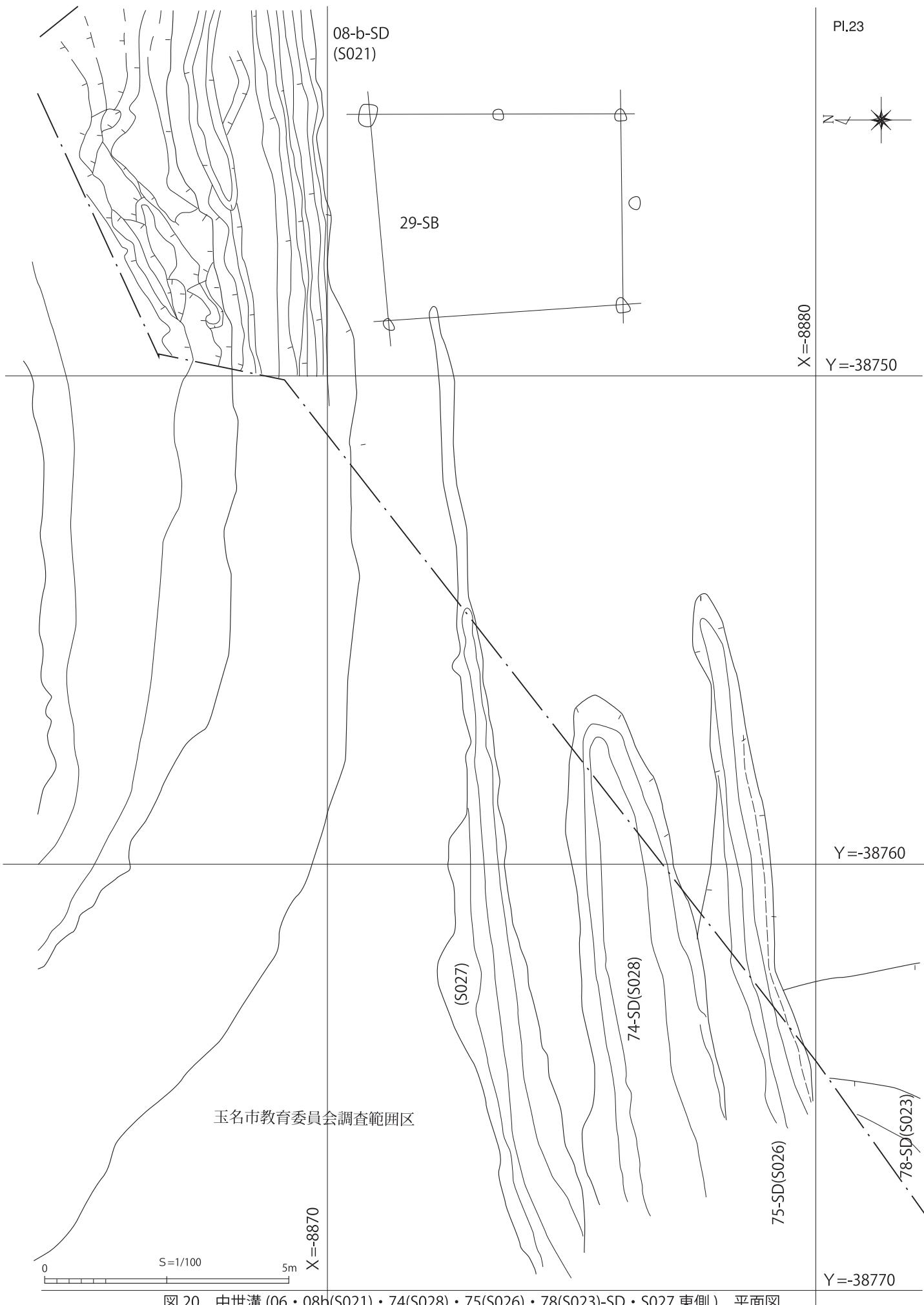
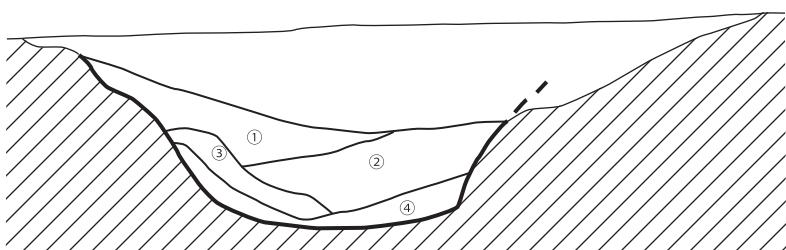
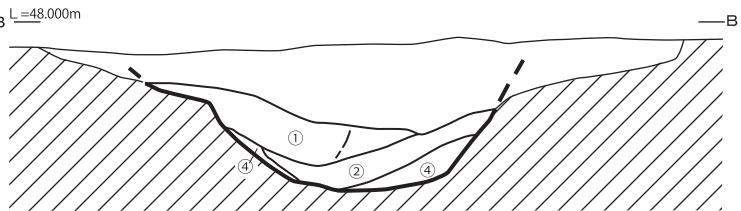


図 20 中世溝(06・08b(S021)・74(S028)・75(S026)・78(S023)-SD・S027 東側) 平面図
(玉名市教育委員会調査 吉丸前遺跡との接合部分)(1/100)

06-SD

A $L=48.000m$ B $L=48.000m$ 

06-SD

- ① にぶい黄褐色土 Hue 10YR 5/3
東側に黒褐色土を含むが同一層。
しまりがなく、黄褐色粒（ローム）
- ② 褐色土 Hue 7.5YR 4/3
しまりがなく、黄色微粒を含む。
- ③ 暗褐色土 Hue 7.5YR 3/3
ややしまり、粘性をもつ
- ④ 黄褐色土 Hue 10YR 5/6
地山ブロックと暗褐色粒が混じる

0 S=1/40 1m

74-SD

A $L=47.500m$ 

74-SD

- ① 褐色土 Hue 7.5YR 5/3
粘質がある。炭粒・土器粒を含む

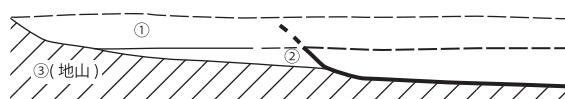
75-SD

A $L=47.500m$ B $L=47.500m$ 

75-SD

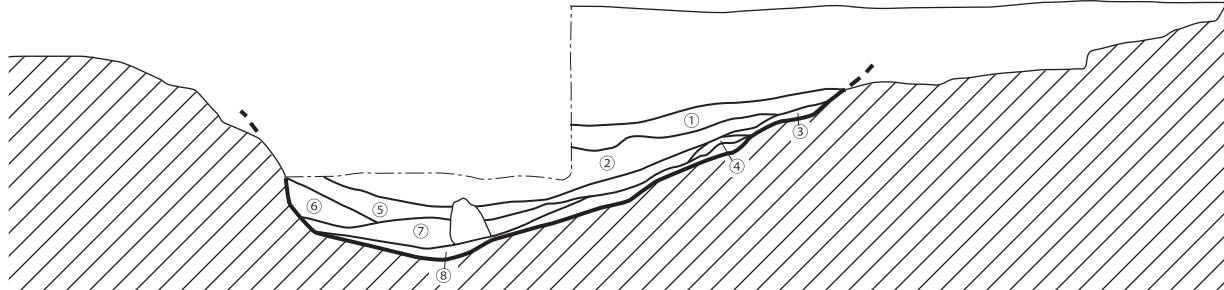
- ① にぶい褐色土 Hue 7.5YR 5/3
炭粒・土器粒をわずかに含む。
ややしまって。

78-SD (S023)

a1 $L=47.500m$ 

- 78-SD (S023)
① 黄褐色シルト 10YR 5/6
やわらかい
② 黄褐色シルト 10YR 5/8

08b-SD (S021)

A2 $L=47.600m$ 

08b-SD (S021)

- ① 黒褐色土 Hue 10YR 3/2
しまりがない
- ② にぶい黄褐色土 Hue 10YR 4/3
下位に黄色微粒・ブロックを多く含む。
- ③ にぶい黄褐色土 Hue 10YR 5/4
しまりがなく、地山（ローム）のブロックを
多く含む
- ④ 灰黄褐色土 Hue 10YR 6/2
しまりがない
- ⑤ にぶい黄褐色土 Hue 10YR 5/4
しまりがなく、砂粒・粘質土が混入する
- ⑥ 黄褐色土 Hue 10YR 5/6
しまらず、さらさらしておもろい。
- ⑦ 浅黄橙色土 Hue 7.5YR 8/4
地山土に類似するが炭化物を含み、
あまりしまらない。
- ⑧ 明黄褐色粘質土 Hue 10YR 6/6
粘性があり、地山土に類似する。

0 S=1/60 1m

図 21 中世遺構 (74-SD・75-SD・78-SD・06-SD・08b-SD) 断面図 (1/40) (1/60)

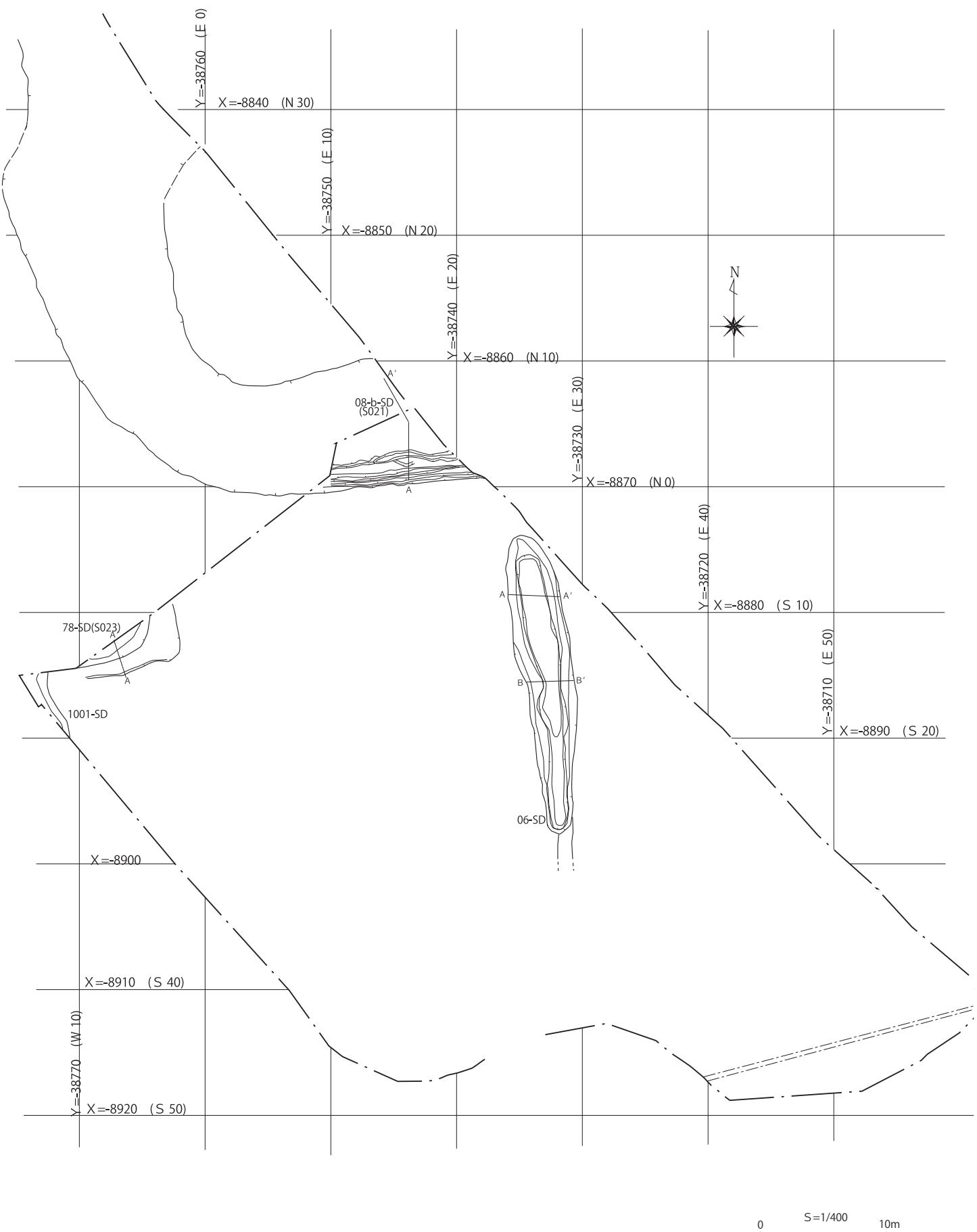
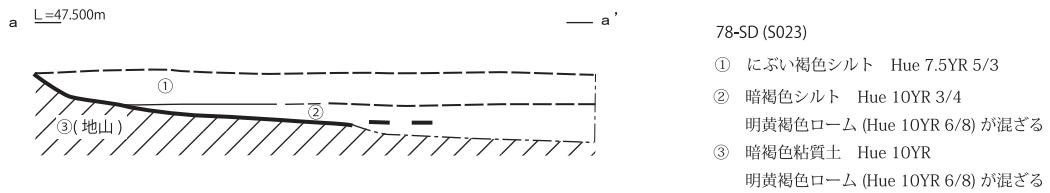
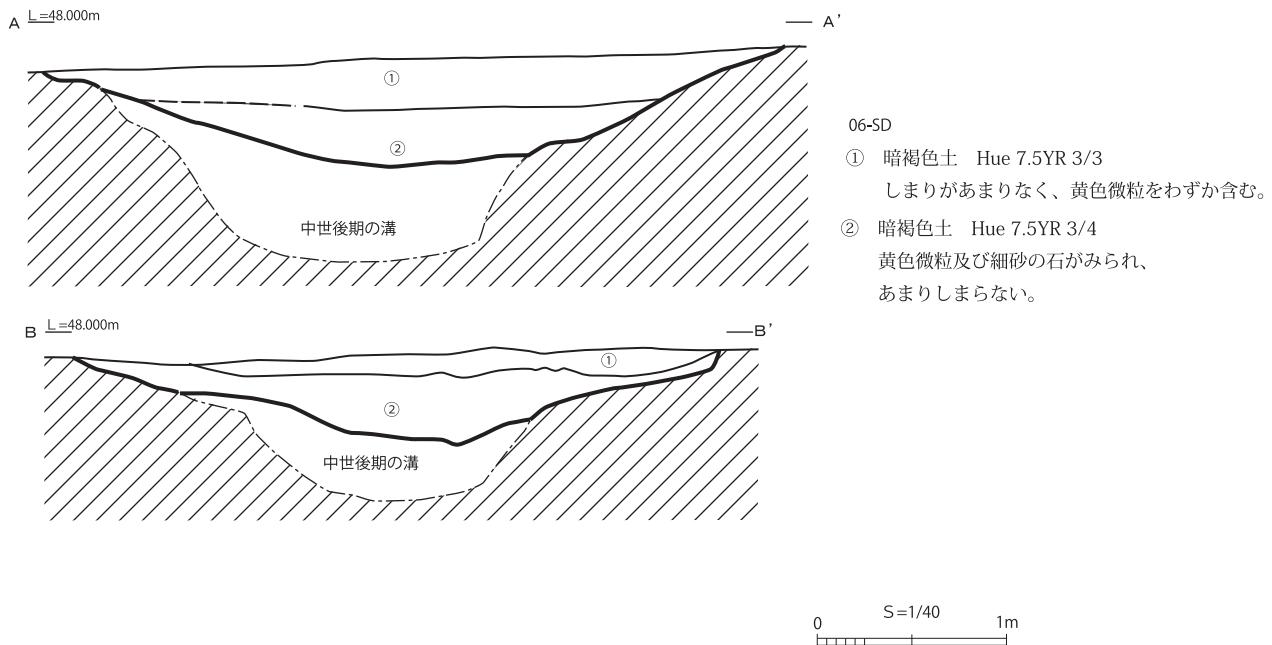


図 22 近世(Ⅰ期) 主要溝配置図 (1/400)

78-SD (S023)



06-SD



08b-SD (S021)

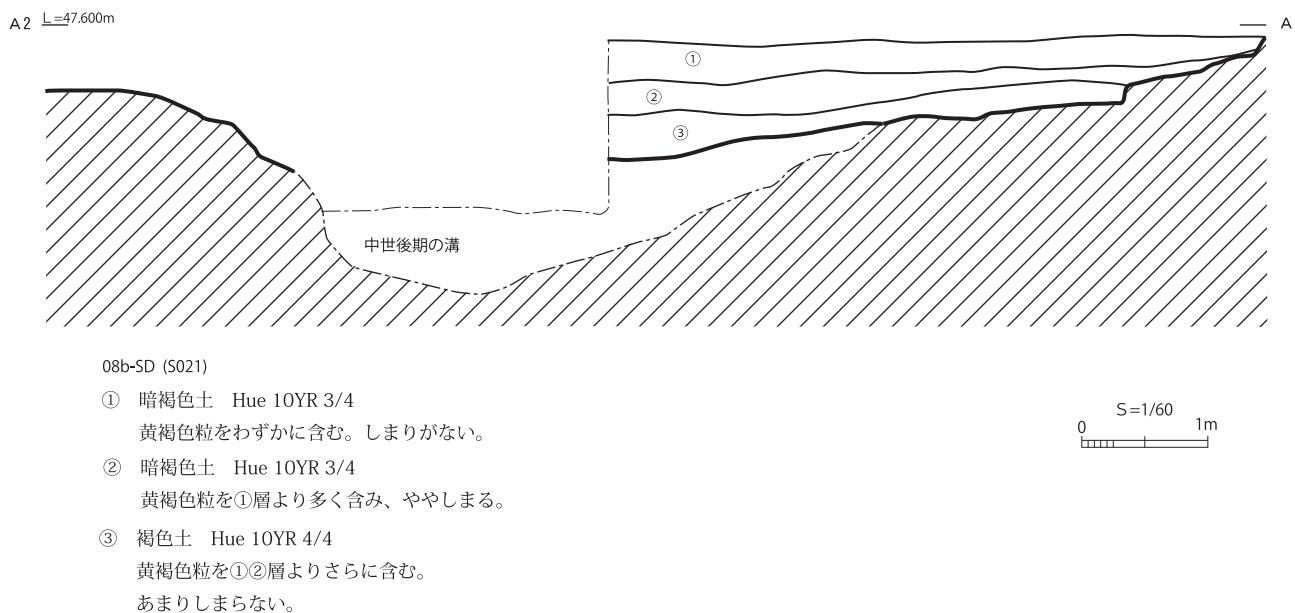


図 23 近世(Ⅰ期) 遺構断面図 (78-SD・06-SD・08b-SD) (1/40) (1/60)

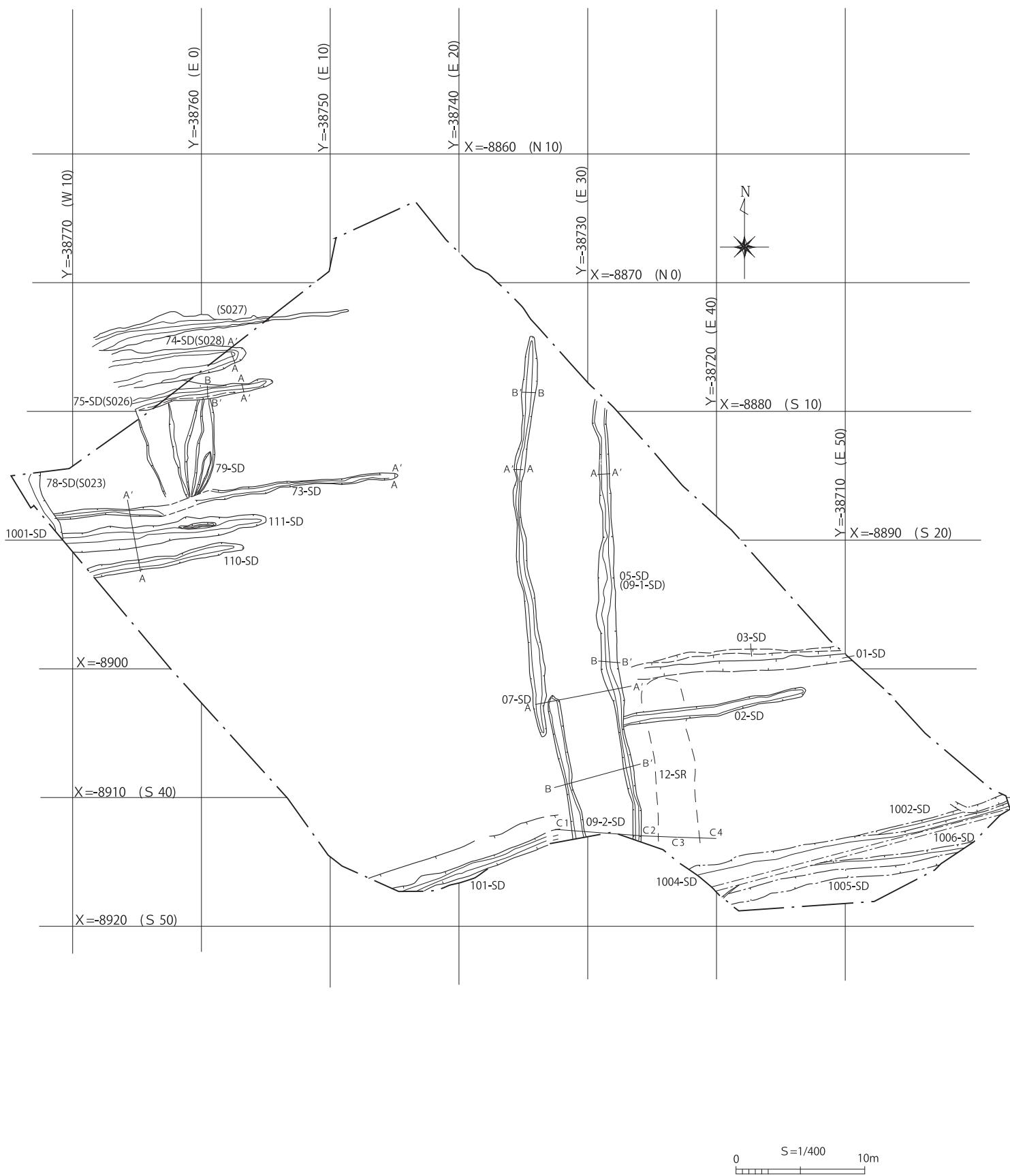


図24 (Ⅱ期) 近世～近代溝 配置図 (1/400)

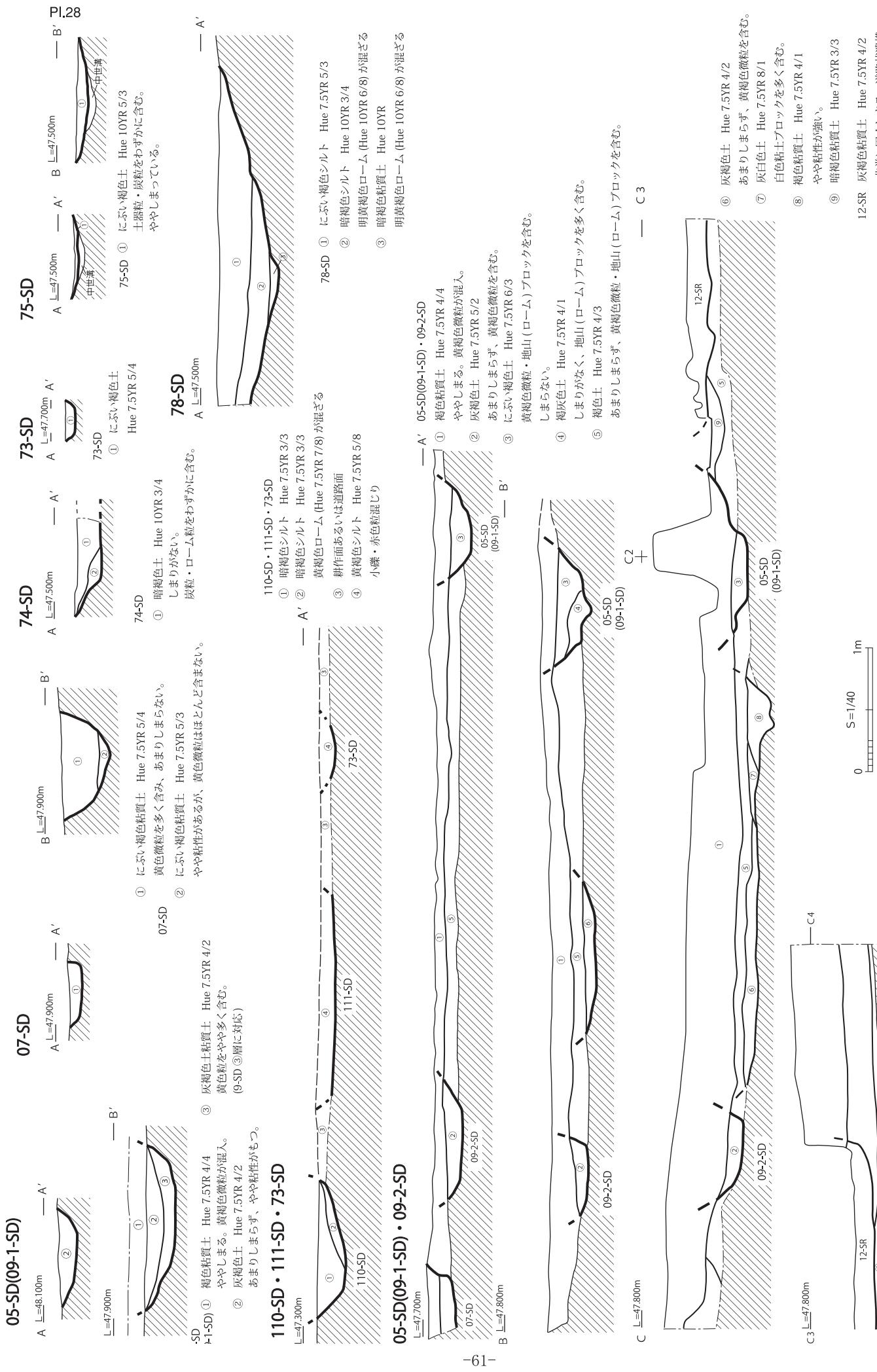


図 25 近世(Ⅲ期)～近代溝(05-SD(09-1-SD)・09-2-SD・07-SD・07-SD・09-1-SD)・09-2-SD・07-SD・74-SD・75-SD・111-SD・12-SR断面図 (1/40)

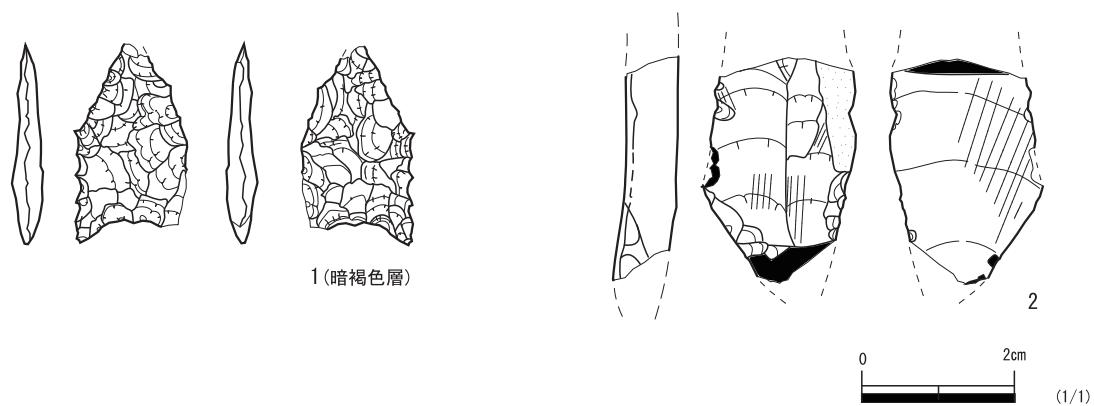


図26 石鏃・スクレイパー 実測図(1/1)

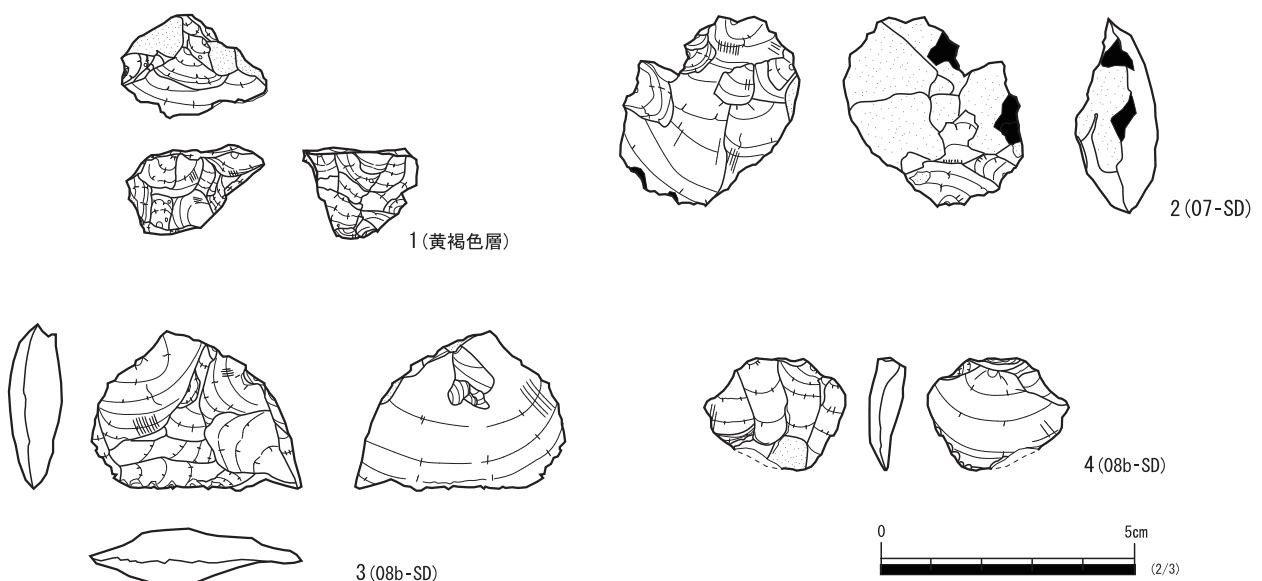


図27 使用痕剥片・石核 実測図(2/3)

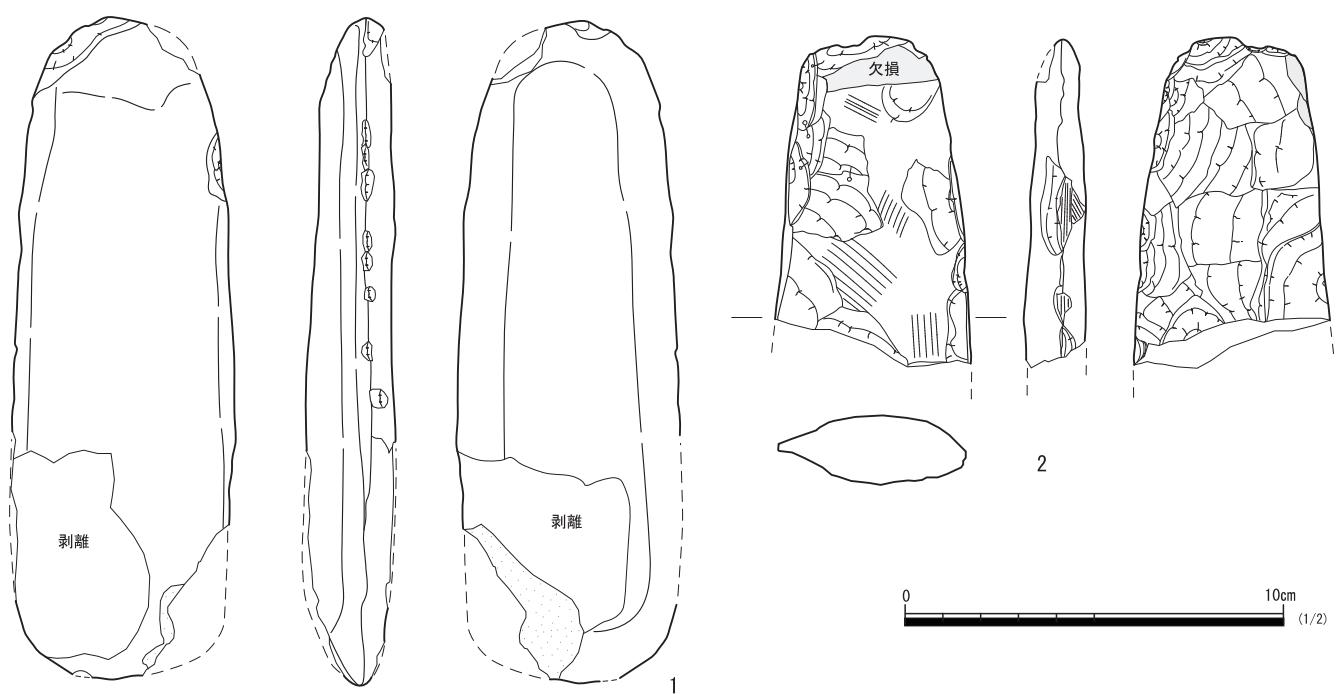


図28 石斧 実測図(1/2)

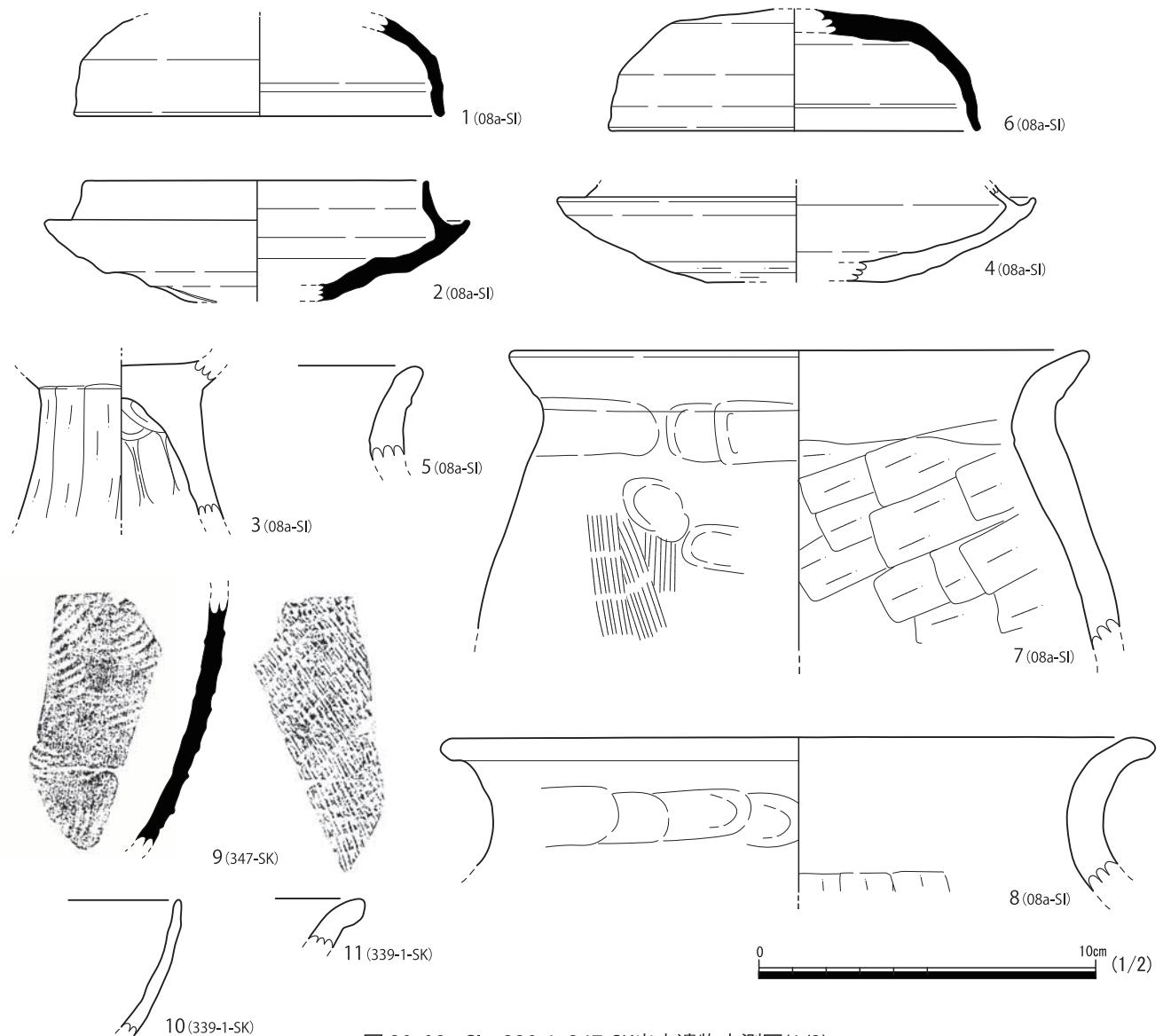


図29 08a-SI 339-1・347-SK出土遺物実測図(1/2)

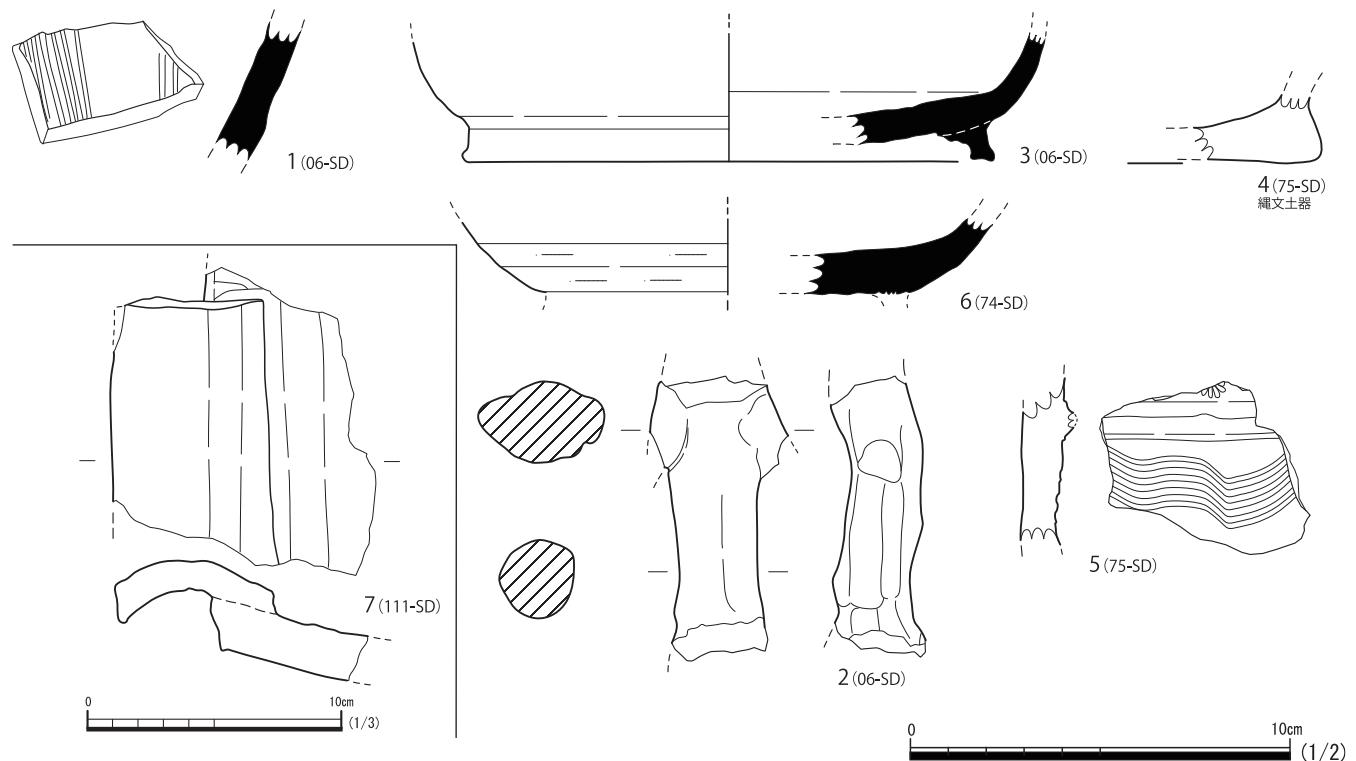


図30 06・111・74・75-SD 出土遺物実測図(1/2) (1/3)

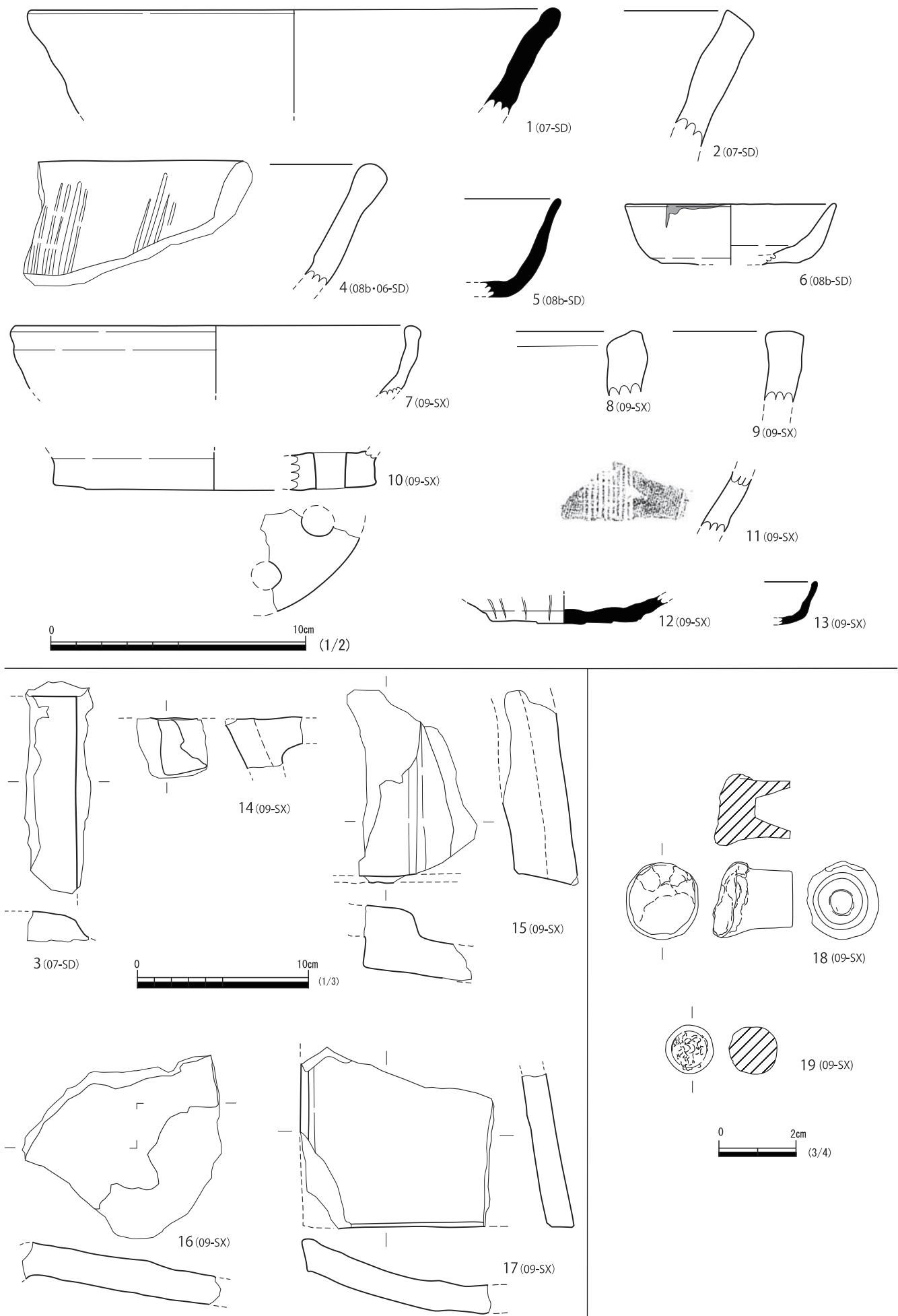


図31 07・08b-SD 09-SX出土遺物実測図(2/3)(1/3)(3/4)

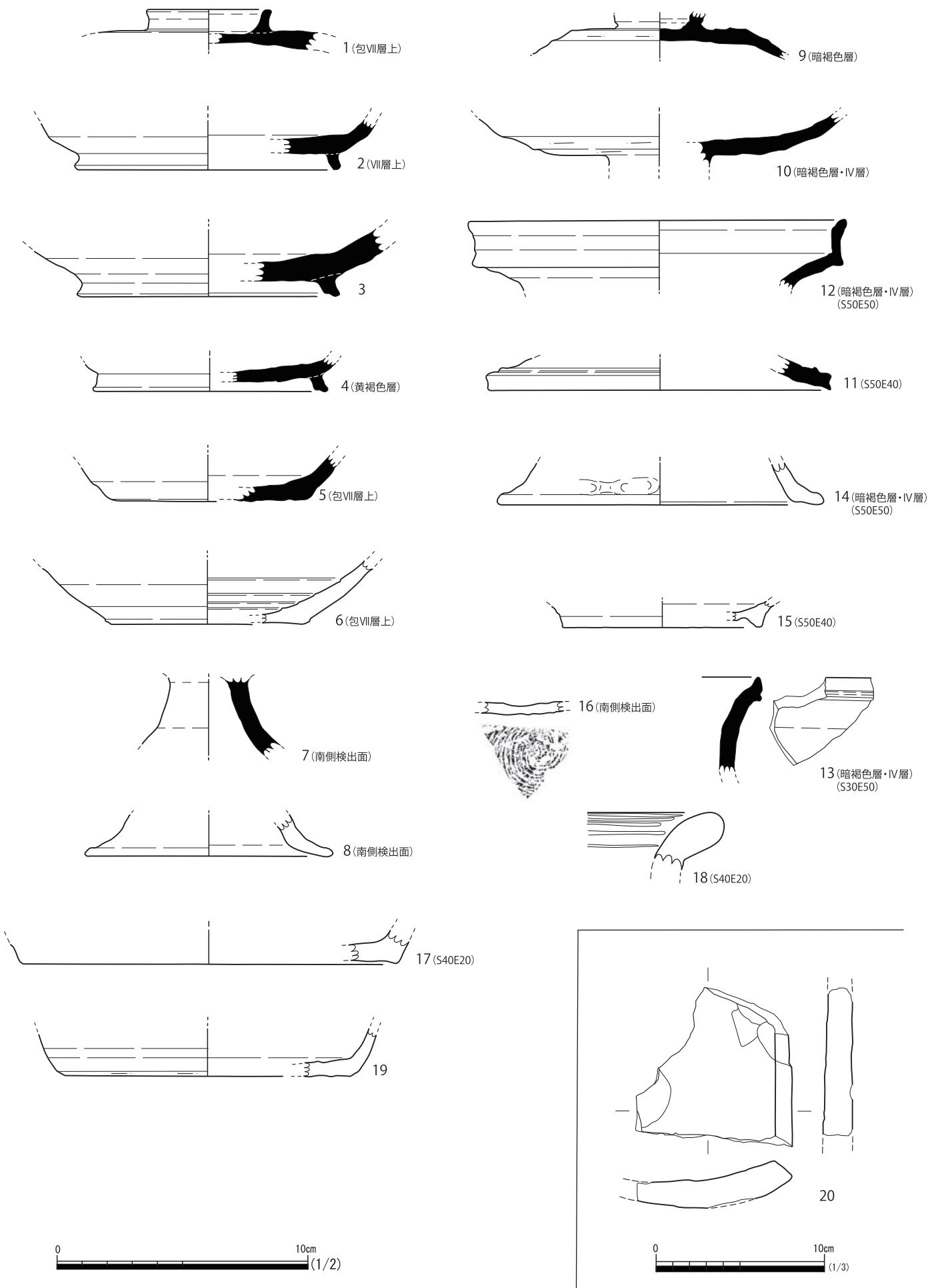


図 32 遺物包含層出土遺物実測図 (1/2) (1/3)

写真図版



調査区遠景俯瞰航空写真(上が東南東)



調査区全景（南から）



調査区遠景航空写真



1 調査区全景(南から)



2 調査区全景(北から)



3 調査区南(北東から)



4 調査区北(08b-SD・29-SBほか)(北から)



5 23・107-SB 04-SF検出状況(北から)



6 18・19-SB・土坑(13・15・16-SKほか)検出状況



1 調査区全景(北東から)



2 18-19-SB 完掘状況(北から)



3 完掘状況(南西から)



4 S20_E30 V層 検出状況



5 08a-SI(102-SI)調査区南側断面(北から)



6 08a-SI(102-SI)調査区南側断面(北から)



7 13-SK 2次焼成面(西から)



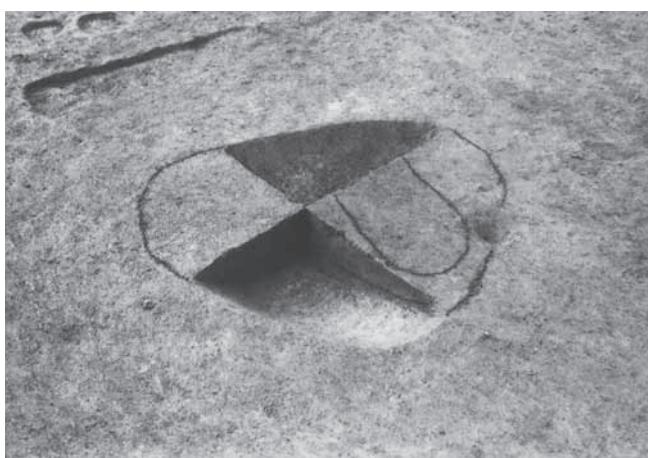
8 14-SK 完掘状況(西から)



1 82-SK検出状況(北東から)



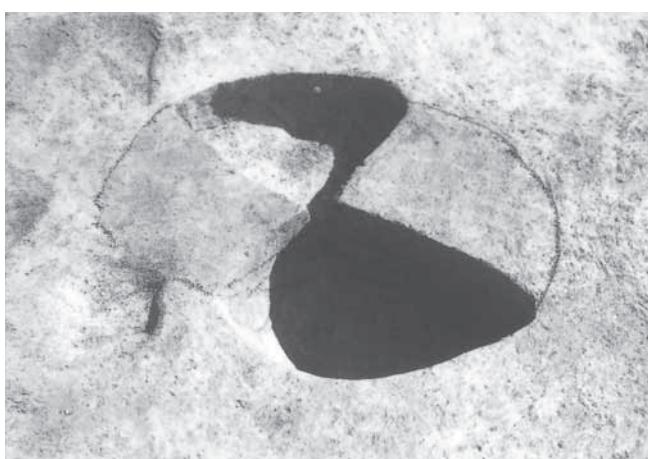
2 72-SK検出状況(南東から)



3 71-SK検出状況(南から)



4 76-SK検出状況(北西から)



5 70-SK検出状況(西から)



6 103-SK検出状況(南から)



7 77-SK・04-SF検出状況(南から)



8 14-SK検出状況(北西から)

土坑
(縄文晩期)
検出状況
3



1 121・122-SK検出状況(東から)



2 121・122-SK検出状況(南西から)



3 121・122-SK検出状況(西から)



4 121・122-SK検出状況(北から)



5 83・84(141)-SKほか検出状況(西から)



6 83・84(141)-SK検出状況(西から)



7 133-SK検出状況(西から)



8 132・133-SK検出状況(南東から)

土坑
(縄文晩期)
(古代)
検出状況



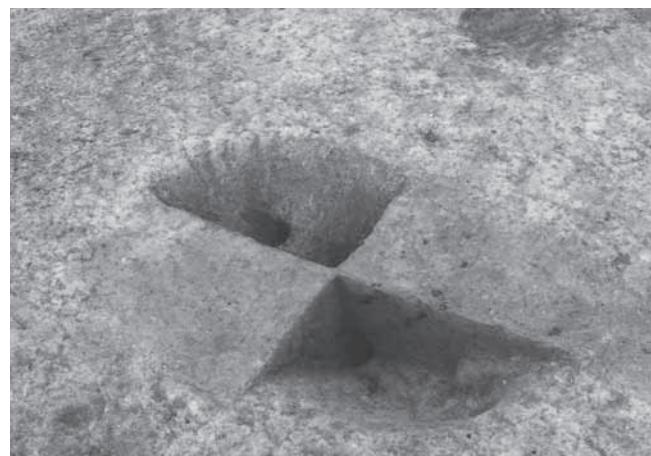
1 14-SK検出状況(北西から)



2 339-2SK(北東から)



3 107-SK検出状況(南から)



4 17-SK検出状況(東から)



5 24-SK検出状況(北西から)



6 25-SK検出状況(北から)



7 26-SK検出状況(北から)



8 72-SK検出状況(南東から)

V
区
08a
SI
(
102
SI)
検出状況



1 08a-SI(102-SI) 遺物出土状況(北西から)



2 08a-SI(102-SI) 遺物出土状況(北西から)



3 08a-SI(102-SI) 遺物出土状況(南から)



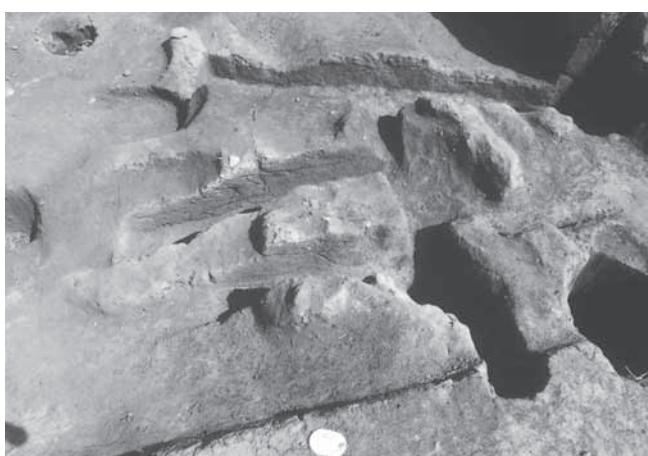
4 08a-SI(102-SI) 遺物出土状況(北から)



5 08a-SI(102-SI) かまど 1 廃棄状況(東から)



6 08a-SI(102-SI) かまど 1 (西から)



7 08a-SI(102-SI) かまど 1 廃棄状況(西から)



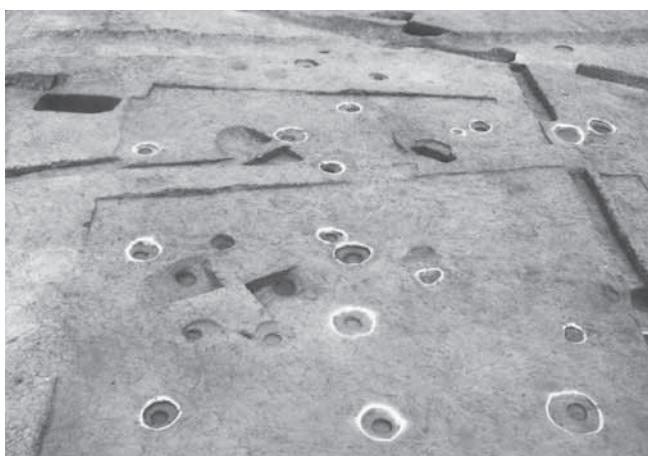
8 08a-SI(102-SI) かまど 2 使用状況(南から)



1 18・19-SB完掘状況(北から)



2 22・23・107-SB検出状況(西から)



3 18-SB検出状況(南から)



4 18・19-SB完掘状況(北から)



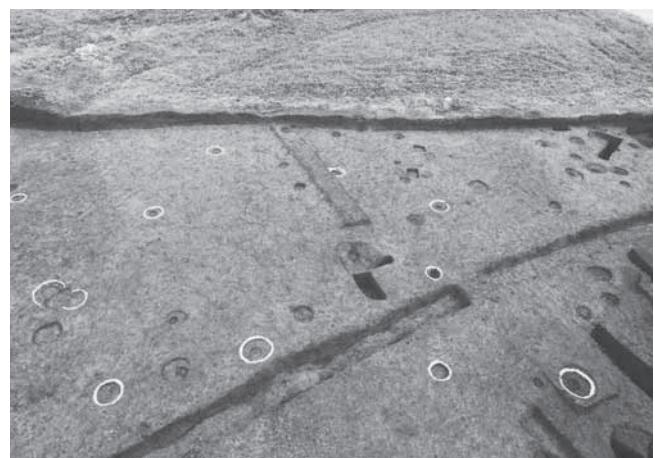
5 19-SB検出状況(南から)



6 21-SB検出状況(西から)



7 21-SB検出状況(南から)



8 23-SB検出状況(西から)

掘立柱建物(古代・中世)
溝(中世・近世)
検出状況



1 22-SB完掘状況(北西から)



2 04-SF検出状況(北西から)



3 30-SB検出状況(西から)



4 28-SB検出状況(南東から)



5 08-SD検出状況(東から)



6 06-SD検出状況(北から)



7 06-SD検出状況(南西から)



8 09-SX完掘状況(北から)



暗褐色層(IV層)
26-1



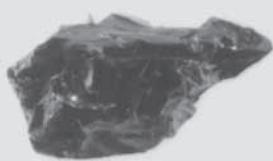
26-2



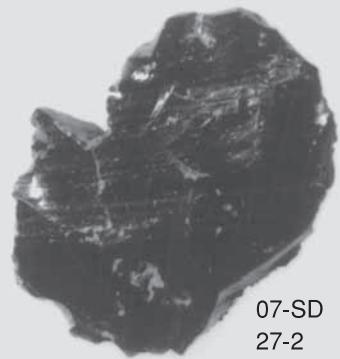
08-SD
27-3



08b-SD
27-4



黃褐色層(V層)
27-1



07-SD
27-2



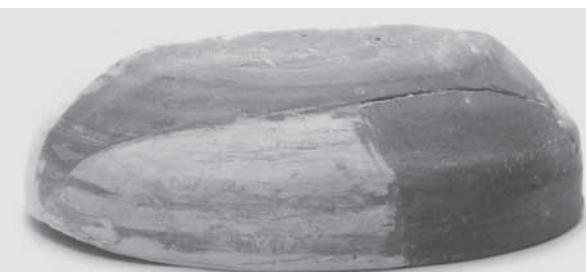
28-2



28-1

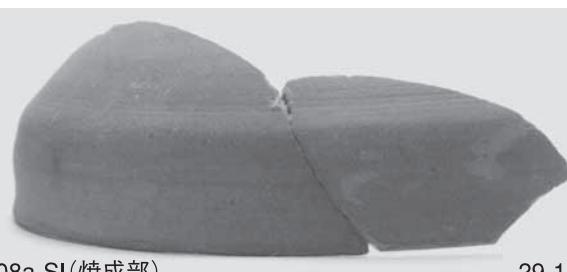
08a
|
SI
339
|
SK
ほか

出土土師器・須恵器



08a-SI(埋1層)

29-6



08a-SI(焼成部)

29-1



08a-SI(かまど焼成部)

29-2



75-SD(焼成部)

30-4



08a-SI(P-1)

29-3



08a-SI(埋2層)

29-4



06-SD(埋1層)

30-3



08-SI(埋1層)

29-7

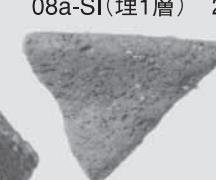


08a-SI(埋1層) 29-8

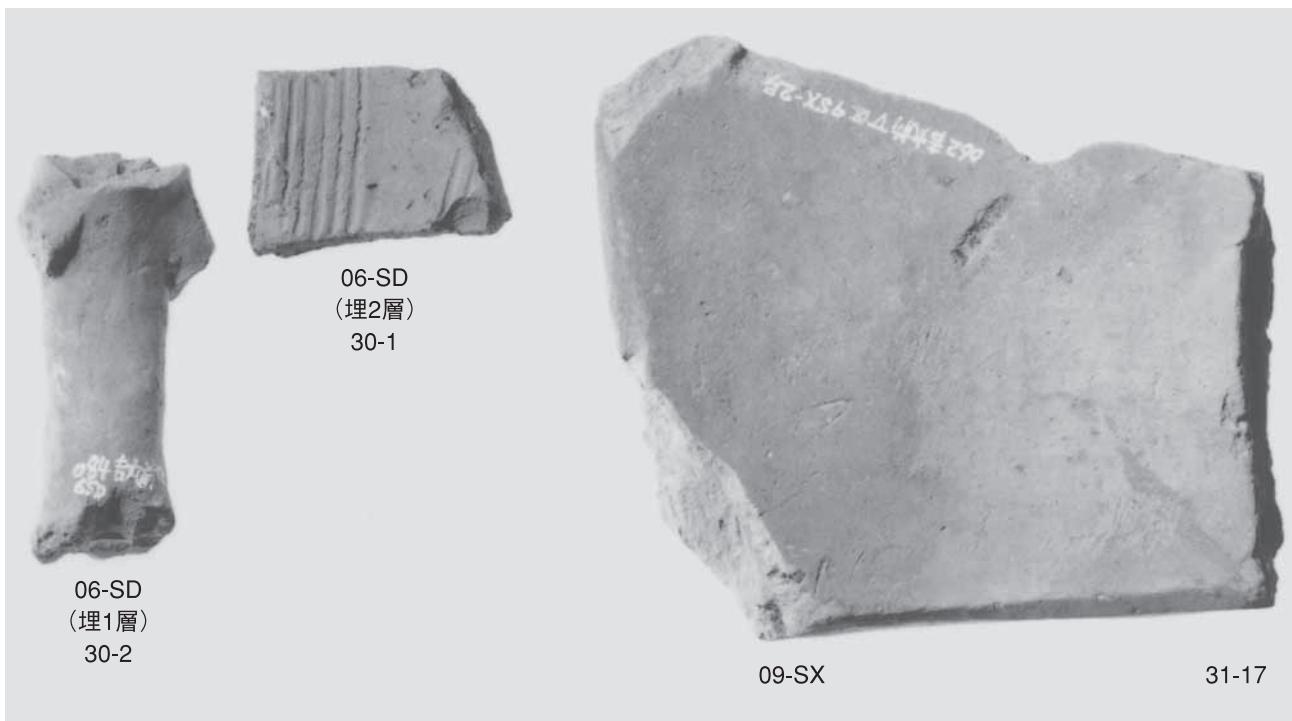


339-SK(埋1層)

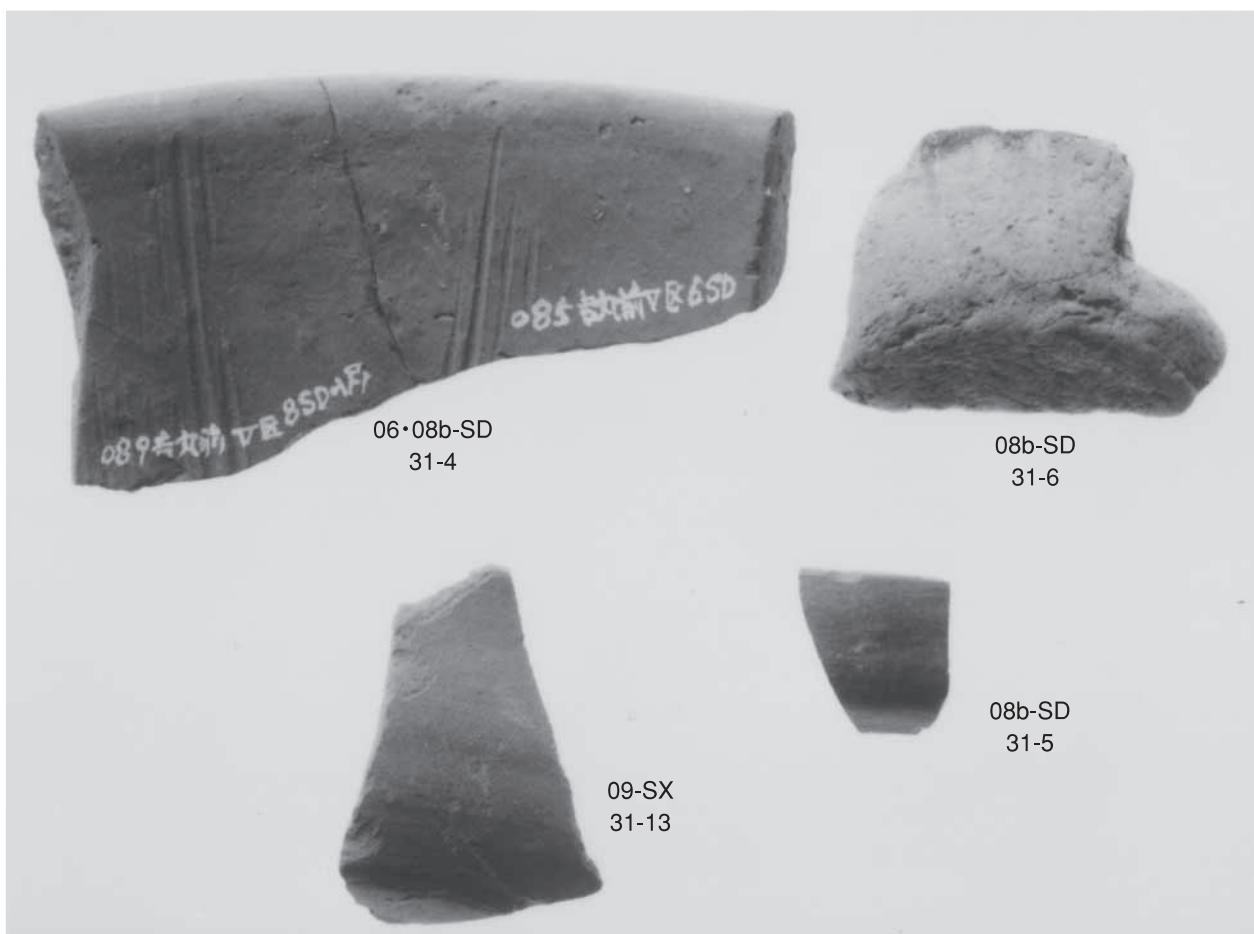
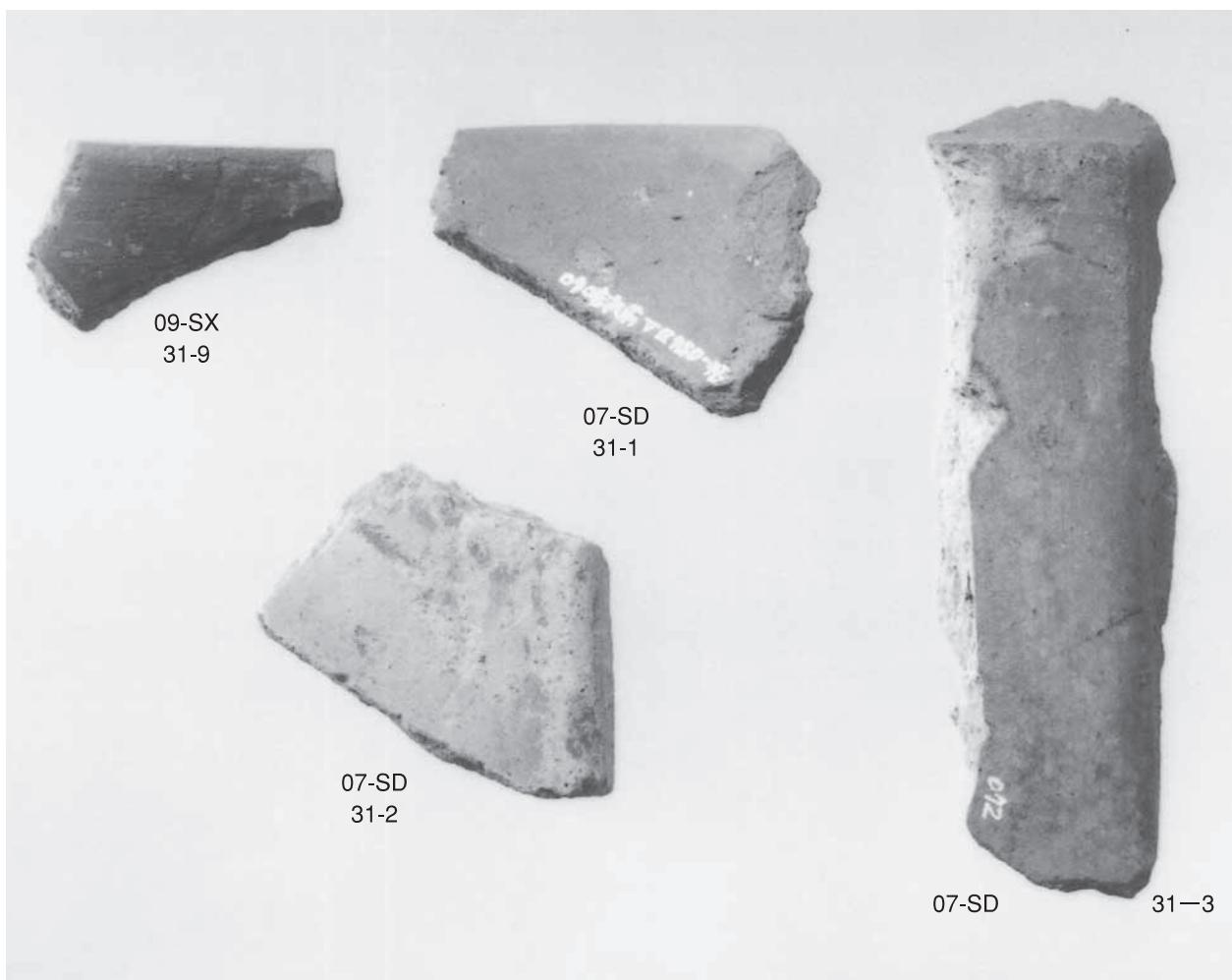
29-10

08a-SI
(埋2層)
29-5339-1-SK
(埋2層)
29-11

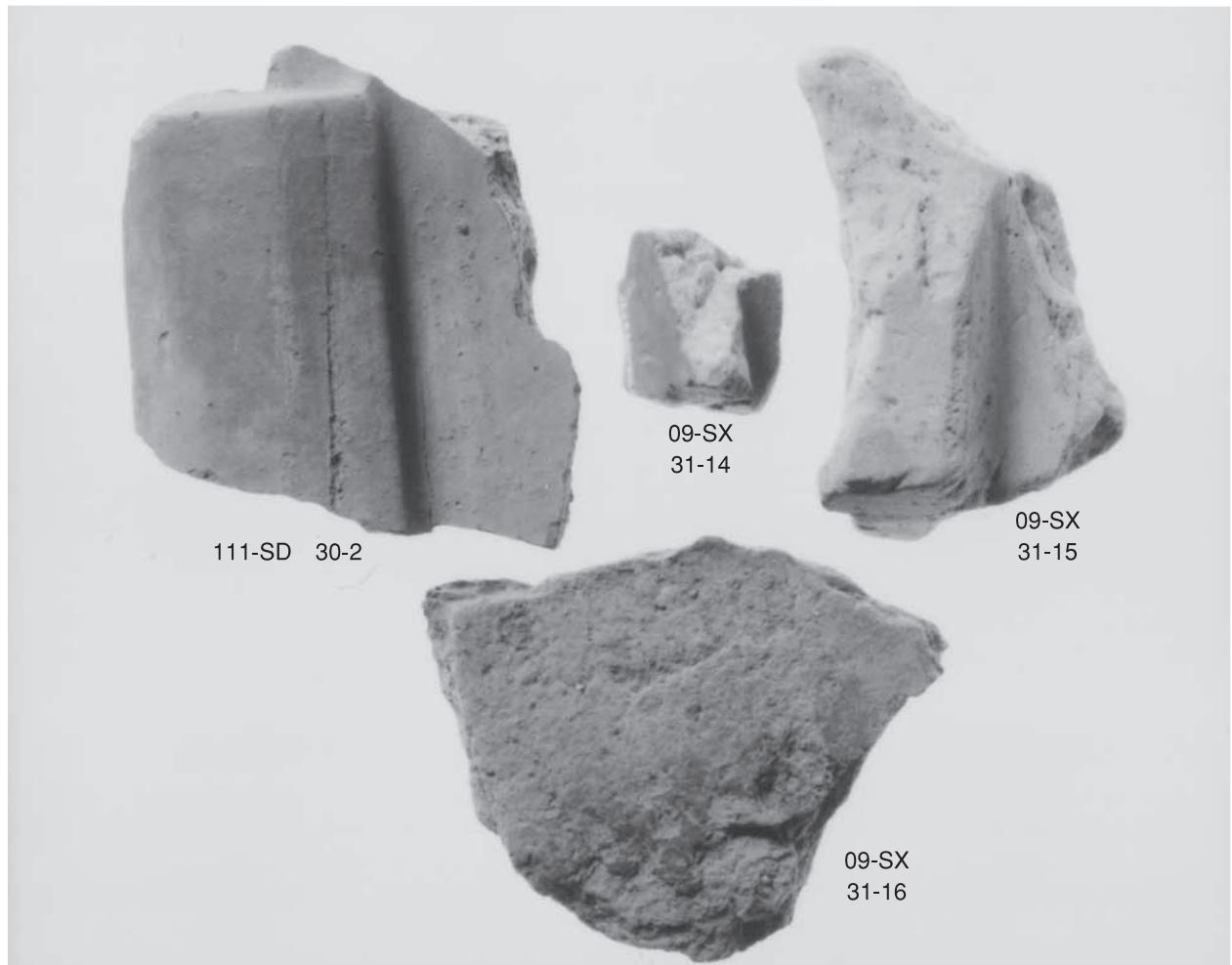
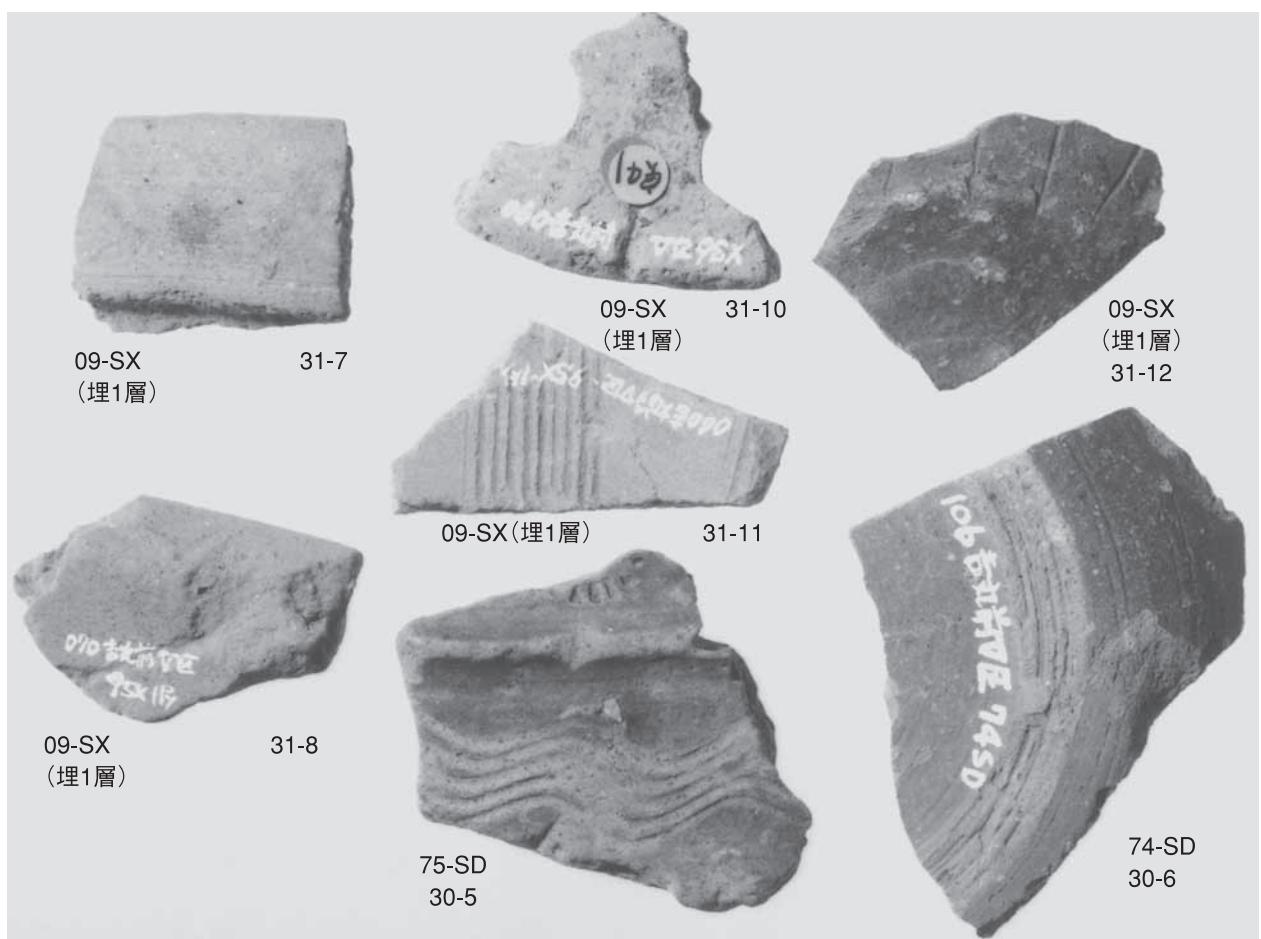
08
—
出土
土師
器
06
·
09
—
SD
出土
遺物



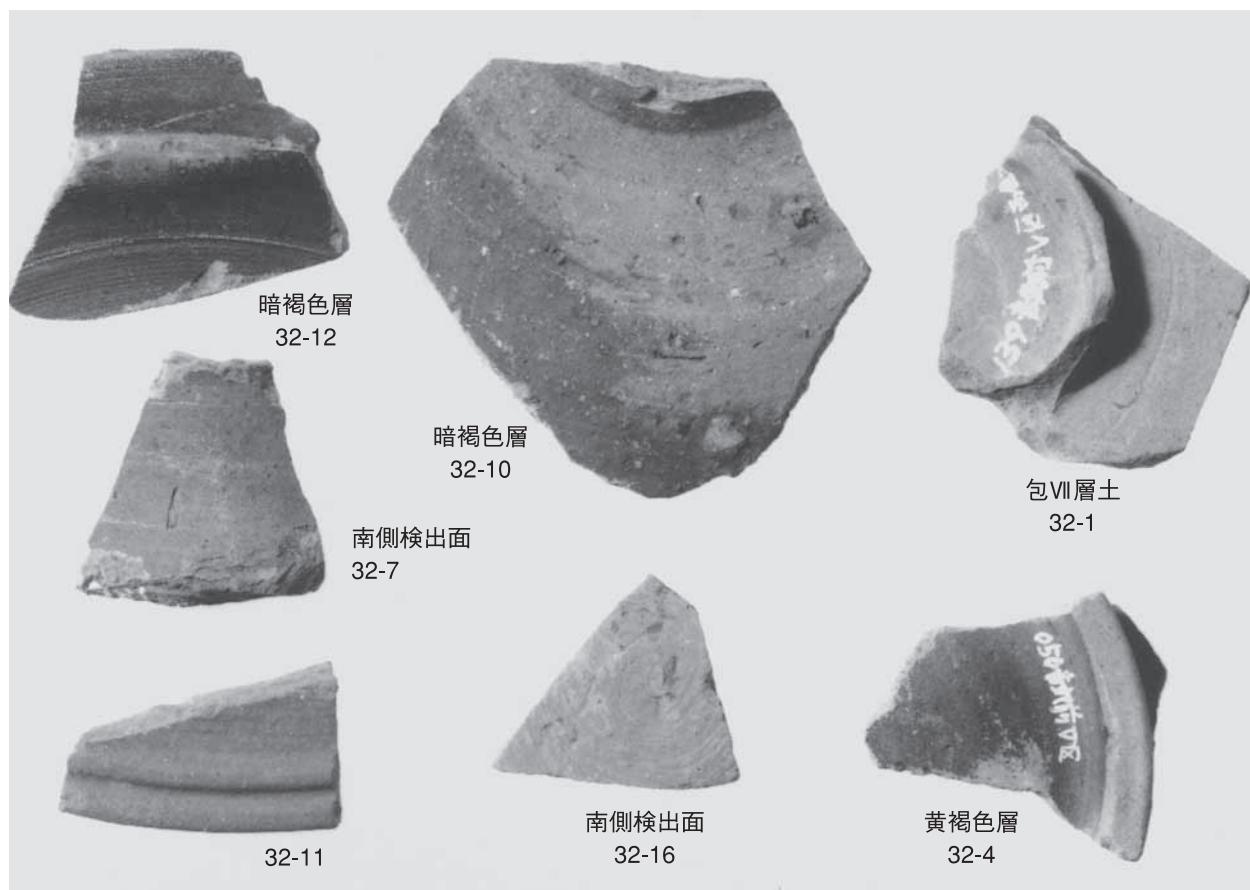
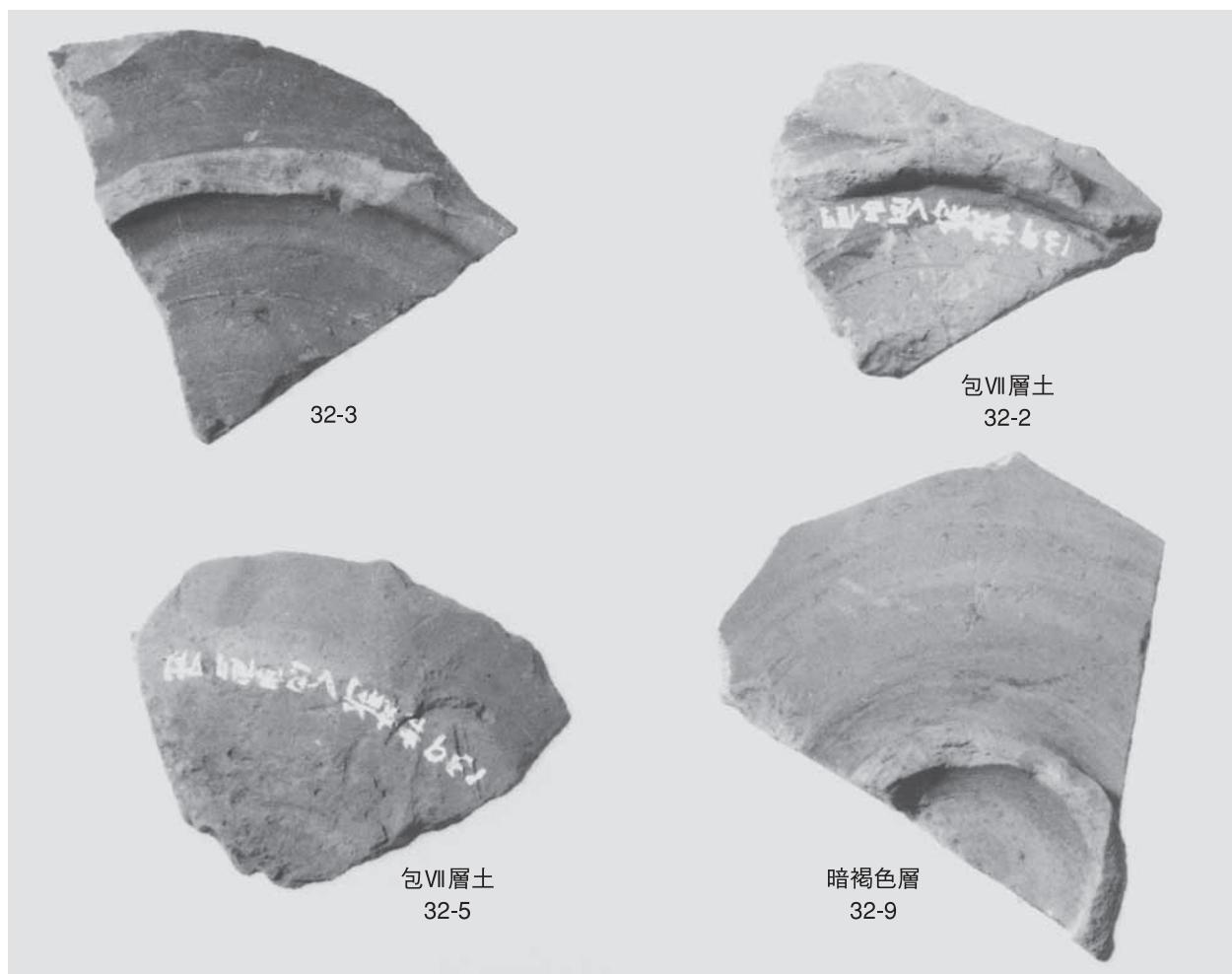
06
07
08b
09
— SD ほか出土遺物

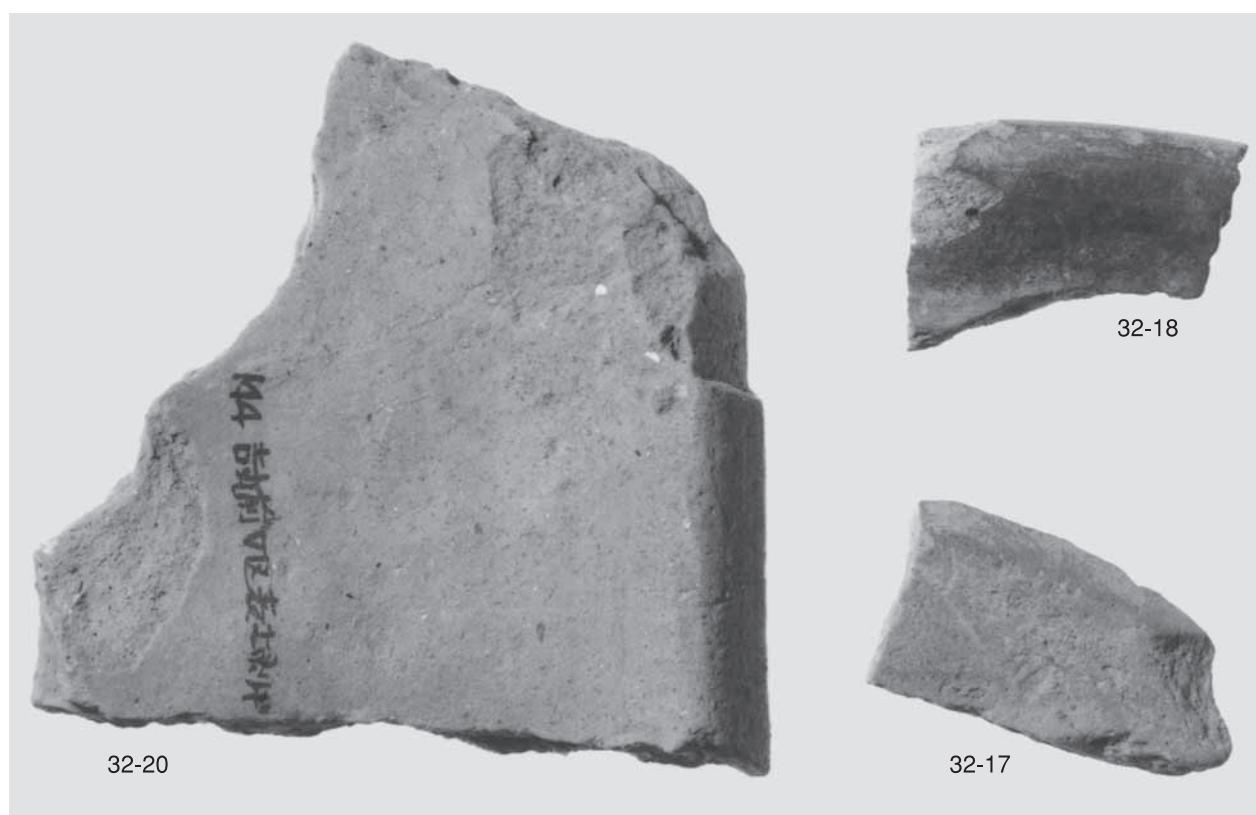
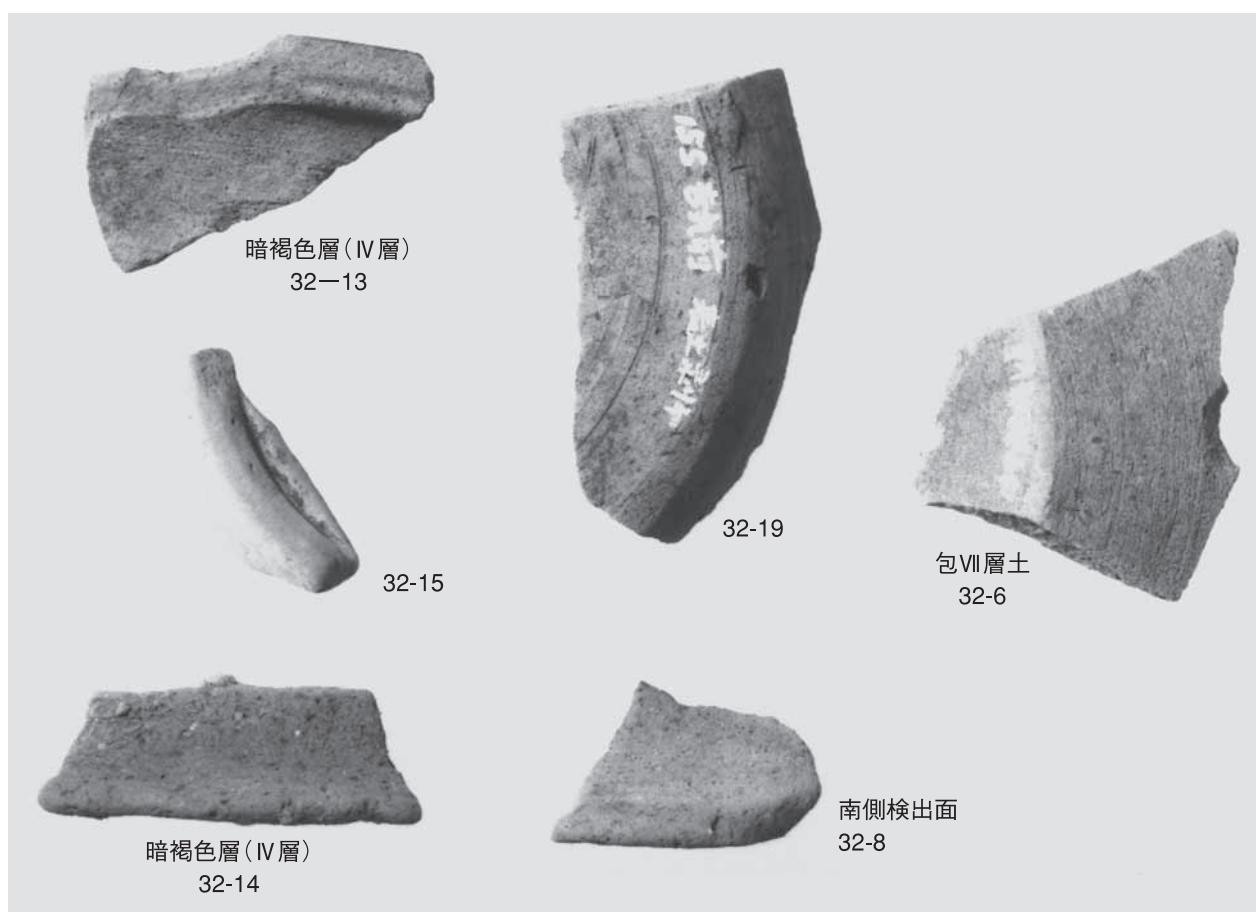


09
SD
ほか
出土
遺物



遺物包含層出土須惠器ほか



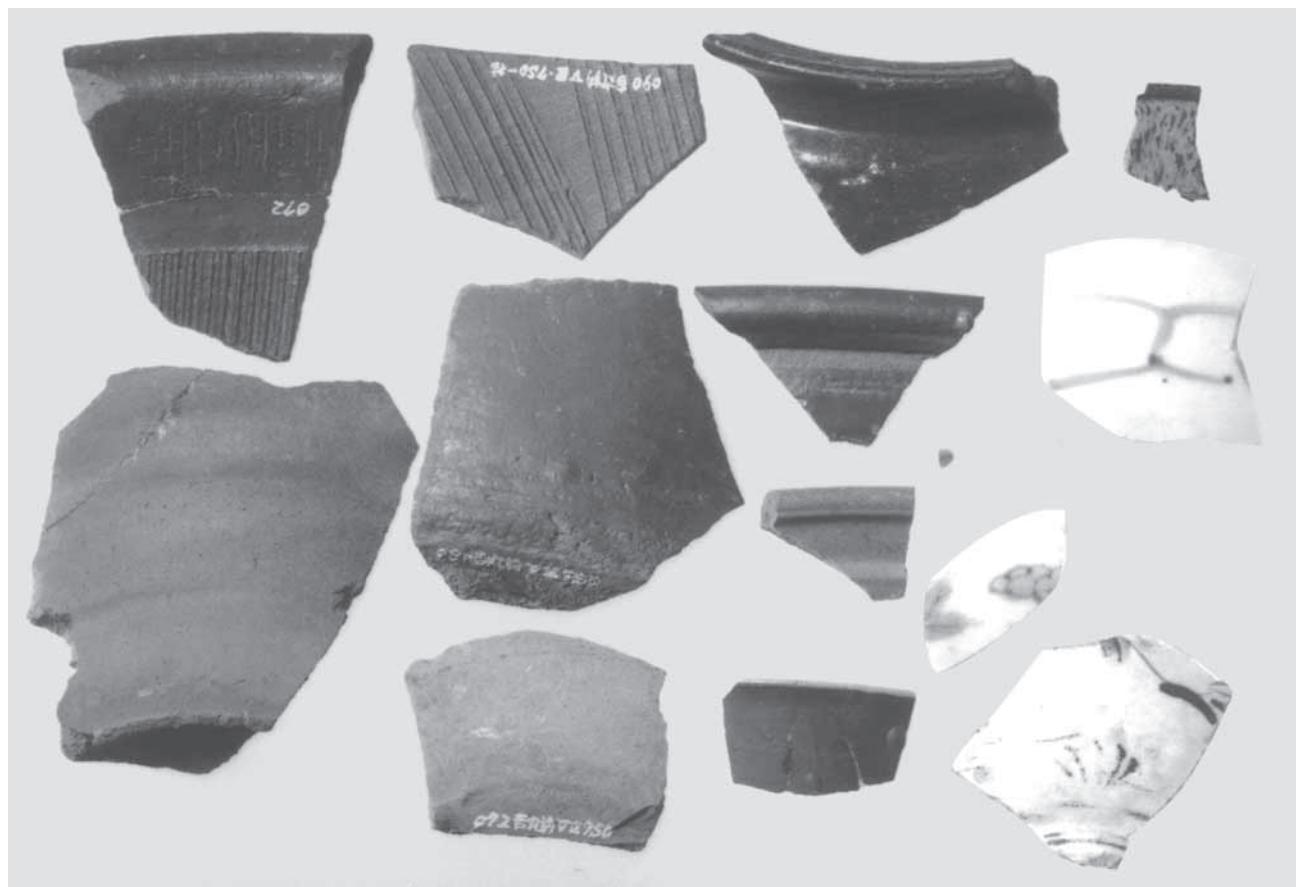




09-SX出土陶磁器



09-SX出土陶磁器



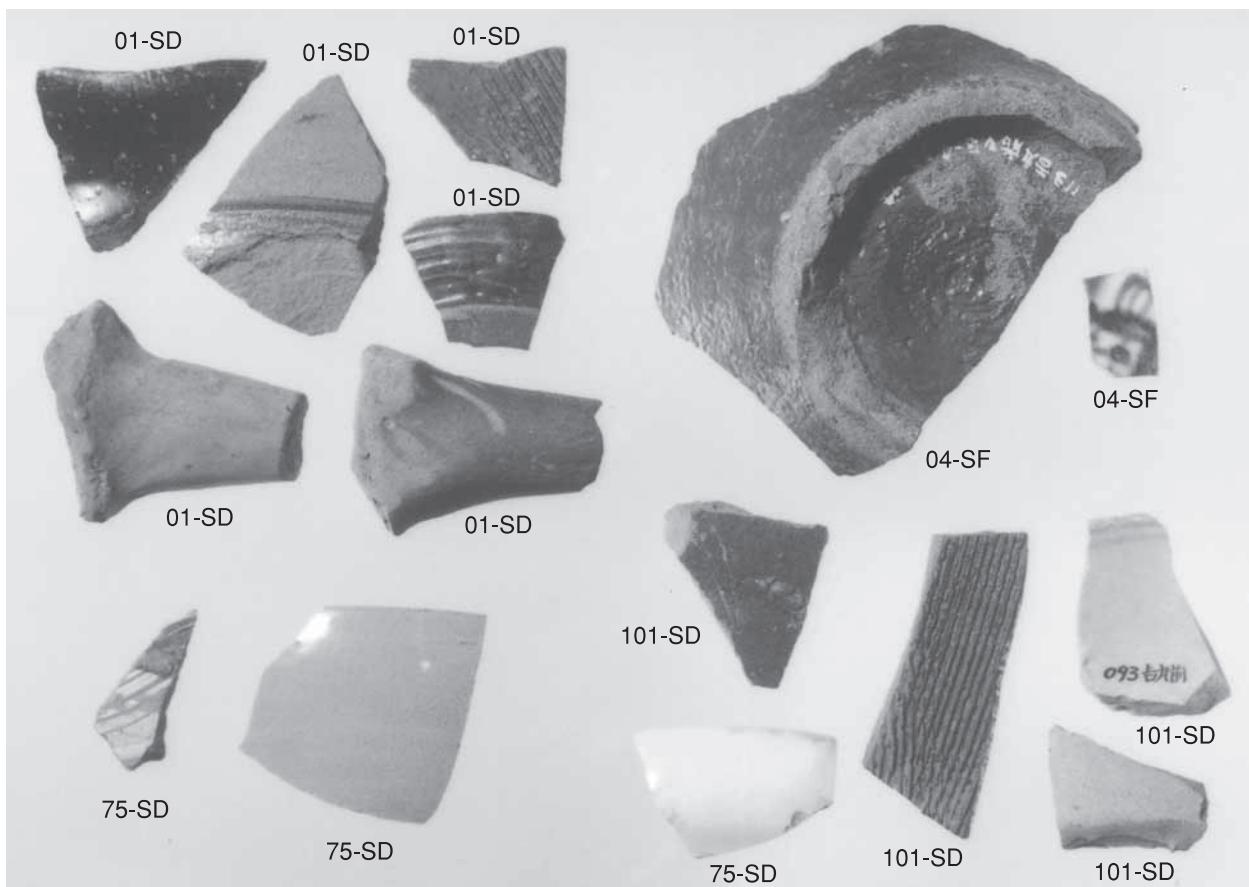
07-SD出土陶磁器



11-SD出土陶磁器

05-SD出土陶磁器

01 ·
75 ·
101 — SK ·
04 — SF 出土遺物 (陶磁器・砲弾・鉄滓)



報告書抄録

ふりがな	よしまるまえいせき							
書名	吉丸前遺跡							
副書名	一般国道208号玉名バイパス改築事業に伴う							
シリーズ名	熊本県文化財調査報告							
シリーズ番号	第272集							
編著者名	亀田 学							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒862-8570 熊本県水前寺6丁目18番1号							
発行年月日	2012年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
よしまるまえいせき 吉丸前遺跡	くまもとけんたまなしてらだ 熊本県玉名市寺田	43 206	491	32° 55' 25"	130° 34' 55"	2004年 6月 ~ 2004年 12月	約 2200 m ²	一般国道208号(玉 名バイパス) 改築 事業
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
吉丸前遺跡	城館、集落	縄文晚期、古 代、中世後期	土坑、溝、堅 穴建物、掘立 柱建物	縄文土器、土師 器、須恵器、陶 磁器				
要約	<p>吉丸前遺跡は、玉名市教育委員会の調査で中世後期の溝を検出し。南北220m以上、東西170m以上の連郭式城館と推定される。東側の隣接地には吉丸の地名が残り、近世には東側に集落が広がっている。中世の段階にも東側に広がっていた可能性があり、南側に隣接地として大堂の地名が残り、主要道としての地名と寺等が立地していたとする想定もある。</p> <p>この地は津に隣接した台地上にあり、重要な交通の地点として重要な位置を占めていたと考えられる。北東には菊池川の「津留」の地名も残る。</p> <p>また、中世の高瀬川の津として機能した丹倍津「伊倉」や菊池川・繁根木川・浦川に囲まれた津である「高瀬」も控える。</p> <p>今回は玉名市教育委員会の調査の中世後期の溝の続きを検出した。また、東側に溝が伸び、南北の別の区画溝を検出した。時期は多少ずれる可能性があるが、中世後期にさかのぼると考えられる。</p> <p>また、飛鳥時代にさかのぼる堅穴建物を検出した。古代の古い段階から交通の要衝として集落として立地した可能性がある。また、8世紀中葉～後葉と推定できる掘立柱建物も検出した。堅穴建物が主要な時期に建物の性格が問われる。</p> <p>また、掘立柱建物の時期は推定が困難であったが、中世に下るような建物も一部検出した。中世の区画溝の性格を意義づけるには確実ではないが、今後の周辺の調査も併せて意義づけられればと考える。</p> <p>また、遺物はあまり出土していないが、縄文時代晩期に推定できる土坑を検出した。貯蔵穴や墓として利用された可能性がある。</p>							

あとがき

調査終了から数年を経てようやくその成果の一部を公表できることに感謝します。

この一冊の本ができるまではたくさんの人々の協力があって作成されています。事業者や地元各位はもちろん、現地調査で遺物包含層や遺構を掘削して頂いた作業員の皆様。現地から持ち帰った遺物の洗浄・注記・接合・復元をしないと、実測（図面）や写真として記録できません。

本報告の例言にお名前を挙げた方々に作業をお願いする前にさらにたくさんの方々に協力をお願いしています。

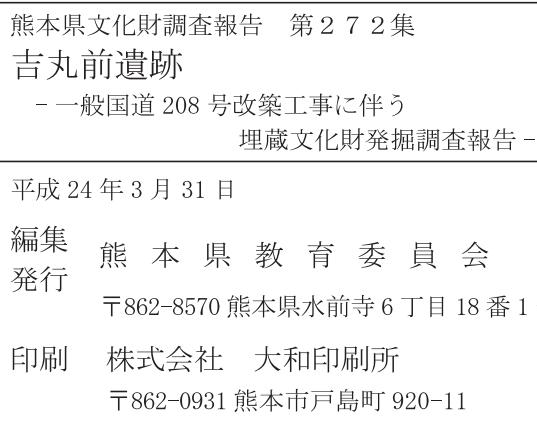
以下にお世話になった一部の方の御芳名を記して感謝の意を表します。

高木克巳、前田北征、山口義春、上田サワ子、松村健治、吉田ムツ子、岡本博子、小本三慧恵子、三森敏子、水村つよし、高木智恵子、平川ミツヨ、東信子、木下洋一、鹿本勝子、松村鈴子、岡田秀子、飯塚千恵美、山本美樹、品川タカ子、吉本スエ子、坂本弘子、眞田量之、松本肇、高西正也、武田昭男、谷口洋介、中村友、藤嶽康孝、田尻明、原田英佳、竹志田美奈子、田畠良勝、岡本昭洋、立野和彦、竹志田太、古川るみ子、杉本美智子、植尾寅吉、宮本てつ子、中川正美、坂田康夫、中西和人、森川耕司、堀田祐子、中嶋公輝、坂口沙耶花、福島寛啓、荒木康利、中村勇、廣田親雄、村上和子、大西ミツ子、田口一美、山内恵美子、大森ツヤ子、前田征由、谷口敬一、岡本昭洋、矢加部千佳子、渕上久史、田上俊子、高津千尋、北嶋百合子、坂門みつよ、入江賢二、永松サヤカ、西村清美、古川佐和子、尾浦公治、久木田仁美、高尾恵美、武田伸枝ほか（順不同）

本報告の編集者も報告書作業に携わる時間が少なく、かなりの部分を嘱託・作業員さんに頼らざるを得ませんでした。

現地調査及び報告書作成に携わって頂いた人々に感謝すると共に、本報告及び遺物等が地域で活用されることを希望します。

また、当遺跡の発掘の進展にあたり、地元諸氏や地元教育委員会や事業者の協力および理解があり、本報告書の刊行に至りました。記して感謝します。



この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第272集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：吉丸前遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015年12月8日